

『祖堂集』異文別字校證

——『祖堂集』中の音韻資料——

衣 川 賢 次

I. 序説

II. 異文別字校證

III. 『祖堂集』偈頌韻譜

附録（一）『祖堂集』偈頌詩韻

（二）『祖堂集』同音通用字

I. 序説

一、『祖堂集』の資料的位置

中国禪宗の燈史『祖堂集』20巻は、中国禪思想史、漢語史の研究にきわめて高い価値をもつ資料である。禪思想史においては、本書が現存する南宗禪燈史の最古の完本であり、ゆえに宋代以後の禪宗において参究された話頭（禪的對話・行爲のテキスト）の古形を留める資料として、研究の資料的基點たる位置にあるからである。漢語史においては、本書は唐末五代という中古漢語から近代漢語へと推移する時期の音韻、語法、語彙の特徴を探求すべき資料として注目されており、さらに唐末五代の東南部泉州において成立した資料として、敦煌・トルファンで發見された同時期の西北部成立資料との對比研究も期待されているからである。

『祖堂集』は五代南唐保大10年（952）に泉州招慶寺において、靜・筠二禪德によって編纂された。巻首に冠する泉州招慶寺主淨修禪師文燈の「祖堂集序」

および高麗僧巨儒の「海東新開印板序」には、次のように言う。

祖堂集序

泉州招慶寺主浄修禪師文燈述

夫諸聖興來，曲收迷子。最上根器，悟密旨於鋒鋌未兆之前；中下品流，省玄樞於機句已施之後。根有利鈍，法無淺深。矧乎聖人雖利生而匪生，聖人雖興化而寧化？苟或能所斯在，焉爲利濟之方？然遺半偈一言，蓋不得已而已。言教甚布於寰海，條貫未位於師承。常慮水涸易生，烏馬難辯（辨）。今則招慶有靜、筠二禪德，袖出近編古今諸方法要，集爲一卷，目之《祖堂集》。可謂珠玉聯環，卷舒浩瀚，既得奉味，但覺神清。仍命余爲序，堅讓不獲，遂援毫直書。庶同道高仁，勿以譏誚，乃錄云尔。（頁1/1）⁽¹⁾

諸佛祖師の出現は、すべての迷えるひとびとに救いの手をさしのべるためであった。機根のもっとも優れた者は、教えが説き出される寸前に、すばやくその核心を覺り、中下の者は、示された教えを聽いて樞要を見てとった。衆生の機根に優劣はあるが、理法そのものに深淺はない。まして佛陀は衆生を濟度されたけれども、實は濟度さるべき衆生というものはなく、教化されたけれども、實は教化すべきことは何もなかった。救う者と救われる者という區別を立てたとたんに、救済の手だてではなくなってしまふのである。諸佛祖師の教えの言葉がのこされているが、それは本意から出たものではなかったのだ。ただし今や教説は天下に廣まり、系譜の楷定が懸案となっているおり、その傳承に訛誤の生じていることが懸念される。折りしも、招慶寺に靜・筠という二禪德がおられ、最近編纂された、『祖堂集』という古今諸方の要諦集一卷をわたしに示された。それはまことに珠玉あい聯なるみごとな敘述で、ゆたかな禪の世界が繰り廣げられ、

1 『祖堂集』引用の頁数は、禪文化研究所影印本，1994／中華書局排印本，2007。

拝讀して精神の爽やかなるを覺えた。わたしに序を所望され、いったんは固くお斷りしたがかなわず、やむなく筆を執って蕪辭をつらねた次第である。禪の道に心を寄せられる諸賢には、拙い序のゆえをもって本書をお咎めにならぬようお願い申しあげ、これを序とする。

(海東新開印板序)

已上序文并《祖堂集》一卷，先行此土，尔後十卷齊到。謹依具本，爰欲新開印版，廣施流傳，分爲二十卷。以此先寫七佛，次腰天竺二十七祖并諸震旦六代，代有傍正，祖位次第，並以錄上。隨其血脉，初後聯綿，侶穆之儀，有孫有嫡也。其纂成，所以群英散說，周覽於眼前；諸聖異言，獲瞻於卷內。今以沙門釋匡僞所冀：中華集者，永祚惜法之痕；此界微曹，願敦弘禪之美。深慚洞徹，乞恕愆戾。一一上名，次第如後：

[目錄（從略）]

海東新開印版《祖堂集》，現其本迹者二百五十三員，并載於二十卷內；莫知迹者，不能具錄矣。（頁1/1）

以上の序文と祖堂集一卷が、先に當地へ傳來し、その後十卷本がすべて傳わった。いま謹んでこの完本を二十卷に分かつて開版し、廣く流布せしめることにした。すなわちまず過去七佛から始めて、天竺二十七祖および震旦六代へと繋ぎ、世代ごとにある正系傍系を秩序だてて順次に記録し、法脈に隨って父子孫々の系譜を立てた。かくして偉人たちの言葉が目の前に一覽でき、聖人がたの金言がこの卷物の中に通覽されるよう編成されたのである。いまこの中国の集録によって、佛陀の教えがつねに惜しみなく開示され、また本書が讀みつかれることによって、ここで刊行事業にたずさわった者たちが、禪の教えを弘める榮譽に永くあやかることを、わたしは願っている。とはいえ、識者のかたがたには徒らに言語を弄する非を寛

恕くださるよう、お願いする次第である。ここに収録した諸佛祖師の名は、以下のとおりである。

[以下目録（省略）]

海東にて新たに開版したこの『祖堂集』には、上に挙げた教化の跡の知られる二百五十三人を二十巻に収載した。資料を缺く者は、この収録の範囲に含まれない。

上掲の二序から、『祖堂集』はもと靜・筠二禪徳の撰述した規模の小さな1巻本であったのであり、その後10巻に増廣され、この10巻本が高麗に傳わり（この段階までは寫本だったであろう）、匡僞によって20巻に再編刊刻されたことがわかる。現行の20巻本は三段階の過程を経ているわけである。1巻本の成立年代は、現行20巻本の巻1および巻2に「今唐保大十年壬子歲」の紀年があることから、西暦952年であり、1巻本の範囲は現行20巻本の前2巻と推測される。文燈の序はこの原1巻本のために書かれたのである。10巻本の形跡は、目下この序に言及される以外皆無であって、1巻本から10巻本への増廣がいつ誰によって、またどのように行なわれたかを知ることはできない。高麗における20巻本の開版は巻1巻末の刊記「乙巳歲分司大藏都監彫造」から高宗32年（1245）と知られるから、増廣の期間はこれを下限とする。しかし『祖堂集』が中國本土でさして流布せず、早く失傳するのは、後出ながら權威のあった『景德傳燈録』三十巻の盛行によると推測されるから、その北宋大中祥符4年（1011）の入藏以後には、増廣はもはや必要がなくなっていたであろう。ならば増廣は1巻本の成立から60年の間ということになる。また匡僞は再編に際して、10巻本になかった新羅・高麗出身禪師の數章を増補している。これは馬祖系の禪の正系が海東にあることを示す意圖のもとにおこなわれた増補であった⁽²⁾。『祖堂集』は中國では宋代に失傳し、現行の高麗本が唯一の版本なのであって、高麗高宗32年開版の經板が高麗大藏經の補版として、今も韓國慶尚南

道伽耶山海印寺に保存されている。こうした現行本の状況からみて、『祖堂集』の匡僞増補の數章を除く中國撰述部分は、五代の舊貌を存し、そのもとづく唐五代の資料の原貌を伝えるものであることが豫想されるのである。『祖堂集』の資料價值はここにある。

一方、北宋の東吳僧道原によって編纂された『景德傳燈錄』三十卷は、原題を『佛祖同參集』（二十卷）といい⁽³⁾、景德3年（1006）に上進されるや、楊億・李維・王曙らの文臣が勅命を受けて刊修し、大中祥符2年（1009）に『景德傳燈錄』として刊刻宣布された。楊億の「刊修景德傳燈錄序」（金藏本）には、かれらが原本『佛祖同參集』に加えた修訂について以下のように述べている。

考其論議之意，蓋以真空爲本，將以述囊聖入道之因，標昔人契理之說。機緣交激，若拄於箭鋒；智藏發光，旁資於鞭影。誘導後學，敷暢玄猷，而拊掖之來，徵引所出，糟粕多在，油素可尋。其有大士示徒，以一音而開演；含靈聳聽，乃千聖之證明。屬概舉之是資，取少分而斯可。若乃別加潤色，失其指歸；既非華竺之殊言，頗近錯雕之傷寶。如此之類，悉仍其舊。況又事資紀實，必由於善敘；言以行遠，非可以無文。其有標錄事緣，縷詳軌迹，或詞條之紛糾，或言筌之猥俗，並從刊削，俾之綸貫。至有儒臣居士之問答，爵位姓氏之著明，校歲歷以愆殊，約史籍而差謬，咸用刪去，以資傳信。自非啓授針之玄趣，馳激電之迅機，開示妙明之真心，祖述苦空之深理，即何以契傳燈之喻，施刮膜之功？若乃但述感應之徵符，專敘參遊之轍迹，此已標於僧史，亦奚取於禪詮？聊存世系之名，庶紀師承之自。然而舊錄所載，或掇粗而遺精。別集具存，當尋文而補闕，率加采摭，爰從附

2 拙稿「祖堂集の校理」（『東洋文化』第83號 特集中國の禪2003）

3 椎名宏雄「朝鮮版『景德傳燈錄』について」（『駒澤大學佛教學部論集』第7號 1976）

益。逮於序論之作，或非古德之文，閒廁編聯，徒增揅釀，亦用簡別，多所屏去。訖茲周歲，方遂終篇⁽⁴⁾。

本書撰述の意圖を考えるに、真空の理を根本とし、これによって佛陀悟道の因縁を述べ、古人契悟の説を示そうとしたものであろう。機縁が激發するとき、師と弟子は兩者の放った矢の先端が相い接する如く契合し、そのときの智慧の藏から發する光は、修行を策勵する輔けとなり、根源の道を敷衍して、後學を導くものとなる。本書に收録された資料には取るに足らぬものもあるが、引用された原文からはもとの姿を知ることができる。佛陀がひとつの言葉で説いた法を、ひとびとは注意ぶかく聴き取ったのであるが、これはあまたの聖者がひとしく悟った真理であって、概略を擧げるだけでも十分に輔けとなり、わずかを取っただけでも修行の資糧となるものだ。もし更に潤色を加えてしまえば、要點がわからなくなってしまふ。それは中國と天竺の言語の違いによるのではないから、寶石にいらざる彫刻を施すことになりかねない。ゆえにこの類はすべて舊録のままとした。しかし物事は真實の記録によってこそ誤りなく傳わるのであるから、必ずや巧みな敘述でなくてはならず、言葉を遠くへ伝えるには、文飾のある表現でなければならない。本書のなかで物事の因縁と結末を詳細に述べている場合、敘述が混亂し、應酬の言葉が卑俗なものは、みな削り去って筋道を明瞭ならしめた。儒臣や居士との問答においては、爵位や姓氏を正し、曆書や史籍にてらして誤りがあれば、訂正して信を伝える手だてとした。芥子を針の先に投ずるとき契合、鋭い稲妻のごとき機鋒を再現することによって、真實の心を開示し、空の深い理法を祖述するのでなければ、どうして盲人の眼を開く力を發揮し、傳燈の名に値する書となりえよ

4 中華大藏經第74冊所收。

うか。もしただ師資の感應だけを記述し、參學遊行の跡のみを叙述するならば、それはすでに高僧傳に書かれており、わざわざ禪源諸詮集に倣う必要はない。また本書が法系に遵って排列しているのは、師承の系譜を記す意圖からである。舊録が収録作品の選擇を誤り、糟粕を採って精華を捨てている場合、別集があればそこから補うべきである。ゆえにこの類は採集につとめて増補した。本書に収録されていた序や論の作品には、古人の作とは認められぬものがいくつも混入し、むやみに冗長を重ねる結果となっているが、選別を加えて削除しておいた。かくして、一年の歳月をかけてようやく全體にわたる修訂を終えたのである。

ここに楊億らが道原の舊録（佛祖同參集）に對して施した修訂の4つの方針が敍べられている。

- (1) 佛説には手を加えない。
- (2) 敍述の混亂、言葉の卑俗を刊削し、簡潔文雅ならしめた。
- (3) 登場する俗人の姓氏官位を正し、曆書史籍によって信頼できる記述に改めた。
- (4) 収載作品から糟粕と偽作を削除し、別集から精華を増補した。

當代一流の文臣によるこうした全體にわたる修訂をへて⁽⁵⁾、再び上進された『景德傳燈録』は、勅命によって刊刻宣布、さらに大中祥符4年（1011）大藏經中に編入されて、權威をもって廣く江湖に迎えられ、以後の燈史編纂の規

5 楊億の文章の簡潔について、次のような記録がある。「真宗嘗以御製《釋典文字法音集》三十卷，天禧中詔學僧廿一人於傳法院箋注，楊大年充提舉註釋院事。製中有『六種震動』之語，一僧探而箋之，暗碎繁駁將三百字，大年都抹去，自下二句止八字，曰：『地體本靜，動必有變。』其簡當若此。」（文瑩『湘山野錄』卷中，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1984）これは天禧4年（1020）のこと（李一飛『楊億年譜』，上海古籍出版社，2002）。「楊文公嘗戒其門人，爲文宜避俗語。」（歐陽修『歸田錄』卷1，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1981）

範となったのである。

『祖堂集』と『佛祖同參集』は成書の年代の近いことから、もとづく資料の共通性が豫想される。ただし『祖堂集』と『景德傳燈錄』を比較してみると、『佛祖同參集』編纂に際して道原は『祖堂集』を見ていなかったことがわかる。また『祖堂集』が福建の泉州で収集された資料であるのに對し、道原の資料搜集範圍は江南から中原に及んでいる。楊億の書いた「佛祖同參集序」には、つぎのように言う。

東吳道原禪師者、乃覺場之龍象、實人天之眼目、慨然以爲祖師法裔、頗論次之未詳、草堂遺編、亦嗣續之孔易。乃駐錫輦轂、依止王臣、購求亡逸、載離寒暑⁽⁶⁾。

東吳の道原禪師は佛門の巨匠、じつに人天界の指標と目される方であるが、慨歎して言われた。「達摩の法系をいささか編定してみたが、いまだ十分とはいえない。宗密の散佚した禪源諸詮集を續輯することは、孔子の易十翼に比すべき意義ぶかい事業である」と。そこで都城に赴き、王臣^{わたくし}の邸に留まって、亡佚した関係の書物を購求されること一年に及んだ。

道原は散佚した『禪源諸詮集』百卷の續纂を意圖して、「達摩の法系」すなわち禪宗の歴史的資料を編纂しようとしたのであり、恵まれた条件下での資料収集ではあった。だが、楊億の「刊修景德傳燈錄序」のニュアンスからは、『佛祖同參集』が未整理で蕪雑なテキストだった印象を與える。少なくとも宋代文臣の評価はそうであった。『佛祖同參集』は綿密な推敲を経て『景德傳燈

6 楊億『武夷新集』卷7、石井修道「宋代禪籍逸書序跋考」（『駒澤大學佛教學部論集』第8號1977）

録』となったわけである。『祖堂集』と『景德傳燈録』を對比してみると、じつは『佛祖同參集』の位置に『祖堂集』があることがわかる。『祖堂集』はさほど流布することなく中國で散佚したことによって、かえって後世の改變を免れ、高麗本に原態を留めた。また高麗で刊刻されたゆえに古い形態や文字の誤りが未整理のまま放置され、閱讀には校訂と考證が必要となったのである。したがって校訛に際して、宋代文臣の表現規範を示す『景德傳燈録』は『祖堂集』校訂の重要な参考資料となすことができる。もっともこれは校訛レベルのことである。兩書のあいだの異同が、一則全體の解釋や思想的立場に關わる場合（つまり『祖堂集』と『景德傳燈録』ではすでに解釋が變わっている場合）があり、これは兩書の思想的性格を考える上で重要な問題を提起するもので、別に論すべきことに屬する。

二、『祖堂集』の校訂と音韻

『祖堂集』の版本はただ一種、高麗高宗32年開版の一本しかないのであるから、異本間に見いだされる異文というものは存在しない。しかし收録された禪僧の上堂說法や問答商量は、その人の語録や『景德傳燈録』をはじめとする燈史にも收録されることが多く、それらを異文に準ずるものとして『祖堂集』の文字校訂の参考とすることが可能である。またその種の異文がなく、文字が疑わしい場合、別字（誤字、あて字）考證を加えて正しい文字に校改する必要がある⁽⁷⁾。異文別字が発生する主な要因には、形似からくる字形的要因と同音近音による音韻的要因があるが、実際にはふたつの要因が重なる場合が多いのである。音韻的要因には『祖堂集』という口語性の強い本文の性格からみて、方言音や時代による音韻變化の現象に關わることがあり、これを考慮に入れる必要がある。文字校訂の過程で見いだされた通用現象の例を歸納して、それが偶然ではなく『祖堂集』のなかで系統的であるという情況ならば、また逆にこのことを校訂の音韻的根據として説明することが可能となる⁽⁸⁾。

ここで『祖堂集』における異文別字、すなわち訛誤の発生する原因について、かんがえておく必要がある。『祖堂集』は上述のように、現行のテキストは高麗本なのであるが、高宗32年（1245）開版以前に中國からもたらされた10巻本にもとづいている。『祖堂集』は唐五代を中心とする禪僧の説法、修行者や居士との問答の記録なのであるが、じつは本文に訛誤が多く見られる。本稿はその訛誤を校訂する際に音韻的要因を見だし、そこから『祖堂集』テキストの音韻資料の価値を明らかにしようとするものである。したがって、訛誤がどの段階で発生したのかを確認することは重要な前提である。（1）説法、問答の主人たる禪師が言い誤ったのか。（2）その説法、問答の記録者が聞き誤り書き誤ったのか。（3）『祖堂集』の編者が編集に際して、記録を寫しまちがえたのか。（4）高麗での筆寫、編定、開版の際に誤ったのか。原因は場合によりいくつもの可能性を想定でき、またひとつとは限らず重複錯綜するケースもあろう。漠然と想像するならばそういうことになるのであるが、具体的に個々の例を検證してみると、（4）の高麗での訛誤と認められるものは、ただ次のような例のみである。

問：「良禾不立米，如何濟得万人飢？」（卷10，隆壽章，頁395/484）

この意味不明の「良禾不立米」5字は、東禪寺版『景德傳燈錄』卷18漳州隆

7 異文と別字については松尾良樹「音韻資料としての『太公家教』」に、「敦煌寫本に於ける誤字は、資料の性質により二通りに分れる。第一は別字であって、一つの寫本において正しい表記Aが別の表記Bで書かれている場合、Bを別字と稱する。何が正しい表記かは、前後の文脈との関連で定められる。第二は異文であって、同一作品の各寫本間に於ける表記の異同C、D、E…がある場合、それぞれを異文と稱する。」（『アジア・アフリカ言語文化研究』第17號1979）

8 趙振鐸「唐人筆記裏面的方俗讀音」（2000、『辭書學論文集』商務印書館2006）、邵榮芬「敦煌俗文學中的別字異文和唐五代西北方音」（1963、『邵榮芬音韻學論集』首都師範大學出版社1977）の手法を範とした。

壽興法大師紹卿章が「齋糧不畜粒」と作るのに據って改めるべく、これはいわゆる刻工が字劃の繁多なるを嫌ってズボラをやった類いであろう。

禪籍テキストの訛誤の問題について、わたしはかつて北宋末の陸庵善卿『祖庭事苑』（1108）の校訛を分類整理し、禪籍テキストに訛誤の多い原因とその特徴をかんがえたことがある⁹⁾。禪僧の多くは知識階級の出身で、内外典に通じ、標準音を話した。ただし、談話や偈頌に出身地や活動地の方言音がまじるのは、現代の知識人が標準音に囲まれながら、なお方言が雜り方言音が脱けきらないのを思えば、怪しむに足りない。説法にせよ對話にせよ、それが傳わるのは、まず耳で聽いて文字に記録することを通じてである（その際には書寫言語の文體に整理される）。禪籍に同音近音による通用字が多いのはそのためである。しかも唐五代の著名な禪匠たちは例外なく、みずからの説法を文字記録に留めることを厳しく禁じた。しかし密かに記録をのこす者は跡を絶たず、秘密文書のようにあつかわれ、かくして語録ができたのである。禁ぜられ秘されて傳わった極私的ノートであったから、おおっぴらに文字の檢證も推敲もなされなかったであろう。したがって禪籍のテキスト問題は、著述された本文が傳寫の過程で訛誤を生じたという通常の書物の場合と異なり、最初の記録にすでに訛誤があった。しかも禪宗は文字記録を重んじなかったからこれを放置して、文字の穿鑿、校讐などということには意をもちいなかった。したがって禪籍にはおびただしい訛誤が存する、というものである。宋代になると變化がおこり、唐五代の禪僧の語録や燈史が編纂刊行されるようになり、それらの序文を見ると、傳承テキストには訛誤がおびただしい、と例外なく書いてある。それでも陸庵善卿のような校讐家はまれで、當時『祖庭事苑』のような書物は歡迎されず、これにつづく校讐の書物はついにせず、日本江戸時代京都の無著道

9 拙稿「禪籍の校讐學」『田中良昭博士古稀記念論集 禪學研究の諸相』、大東出版社、2003。

忠（1653-1744）まで待たねばならなかった。

古代の中國の書物には、訛誤がつきものである。したがって精審に校訛をなすことが讀書という行爲なのであった。寫本は無理からぬとしても、刊本でさえ（坊刻本であろう）、「印板文字，訛舛爲常。蓋校書如掃塵，旋掃旋生。」（周煇『清波雜誌』卷8）とまで言われる。ならば禪籍のみが特に劣悪というわけでもないようなのだが、その成り立ちから、形誤よりも音誤の多いことが特徴だと言えよう。本稿であつかう、音韻にかかわる訛誤は、少數の孤立して現れるもののほかは、大部分漢語史的に説明のつく現象である。ということは、これらの訛誤が中國で發生したものとみなしてよいことになろう。高麗では『祖堂集』に増補はしたが、本體に手を加えたりはしなかった模様である。

『祖堂集』は編纂物であって、一人の著述にかかる作品ではない。したがって訛誤が泉州で收集された原資料にもとから存したのか、編集者の手が加わって發生したのかを確定することは困難で、個々のケースにおいて對話者の經歷と資料の流傳を衡量するしかない。

『祖堂集』には340首にもものぼる韻文が収載されている。ほとんどは禪僧による偈頌の類であるが、ほかに42人の祖師の章の末尾に附せられた淨修禪師の讚や、歌行16首、讖19首、銘1首がある。これらの韻文作品の押韻情況をしらべて、實際の字音を反映した通押現象を把握し、これらを異文別字校證の旁證ともなうる。

『祖堂集』本文の異文別字と収載韻文の押韻という二種の音韻資料を利用する目的は、『祖堂集』の正確な本文を確定することにあるが、同時にこの作業を通じて唐末五代南方の音韻情況の一端が明らかになるのではないかという期待がある。唐末五代の漢語音韻研究は敦煌發見の漢藏等の對音資料、注音資料、變文・講經文・曲子詞等の俗文學資料に依據した西北方音（またはより限定した河西方言）の解明に大きな進展を見た⁽¹⁰⁾。これはさいわいにも綴音文字をもつチベット語その他西域胡語との對音資料の研究によって、音價の推定

が可能となったからで、従來の傳統的な音切資料と韻文の押韻、異文別字の通用關係から、『切韻』（『廣韻』で代用）の標準音系との差異を測る方法を突破したからであった（ただし對音資料には異言語對應の嚴密な檢證が大きな問題としてある）。綴音に慣れた現代からみれば、漢字によって漢字音を類推するのは隔靴搔痒の感を免れないが、その種の資料が多くは得られない以上、蓄積されてきた傳統的方法をもちいて、従來の研究の缺を補う試みも、意義のないことではない。しかし傳統的方法ではその性質から言って、細かい議論はとうていできないのであるが。

『祖堂集』のもとづく資料群は、時代的には中晩唐から五代宋初に及び、地域的には主に江南に形成されて泉州に流入したものと推測される。唐末五代の南方音を反映するまとまった音韻資料は、目下南唐の徐鍇『說文解字繫傳』に附せられた朱翱の反切⁽¹¹⁾があるのみであるから、『祖堂集』の音韻資料は、實際の言語使用の面から、唐末五代南方の音韻情況を知る一助となるであろう。敦煌資料と對照できる例をひとつ擧げてみよう。卷9落浦章に「神劍歌」一首が收録されている。敦煌遺書にこれを洞山良价の作とする寫本P. 3591號があり、兩テキスト間には異同が多い。

斬邪徒，盪妖孽，生死榮枯齊了決。三尺靈蛇覆碧潭，一片晴光瑩寒月。
 （『祖堂集』卷9落浦章「神劍歌」第3韻段，頁339/413）

「三尺靈蛇覆碧潭」の「覆」字はP. 3591號寫本では「赴」である。しかし

10 代表的な成果に、羅常培『唐五代西北方音』（國立中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之十二 1933）、高田時雄『敦煌資料による中國語史の研究』（創文社1988）がある。

11 王力「朱翱反切考」（『龍蟲並雕齋集』第三冊 中華書局 1982）、『漢語語音史』第5章「晚唐—五代音系」（中國社會科學出版社 1985）。

一句の意味から考えて二字とも疑わしい。「神劍」を「碧潭」に横たわる「三尺靈蛇」に見立て、その發する白い光が夜空にかかる冷たい月と映えあう、というのであるから、「伏」字であるべきだろう。「覆」の音義につき、慧琳『一切經音義』はつぎのように言う。

覆 敷務反，見『韻英』，秦音也。諸字書音義爲敷救反，吳楚之音也。賈逵『國語注』云：「覆，蓋也，蔭也。」……………（卷1，大唐三藏聖經序⁽¹²⁾）

覆 敷務反（敷母遇韻合口三等去聲：秦音）

敷救反（敷母宥韻開口三等去聲：吳楚之音）

赴 芳遇切（敷母遇韻合口三等去聲）〔廣韻〕

伏 扶富切（奉母宥韻開口三等去聲）〔廣韻〕

とすると、「覆」「赴」「伏」三字の關係はつぎのようになる。宥韻字「伏」を『祖堂集』が近音の宥韻字「覆」で書き、それは「吳楚之音」南方音による通用借字であった（『集韻』宥韻：「覆，扶富切，蓋也。通作伏」）。敦煌遺書では宥韻字「伏」を遇韻字の「赴」で書いたが、それは「秦音」北方音による通用借字であった。北方ではすでに流攝唇音字の遇攝への合流が廣くおこなわれていたわけで、敦煌俗文學作品にはこの種の異文が多く見られる。

綠牆弊例（薜荔）枝枝淥（綠），赴（覆）地莓苔點點新。（『廬山遠公話』，『敦煌變文校注』253頁⁽¹³⁾）

12 徐時儀『一切經音義三種校本合刊』上冊，528頁，上海古籍出版社，2008。

13 黃征、張涌泉『敦煌變文校注』中華書局，1997。

淨能引皇帝直至婆羅樹邊看樹，皇帝見其樹，高下莫惻（測）其涯，枝直赴（覆）三千大千世界。（『葉淨能詩』，同339頁）

且脣不附（覆）齒，髮不附（覆）耳。（『晏子賦』，同370頁）

得聖超凡不作聲，臥龍長布（伏）碧潭清。（S. 2165龍牙和尚偈，『敦煌詩集殘卷輯考』455頁⁽¹⁴⁾）

附 符遇切（奉母遇韻合口三等去聲）[廣韻]

布 博故切（幫母暮韻合口一等去聲）[廣韻]

上掲「龍牙和尚偈」は「神劍歌」の描寫とよく似ている。「神劍」はこの龍のイメージである。龍牙居遁（835－923）は撫州南城縣（江西省）の人。『禪門諸祖師偈頌』（續藏第116冊）に95首の偈が存する。「伏」「覆」などの流攝唇音字が唐代の北方で遇攝に變化していたことが、この異文の背景にある。この現象は中晩唐期の詩文、敦煌變文の押韻にも見えるところであるが⁽¹⁵⁾、『祖堂集』所收の偈頌にもその例がある。

[卷4. 石頭章，參同契] 語語矩麤祖苦覩姥處御付注句遇住遇悟互固醋布步路耳[固]度暮母厚（遇攝語麤姥御遇暮、流攝厚合用）

[卷2. 闍夜多章，淨修禪師讚] 祖古普土姥畝厚（遇攝姥、流攝厚混用）

[卷15. 歸宗章，偈] 午怙土瞽祖姥路度措暮覆宥（遇攝姥暮、流攝宥合用）

[卷7. 雪峯章，頌] 取麤畱[富]宥（遇攝麤、流攝宥合用）

14 徐俊『敦煌詩集殘卷輯考』中華書局，2000.

15 唐作藩「晚唐尤韻唇音字轉入虞韻補正」『漢語史學習與研究』，商務印書館，2001.

これら流攝唇音字「母」「畝」「覆」「富」が遇攝字と押韻する石頭希遷（701－791）、歸宗智常（8－9世紀）、雪峯義存（822－908）、淨修禪師文燈（892－972）らの偈頌の例から、この現象の中晩唐期南方への浸透が知られ、移行期にあったことがわかる。

なお、注意を要するのは、音韻研究に際して『祖堂集』の本文校訂をなすべきことである。というのも上掲の雪峯の頌は、従來の校本がみな處理を誤っているからである。

世中有一事，奉勸學者取。雖無半錢活，流傳歷劫富。（頁288/354）

「富」は韻字であるが、「畚」（通攝屋韻）のままでは韻も合わず意味も通じない。『雪峯語録』卷下「雪峯眞覺大師偈頌」勸人（續藏第119冊／『全唐詩續拾』卷47⁽¹⁶⁾）を参照すれば、「畚」は「富」の誤りであることがわかり、一首は法身を暗示し、「半錢活」と「歷劫富」が對を成している。しかるに佛光山禪藏本⁽¹⁷⁾、岳麓書社本⁽¹⁸⁾はともに放置し、中州古籍出版社本⁽¹⁹⁾は「逼」（曾攝職韻）に誤って校改し、かつ三校本ともつづく二首と誤って合し12句を一首となしている。さらに譚偉『祖堂集文獻語言研究』⁽²⁰⁾は「畚」を「塞滿充滿之義，房六切」などと臆斷している。また韓維善「《祖堂集》詩韻考」⁽²¹⁾、「《祖堂集》詩韻止、蟹二攝考」⁽²²⁾は誤った資料にもとづいたために、分析にまっ

16 陳尚君輯校『全唐詩補編』下冊，1452頁，中華書局，1992。

17 佛光大藏經禪藏史傳部『祖堂集』，佛光出版社，1994。

18 吳福祥、顧之川點校『祖堂集』，岳麓書社，1996。

19 張華點校『祖堂集』，中國禪宗典籍叢刊，中州古籍出版社，2001。

20 巴蜀書社，俗文化研究叢書，2005。

21 『甘肅高師學報』第9卷第3期，2004。

たく信頼を缺く結論となった。これらはもちいる資料に對して慎重な校訂を怠った結果であり、資料の校訂こそは音韻を論ずるときもっとも緊要な前提といふべきである⁽²³⁾。

Ⅱ．異文別字校證

この異文別字校證では、『祖堂集』の異文別字の處理に際し、音韻上の解釋によって明快に解決できる例、すなわち異文別字の發生が音韻上の通用現象に起因する例をあつかう。

まず、『祖堂集』の本文に同音通用字の多いことを舉げて、『祖堂集』というテキストの性格を確認しておきたい。

【1】同音通用例

[1] 天寶中御史盧液，是北宗普寂門徒，奏會聚徒洛陽。（卷3，荷澤和尚章，頁110/159）

「盧液」は盧奕を指す。『宋高僧傳』卷8唐洛京荷澤寺神會傳に並行記事があつて、文字を訂することができる。盧奕は『舊唐書』卷187忠義傳下、『新唐書』卷191忠義傳に立傳され、御史中丞になったのは天寶11載（752）であり、宗密『圓覺經大疏鈔』の記載に據れば、盧奕の奏上は翌天寶12載であつたことが知られる（『神會の語録』280頁，禪文化研究所，2006）。「奕」「液」二字は同音、『廣韻』では羊益切、入聲昔韻。

[2] 因于迪相公問紫玉：「佛法至理如何？」（卷4，藥山和尚章，頁170/228）

22 『甘肅廣播電視大學學報』第14卷第2期，2004。

23 『祖堂集』偈頌韻字の訂誤は12箇所にのほる。附録（一）『祖堂集』偈頌詩韻 參照。

「于迪」は于頔を指す。本書卷14紫玉和尚章にも「襄陽廉帥于迪」として登場するが、『宋高僧傳』卷10唐唐州紫玉山道通傳、『景德傳燈錄』卷6唐州紫玉山道通禪師章に據って文字を訂す。『舊唐書』卷156、『新唐書』卷172の傳記によると、于頔が襄州刺史、山南東道節度使に任ぜられたのは貞元14年(798)であったことが知られる。「頔」「迪」二字は同音、『廣韻』では徒歷切、入聲錫韻。

[3] 唯有侍郎韓庾獨言不是佛光。(卷5, 大顛和尚章, 頁182/240)

「韓庾」は韓愈を指す。これは唐憲宗が元和14年(819)に鳳翔法門寺から佛骨を宮中に迎えたときのことである(『舊唐書』憲宗紀下)。「愈」「庾」二字は同音、『廣韻』では以主切、上聲麌韻。

以上3例はいずれも固有名詞を同音字で表記した誤りである。固有名詞は固定した表記をもつにもかかわらず、このように「あて字」を平氣で使うところに、『祖堂集』という書の性格がうかがえる。すなわち『祖堂集』は充分な校訂を経ていない、あるいは廣く讀まれなかった書物である。したがって異文別字(誤字あて字)が多い。一般に、異文別字は形似と同音・近音を發生の主たる原因とする。しかし本稿では『祖堂集』の異文別字を訂正し、これをてがかりに、異文別字に反映した唐末五代の音韻情況を知ることが目的とするので、上掲のような『廣韻』で同音の場合は取り擧げない[附録(二)『祖堂集』同音通用字 参照]。また、形似による異文の場合は、近音の原因をあわせもつとかがえられるケースを〈參考例〉として擧げ、あつかいを區別する。

まず『祖堂集』の異文別字の比較的わかりやすい例を4條擧げてみる。

【2】方言音によって混同された例

卷14百丈章は、百丈懷海和尚（749－814）の俗姓を「黄」と書いている。

[4] 百丈和尚，嗣馬祖大師，在江西。師諱懷海，福州長樂縣人也，姓黄。（頁536/636）

しかし陳詡の撰する「唐洪州百丈山故懷海禪師塔銘」が、

大師，太原王氏，福州長樂縣人。遠祖以永嘉喪亂徙于閩隅。（『勅脩百丈清規』卷6）⁽¹⁾

とするのを始め、『四家語録』、『五燈會元』みな「王」である（『景德傳燈録』は俗姓を記さない）。『祖堂集』の「黄」はいったい何に據るのか。宋代の隨筆にこの二字混同の指摘がある。

黄王不分，江南之音也。嶺外尤甚。柳子厚《黄溪記》：「神王姓，莽之世也。莽嘗曰：余黄虞之後也。黄與王，聲相通。」以此考之，自唐以來已然矣。（朱翌『猗覺寮雜記』卷下）⁽²⁾

〈黄〉と〈王〉の音を混同するのは、江南音の特徴であり、嶺南で特にひどい。柳宗元の「遊黄溪記」に「ここの神の姓は王氏、王莽の世のことである。莽はかつて『われは黄帝、舜帝の後裔である』と言っていた。〈黄〉と〈王〉とは音あい通ずるのである。」という。してみれば、混同は唐以來久しいのである。

1 『勅脩百丈清規』卷6，大正藏第48冊，1156c。

2 『猗覺寮雜記』卷下，筆記小説大觀第四輯。

浙之東，言語黃王不辨，自昔而然。王克仁居越，榮邸近屬也。所居嘗獨煨於火，於是鄉人呼爲王火燒。同時有黃瑰者，亦越人，嘗爲評事，忽遭臺評，云：「其積惡以遭天譴，至於獨焚其家。」鄉人有黃火燒之號。蓋誤以王爲黃耳。邸報既行，而評事之隣有李應麟者，爲維揚之幕，一見大驚，知有被火之事，亟告假而歸。制使李應山憐之，饋以官楮二萬。及歸，則家無患，乃知爲誤耳。蓋黃無辜而受王之禍，而李無望而得二萬之獲，殊可笑。（周密『癸辛雜識』續集下）⁽³⁾

浙江東部の言葉では〈黄〉と〈王〉を混同するが、それは昔からそうなのであった。王克仁は越に住んでいた。王榮邸の近い親族である。その家だけが火事で焼けたことがあった。村人は「王火焼」と呼んだ。そのときやはり越の人で大理評事の黄瑰という者が、不意に御史臺の彈劾を受け、「悪事を重ねた報いに、天罰で家を焼かれるに至った」とされた。村人は「黄火焼」と呼んだ。つまり〈王〉を〈黄〉と誤ったのである。その傳令が発せられたが、當時揚州の幕府に勤めていた、黄評事の隣家の李應麟はこれを見てびっくり、自分の家も累焼したかとおもい、急いで休暇をとって歸った。殿司制使の李應山は氣の毒に思い、火事見舞いに官楮二萬を贈った。歸てみると家に別状なく、誤報だと知ったのであった。黄はなんの罪なくして王の禍を受け、李はなんの人の望なくして二萬の楮を得た。まったく馬鹿げた話である。

吾鄉妙喜謂之杼山，夏后杼嘗巡歷於此，故名。其西曰夏駕山，又有所謂夏王村者，皆是也。今乃訛夏王爲下黃，夏駕爲下夾，且名其上曰上夾，以成僞焉。（同上）

3 『癸辛雜識』續集下，唐宋筆記資料叢刊，中華書局，1988。

わたしの故郷妙喜が杼山と呼ばれるのは、その昔夏后氏の杼がここを
巡歴したのにちなんでいる。その西を夏駕山といい、いわゆる夏王村が
あるのもそのためである。ところが今では訛って夏王は下黄となり、夏
駕は下夾となり、しかもその上を上夾と言う始末で、まったくデタラメ
なことになっている。

二字は『廣韻』では「黄」は匣母、「王」は云母。

黄 胡光切（匣母[v]唐韻平聲）／王 兩方切（云母[j]陽韻平聲）

がんらいこの匣云二母は上古から六朝時代までは同紐であり、隋唐時代に北
方では匣母から云母が分化獨立したが、南方では依然として同聲不分であっ
た。第一の例に引かれる柳宗元「遊黃溪記」は元和八年（813）に永州で書か
れた。第二の例は南宋末13世紀の越州、第三の例は周密の郷里湖州のことを述
べている。これらの例はいずれも「王」「黄」の音が未分のうちに「王」を
「黄」と表記した實例で、南方方言の特徴であり⁽⁴⁾、匣喻（云、以）二母の混
合は原本『玉篇』、李善『文選注』⁽⁵⁾、『說文解字繫傳』朱翱反切⁽⁶⁾など南方系
の音韻資料に一貫する特徴である。

「黄」「王」二字の混同は韻から言えば、宕攝唐韻と陽韻の同用である。『祖
堂集』所收偈頌には陽唐同用が7例見い出せることも、二字の混同が偶然では
ないことの旁證となしうる。

卷4	丹霞章	孤寂吟第8韻段	良陽堂唐霜陽
卷7	雪峯章	偈	章陽光唐

4 趙振鐸『中國語言學史』256頁，河北教育出版社，2000。

5 大島正二『唐代字音の研究』101頁，汲古書院，1981。

6 王力『漢語語音史』233頁，中國社會科學出版社，1985。

卷10	玄沙章	頌	常陽光唐王陽
卷17	岑和尚章	偈	香常陽光唐
卷19	香巖章	指古人跡頌第2韻段	當唐量傷妨陽
卷19	香巖章	清思頌	堂唐詳常陽
卷19	靈雲章	玄沙送師頌	常陽光唐王陽（上の玄沙偈に 同じ）

「黄」「王」二字は、このように『祖堂集』の時代においては聲母韻母ともに通用される状況にあった。百丈懷海の俗姓は、やはり塔銘の「王」に據るべきであるが、「黄王不分，嶺外尤甚」というから、『祖堂集』が編纂された泉州ではむろんのこと、懷海も福州の人であったから、ご自身さえ「黄」と發音していたにちがいない。そこから生じた異文であったとおもわれる。現代方言でも南方ではなお多く同音である。（現代福州音，王＝黄 [uɔŋ 陽平]）

【3】中古音が近いために發生した異文

『景德傳燈錄』以降の燈史の傳記にみえる祕魔巖和尚（永泰靈湍嗣）は、『祖堂集』のみ「閉魔巖」と書かれている。

[5] 閉魔巖和尚，嗣馬祖。師常提杈子。每見僧參，驀項便杈云：「那个魔魅教你出家？那个魔魅教你受戒？那个魔魅教你行脚？道得亦杈下死，道不得亦杈下死。速道，速道！」其無對，師便打趁出。（卷15，閉魔巖和尚，頁583/698）

閉魔巖和尚は、馬祖道一の法を嗣いだ。師は常に杈子（さすまた）を手に来參僧を迎え、僧の頸めがけて杈子をあてがい、「どの惡魔がおまえを出家させたのか！どの惡魔がおまえを受戒させたのか！どの惡魔が

お前を行脚させたのか！言い得ても刺し殺す、言い得ずとも刺し殺す。
さあ言え、さあ言え！」僧が答えられぬと、すぐさま追い出した。

この祕魔巖は五臺山の西臺にある。『宋高僧傳』卷21唐清涼山祕魔巖常遇傳には、大中4年（850）に五臺山を巡禮した常遇が、ここで金色に輝く雲を見て感激し、廟宇を築いて住したことを記しているが、祕魔巖について、「後至西臺，遇古聖跡曰祕魔巖，乃文殊降龍之處也。」と言っている。ところが、より古い『古清涼傳』の記述では「祕魔巖」であった。

西臺略無可述。臺之西有祕魔巖者。昔高齊之代，有比丘尼法祕。惠心天悟，真志獨拔。脫落囂俗，自遠居之，積五十年，初無轉足。其禪惠之感，世靡得聞。年餘八十，於此而卒。後人重之，因以名巖焉。（T51,1095bc）

西臺には述べるべきものがない。臺の西に祕魔巖がある。高氏北齊の世に比丘尼法祕がいた。生來の聰明、類いまれな純真な心の持ち主で、俗世間を厭い、この巖窟へ逃れて來てから50年、どこへも出ることがなかった。禪定智慧の力も世に知られることがなく、80餘歳でこの地に亡くなった。のちの人が記念して巖の名としたのである。

「祕」は比丘尼の名、「魔」は魔尼、すなわち比丘尼をいう（『廣韻』下平戈韻）のであるから、「祕魔巖」という名の由來としてきわめて自然である。これが誤って「祕魔巖」となったらしい（「魔」と「魔」は同音、莫婆切）。さきの『宋高僧傳』常遇傳に言うように、「文殊降龍之處」とされたことがその表記の變化の理由をものがたっている。すなわち「祕魔」とは惡龍をとじこめる意であり、この意において「閉魔」という表記が出てきたのだと推測される。『祖堂集』に記される禪師の事跡は、いかにも惡魔祓いと呼ばれるにふさわし

い。「閉」「祕」二字は、上古音ではともに入聲質部幫母に屬する同音字であった。中古音（『廣韻』）では韻母が異なる。

閉 博計切 蟹攝幫母霽韻開口四等去聲 [piei]⁽⁷⁾

祕 兵媚切 止攝幫母至韻開口三等去聲 [pie]

すなわち「祕」を「閉」と書くのは止攝字と蟹攝字の混用の結果であるが、この二攝の混用は『祖堂集』所收の偈頌の通押にも多く見える現象である。

卷1	提多迦章	毬多偈	慧霽地至
卷1	毘羅章	傳法偈	際祭智寔
卷7	巖頭章	頌	事志彩海
卷10	鏡清章	頌	是紙匱至綴祭
卷14	高城章	歌行第16韻段	畏未對隊意志
卷15	伏牛章	三个不歸頌第1韻段	迷齊飛歸微
卷17	正原章	偈	洗薺醫時之
卷19	香巖章	明古頌第5韻段	累旨底薺細霽
卷19	香巖章	明古頌第8韻段	諦霽氣貴未

唐作藩「唐宋間止、蟹二攝的分合」は、中晩唐期に至って二攝の通押現象が増えるのは、二攝の内部諸韻が合流に向かい、主母音が近くなったため音近による通用がおこったのであるとして、次のように言っている。「この時期の蟹攝は、一二等韻の灰哈泰皆佳夬が一部（讀音は[ai, uai]）となり、三四等韻の齊祭廢が一部（讀音は[i i, iu i]）となり、そして止攝の支脂之微が一部（讀音は[i, i i, iu i]）となったために、詩歌韻文中に合韻することがおこったが、とくに齊（祭廢）部と灰（哈泰皆佳夬）部合口一等字が支（脂之微）部と合韻

7 擬音は邵榮芬『切韻研究 校訂本』（中華書局，2008）に據る。以下同。

する情況がより増えたのは、その讀音がいっそう近くなったためである⁽⁸⁾。」これは上掲『祖堂集』の通押をよく説明するものとなっている。

「閉」「祕」二字は、義において通じ、かつ中古音では混用されるという條件のもとで発生した異文であったとすることができる。

【4】南方音の聲調が同じであったために発生した異文
東國（新羅）出身禪師齊雲和尚の例である。

- [6] 〈1〉後只觀望師兄來。（卷4，藥山章，頁173/230）
 〈2〉只觀貪諍論。（卷14，馬祖章，頁515/611）
 〈3〉講經講論座主只觀誹謗馬祖。（同）
 〈4〉只觀貪講經論。（同）

「只管」（ひたすら）の語は、『祖堂集』に9例見えるが、そのうちの4例は上掲のように「只觀」と書かれている。「只觀」という表記が現れるのは『祖堂集』だけで、しかもすべて龍華靈照の傳承による話のなかである。藥山章は「道吾和尚四十六方始出家」（頁171/229）から「對曰：箇箇則過於老兄」（頁176/232）までの長い一段のあと、雙行注で「此是龍花舉也。若依祖堂舉者（以上は龍花和尚の傳承である。祖堂〔長慶慧稜を指すか？〕の傳承によるならば、以下のとおり）」とあることから、この長段は龍花（華）和尚の所傳だったことがわかる。馬祖章は「有洪州城大安寺主」（頁515/611）から「鬼使即不見師与寺主也」（頁517/612）までの物語のあと、「僧拈問龍華」として問答が續く構成から、以上の物語をこの僧が話し、これについて問答を交したことの記録であった。こういう場合、物語と問答は一連のものとして傳承され

8 唐作藩『漢語史學習與研究』137頁，商務印書館，2001.

たのであり、その資料の來源が龍華和尚の語録（言行録）であったと推測することができる。

この龍華和尚は『祖堂集』卷11に齊雲和尚の名で立傳される新羅出身の禪師である。『宋高僧傳』卷13には、

杭州龍華寺釋靈照，本高麗國人也。重譯而來，學其祖法，入乎閩越，得心於雪峯。苦心參陪，以節儉勤於衆務，號照布衲焉。千衆畏服，而言語似涉島夷。性介特，以恬淡自持⁽⁹⁾。

杭州龍華寺の釋靈照は、高麗國の出身である。重譯して中國に來た。本場の禪學を學ぼうと閩越に行き、福州の雪峯禪師のもとで核心をつかんだ。勞苦を厭わず禪師に仕え、質素を旨として作務にいそしんだので、「照布衲」と呼ばれた。そのひたむきな修行ぶりは、他の修行者に畏敬の念を起こさせたが、その言葉は高麗訛りだった。狷介孤獨で、人の評價など氣にせず、靜かにわが道を行く性格だった。

という。『景德傳燈錄』卷18では「居唯一衲，服勤衆務，閩中謂之照布衲」といい、夏冬一枚の僧衣で過ごした本色の衲僧^{ほんじき}、當時の閩で名の知られた筋金入りの修行者だった。靈照は福州で雪峯義存に師事した後、婺州齊雲山、錢塘鏡清院、杭州報慈寺、龍華寺に住し、故國に歸ることなく、天福12年に78歳で逝去した（870－947）。「高麗國人」と書かれるのは、新羅から留學したが、杭州龍華寺で逝去したとき、故國は高麗朝（918－1392）に替っていたからである。「言語似涉夷」と言われているけれども、『祖堂集』に記録された言葉から朝鮮語訛りを示す痕跡は見出されない。ただ、『祖堂集』卷16南泉章に「南泉道

9 『宋高僧傳』卷13，范祥雍點校，中國佛教典籍選刊，1987，

者」と呼ばれた僧の蘇生譚を龍花（靈照）の傳承として記録しており、いっぷう変わった傳奇的嗜好の人でもあったらしい。

さて、この靈照の傳承に「只管」が「只觀」と表記されているのであるが、それは『廣韻』では、

管 古滿切（見母緩韻上聲）／觀 古丸切（見母桓韻平聲）

すなわち上聲を平聲に發音したもので、江南人の音訛として考證隨筆にしばしば現れるものである。たとえば、

問：「俗謂何物爲底。底義何訓？」答曰：「此本言何等物，其後遂省，但言直云等物耳。等字音都在反，轉丁兒反。左太冲《吳都賦》云：『軫田無數，膏腴兼倍，原隰殊品，竄隆異等』，蓋其證也。今吳越人呼齊等皆丁兒反。應瑒（璩）詩：『文章不經國，筐篋無尺書，用等稱才學，往往見歎譽？』此言譏其用何等才學見歎譽乎。以是知去何而直言等，其言已舊。今人不詳其本，乃作底字，非也。」（顏師古『匡謬正俗』卷6）⁽¹⁰⁾

問「世間で〈何物〉（なに）を〈底〉と言っているが、どうして〈底〉というのか？」

答「〈何物〉はもとは〈何等物〉と言ったのだが、のち省略してただ〈等物〉と言うようになった。〈等〉の音は都在反だが、丁兒反に轉じた。左思の吳都賦に「軫田無數，膏腴兼倍，原隰殊品，竄隆異等。」とあって、〈等〉は〈倍〉と協韻しているのが前者の證據だ。今の吳越の人は〈齊等〉（ひとしい）の意味の場合、みな丁兒反と發音しているのが後者の音。應瑒の百一詩に「文章不經國，筐篋無尺書，用等稱才學，往往見歎譽？」と言うのは、その人が「用何等才學見歎譽乎？」（いっ

10 『匡謬正俗平議』192頁，劉曉東，山東大學出版社，1999。

たいどんな才能學識があつて稱贊されるというのか)と非難しているのである。この例から〈何〉を取り去って〈等〉だけになったことがわかるが、それはもう昔の言いかたになってしまった。今どきの者はそのもとを知らないで〈底〉を使っている。それはいけない。」

これは疑問詞「底」の語源説で、「何等物」>「等物」>「等」>「底」という説明である。この「等」の音都在反(端母海韻[iɔi]上聲)を、江南人は丁兒反(端母支韻[iɛ]平聲)に發音し、それが「底」(『廣韻』、都禮切、端母齊韻[iɛi]上聲)の字で寫されたのだという。それは止攝を蟹攝に、上聲を平聲に訛ったということである。また同書卷8には「漸就」(ますます)の義の「愈」を、

江南近俗，讀愈皆變爲踰，關內學者，遞相放習，亦爲難解。

ちかごろ江南の巷では「愈」の音を「踰」と讀むようになったが、都の識者たちまでいっせいにその真似をしだしたとは、あきれた風潮である。

と言っている(愈 以母麌韻上聲／踰 以母虞韻平聲)。これまた江南人が上聲を平聲に發音し、それが長安にまで及んだ例である。明代の田藝蘅の隨筆にも「他如以東爲凍，以管爲官，……此類皆方音也。」(『留青日札』卷38，通俗古音)⁽¹¹⁾という。「東」「凍」は平聲を去聲に、「管」「官」は上聲を平聲に訛る方言音があるという指摘であるが、「官」は「觀」と同音である。田氏は16世紀錢塘(杭州)の人。この條はその家大夫の『觀風畧』が記す「兩廣之音」を

11 『留青日札』728頁，朱碧蓮點校，明清筆記叢書，上海古籍出版社，1992。

資料としているのだが、このころ南方の廣東、廣西地方の音でも「管」と「觀」は同音であったことが知られる。

また靈照和尚の傳承にかかる話（『祖堂集』齊雲和尚章）には、「措大」を「措多」と書く音訛の例がある。

大 唐佐切（定母箇韻去聲）／多 得何切（端母歌韻平聲）

これは定母（濁音 d）を端母（清音 t）に發音した聲母清濁混用現象でもある。「措大」の語源については李匡父『資暇集』⁽¹²⁾ が諸説を擧げているが、『祖堂集』の音訛から見ると、そのなかでは「醋馱」説（貧乏書生が酢を驢馬に載せて賣り歩いたのにもとづくという説）が近いように思える（馱と多是同音）。

齊雲和尚の傳承にかかる上掲の二話は、藥山章が雲巖・道吾兄弟の修行物語であり、馬祖章のものは冥界へ連行されなかった講經座主が馬祖に助けられる物語で、いずれも物語られて傳わる傳奇的な性格をもっている。これは齊雲和尚が語ったところを文字化したものに違いない。ここに「只觀」が現れるのは、要するに齊雲和尚が江南音に馴染んで、土語訛りで喋っていた記録ということになるであろう。

【5】唐代の語音變化によって發生した異文

卷7 雪峯章の對話、

問：「箭路（露）投鋒時如何？」師云：「好手不中的。」「盡眼勿標時如何？」師云：「不放隨分好手。」（頁271/347）

〔校〕：『景德傳燈錄』卷16、『雪峯語錄』卷上「不放」作「不妨」，是也。

「相手の鏃の先端に向けて矢を放つ」とは、『列子』湯問篇、紀昌とその師飛

12 『資暇集』卷下，墨海金壺本。

衛の神業を盡くした戦いを想起させる。雪峯が來參僧と對面したとき、僧は氣負った挑戦的な問いかけをした。「わたしの放つ箭を、正面から受け止めてください。」すると老練な雪峯は、「好手は的に當てぬ。」的に當てる程度なら好手とは言えぬ、とやんわり身を躲す。こう解するのは、次の問いが「では、どこにも的がないときはどう射るのか」と受けるからである。「的に向けて箭を射る」とは、裏に「目標（たとえば〈悟り〉）を設定して修行する」のは功利的で、正しい修行ではない、という含みを持たせている。「ならば標的なき射とは？」それに對して雪峯は、「分に隨う好手と言ってよろしい。」標的がない以上、好手の腕を示す場はなく、分に隨って平常に生きるのみである。それは馬祖の言った、「若見此理眞正，不造諸業，隨分過生，一衣一鉢，坐起相隨」という、日常の生活が修行であるような生きかたのことであろう。『祖堂集』の「不放」は『景德傳燈録』、『雪峯語録』に據って「不妨」に改めるべきである。

妨 敷方切（敷母[pʰ]陽韻平聲，送氣）

放 甫妄切（非母[p]漾韻去聲，不送氣）

これは輕唇音聲母非敷混用の例である。「妨」を「放」に誤る例はもうひとつある。卷11保福章の話、

師因舉：「初祖於少林寺裏面壁坐打（打坐）九年。寺裏三千个聽從，口似懸河，只云：『此是西天小乘壁觀婆羅門，有什麼靈處？直是有理，無靈處。』」時有人問：「既有理，為什麼無靈處？」師云：「只爲如此，所以如此。若不如此，焉知如此？」僧云：「不如此事作麼生？」師云：「莫放我打睡！」（頁422/507）

さいごの「莫放我打睡！」は「莫妨我打睡！」（わしが眠るのをじゃましてくれ）の誤であることは明らかである。ただし、この二字は形似による誤り

の可能性も混在しているから、もうひとつの例を引いておこう。卷7夾山章の對話、

侍者又問：「青山無霞，雲從何生？」師云：「駿馬不露峯骨，朗然清虛。」
(頁268/332)

〔校〕：『聯燈會要』卷21夾山章示衆「峯骨」作「風骨」，是也。

夾山善會禪師（廣州の人、806－881）の語は示衆も問答も難解で、ここの「霞」や「雲」が何を暗示しているのかよくわからないのだが、「峯骨」が「風骨」の誤りだとすると、「駿馬はもちまへの俊敏さの風格を露わにしない」ということであろう。

風 方戎切（非母[p]東韻平聲）

峯 敷容切（敷母[pʰ]鍾韻平聲）

非母（不送氣）と敷母（送氣）の混同は、唐代になって唇音が輕唇音と重唇音に分化し、従前に三十六字母で全清（不送氣）、次清（送氣）に區別されていた輕唇音が變化してともに純粹摩擦音となった（[p]、[pʰ] > [p] > [f]）ときに起こる現象と言われる⁽¹³⁾。たしかに南唐徐鍇『說文解字繫傳』に附す朱翱反切では、「妨」は弗商反（卷24女部）、「放」は弗旺反（卷8放部）で非母に合している。雪峯義存（822－908）は泉州南安縣の人、保福從展（？－928）は福州福唐縣の人である。ちなみに二字は現代閩音（『漢語方音字匯』に據る）ではただ聲調が異なるのみである。

福州 放[xuɔŋ5文讀]妨[xuɔŋ1]／厦門 放[hɔŋ5文讀]妨[hɔŋ1]

すなわち「妨」「放」二字は形似の誤であるとともに、唐末五代の閩地でも

13 このような聲母非敷混用の實例は、趙振鐸「唐人筆記裏面的方俗讀音」（2000、2006）に唐代筆記の例が、高田時雄『敦煌資料による中國語史の研究』（1988）に敦煌資料や慧琳音義の例が網羅されている。

聲母が等しい近音であったために起こった異文であったとおもわれる。

以上『祖堂集』の正しい本文を復原するために、異文別字を音韻上の解釋を通して校證した4條の例を擧げてみた。このような異文別字資料は、敦煌俗文學の寫本から得られるものに比べると極めて少ないのであるが、いくつかに分類してその特徴を考えてみたいとおもう。（*は参考例）

【聲母】

【一】聲母清濁混用

- [1] 唇音 (a) 幫並混用 彬／玼 盤／半 撥／拔 *薄／博 *白／栢 *白／伯 *方／房 *府／符 *蒲／莆
- (b) 端定混用 端／斷 *堂／當 *鄧／登
- (c) 知澄混用 *住／駐
- (d) 徹澄混用 *趙／超
- [3] 齒音 (e) 精從混用 齊／際 材／哉 *齊／濟 *精／情
- (f) 書禪混用 施／時
- [4] 牙音 (g) 見群混用 期／機 *球／救 *誑／狂

【二】唇音非敷混用 *妨／放 風／峯

【三】齒音精組章組不分

- (h) 清昌混用 川／筌
- (i) 心昌混用 速／觸
- (j) 清禪混用 是／此

【四】齒音莊組章組不分

- (k) 生書混用 束／縮

【五】牙音見溪混用 既／豈 堪／敢 勘／敢 舉／去 舉／起 个／顆 可／个 *鷄／溪 *脚／却

【六】喉音影以混用 一／亦

【七】喉音匣云混用 王／黃

【一】聲母清濁混用

段成式『酉陽雜俎』に自らの非を認めた、知識人の隨筆にしては珍しい回想があつて、讀後記憶に残ったのであるが、それは字音にかかわる話であつた。

予太和末、因弟生日觀雜戲。有市人小説呼扁鵲作徧鵲，字上聲。予令座客任道昇字正之。市人言：「二十年前嘗於上都齋會設此，有一秀才甚賞某呼扁字與徧同聲，云世人皆誤。」予意其飾非，大笑之。近讀甄立言《本草音義》，引曹憲云：「扁，布典反。今步典，非也。」案：扁鵲姓秦，字越人。扁縣郡屬渤海。（續集，卷4，貶誤）⁽¹⁴⁾

唐太和年間の末のある日、わたしは弟の誕生日の祝いに催された演藝を見た。藝人が講談の扁鵲ものを語ったとき、「扁鵲」を「徧鵲」（上聲）と呼んでいたので、同席していた客人の任道昇に言って糾してやった。ところが、その藝人は「二十年前に都長安で齋會がありましたおり、これを語って、わたくしが「扁」を「徧」と同音に呼びましたのを、ある學者さんがたいそうお褒めくださって、今の者たちが間違っているのだ、とおっしゃったのですが。」と言う。わたしはその男が自分の過ちを糊塗しているのだと思い、笑い飛ばしてやった。近ごろ甄立言の『本草音義』を讀むと、曹憲の音注に「扁は布典反、現今の步典反は誤り」と言うのを引いていた。案ずるに、扁鵲は姓秦、字は越人。扁はその出身の縣郡、渤海に屬する。

14 『酉陽雜俎』卷4，240頁，方南生點校，中華書局，1981。

これは太和9年(835)成都でのこと。扁鵲は有名な古代の傳說的醫王である。この役者が語った講談はその物語だったようだが、問題になっている二字は『廣韻』では、

扁 薄汝切 並母銑韻上聲 (biɛn)

編 方緬切 幫母獮韻上聲 (piaen)

曹憲の音、布典反は幫母(清音 p), 歩典反は並母(濁音 b)で、隋の大訓詁學者の説では、扁鵲の扁は編と同聲(幫母)の清音に讀むべしというのであった⁽¹⁵⁾。段成式は藝人が字を知らぬと思い、濁音に直してやったのだが、藝人には藝人なりの傳承があつて、それは古音であつたらしく、清音で讀むのであつた。ただ、扁鵲の扁の音は、陸德明『經典釋文』周禮音義天官下的蒲典反(並母銑韻)、顏師古『漢書』高帝紀下注、『文選集注』卷58下孫楚「爲石仲容與孫權書」音決にも歩典反というように、並母の濁音に讀む音は當時廣くおこなわれていたようだから無理もないのであるが⁽¹⁶⁾、段成式が末尾に出身地をもちだしているのは、扁鵲という通稱の發音が方言音に由來し、しばしば古音を留めているものだ、と納得したのであろう⁽¹⁷⁾。

趙振鐸「唐人筆記裏面的方俗讀音(一)」⁽¹⁸⁾には聲母清濁混用例としてこの一節を挙げ、かつ唐代筆記から多くの類例を列挙している。これらを讀んで、

15 曹憲は文選學における李善の師。『大唐新語』卷9著述、新舊『唐書』儒學傳に略傳がある。

16 莊綽『鷄肋編』卷上「扁鵲姓」條にも顏師古の音(歩典反)以外に辯音(並母)、篇音(滂母)、符殄切(並母)の諸説を挙げ、洪邁『容齋四筆』卷6「扁字二義」は『唐韻』の薄典切(並母)を挙げる。

17 扁鵲に關わる諸説は『扁鵲 倉公 王叔和志』(齊魯諸子名家志, 山東人民出版社, 2009) 参照。

18 『漢語史研究集刊』第2輯, 四川大學漢語史研究所, 2000。趙振鐸『辭書學論文集』, 商務印書館, 2006。

唐代南方においては聲母の清濁混用が廣くおこなわれていたことを知り、禪の語録にも類例があったことを思い出した。『聯燈會要』三十卷は南宋初に晦翁悟明が温州永嘉で編纂した燈史で、いわゆる五燈の一であるが、その卷21の卷末に異例の跋を附している。内容は同卷に収める巖頭全豁禪師章の一則にちなむ回想である。

余乾道初，客建康蔣山，邂逅泉州一老僧。有《巖頭錄》，因閱之。見其「問僧：『甚處去？』」僧云：『入嶺禮拜雪峯去。』巖頭云：『雪峯若問你：巖頭如何？但向他道：巖頭近日在湖邊住，只將三文買箇撈波子，撈蝦撈蜆，且恁麼過時。』」因問老僧：「余閱《巖頭錄》，盡作老婆，此云撈波，何也？」渠笑云：「老婆，誤也。巖頭、雪峯皆鄉人。吾鄉以撈蝦竹具曰撈波也。鄉人至今如是呼之。」後人訛聽作老婆子，教人一向作禪會。《巖頭錄》他本作買箇妻子，《雪峯錄》作買箇老婆。後來眞淨舉了云：「我只將一文錢娶箇黑妻子。」所謂字經三寫，烏焉成馬，於宗門雖無利害，不可不知。雪峯空禪師頌有云：「三文撈波年代深，化成老婆黑而醜。」蓋方語有所不知，不足怪也⁽¹⁹⁾。

乾道年間の初め、建康蔣山に滞在した時、泉州から來た老僧にめぐり逢った。その人が『巖頭錄』をお持ちだったので拝見した。その一節にこうあった。

僧に問う、「どこへ行くのか？」僧「嶺を越えて雪峯禪師を拝謁に参ります。」巖頭「雪峯がきみに、わしはどうしているかと尋ねたら、こう言ってくれ。近頃は湖のはたに住みついて、三文で買った撈波子で、えびやしじみなんぞをすくって、そんなふうに日を送っておる、

19 『聯燈會要』卷21，續藏經第136冊（卅續選輯史傳部6）。

とな。」

わたしはその老僧に問うた。「わたしが以前讀んだ『巖頭録』はみな〈老婆〉となっておりましたが、ここは〈撈波〉です。どうしてでしょうか。」その人は笑って、「〈老婆〉は間違いだ。巖頭と雪峯はふたりともわしの同郷人で、わしのところではえびをすくう竹製のざるを〈撈波〉というのだ。村の者は今でもそう呼んでおる」と。なるほど、のちの人が〈老婆子〉と聴きまちがえたうえに、禪的理解を押しつけていたのだ。『巖頭録』の他のテキストでは「買箇妻子」（妻を買って）になっているし、『雪峯録』では「買箇老婆」（かみさんを買って）になってしまっている。それで後世の眞淨克文は、この話を紹介したあと、「わしなら一文で真っ黒けのかみさんをもらうぞ」などと言い出すしまつだ。いわゆる「字は三寫を経て、烏焉は馬と成る」という類で、宗門に直接の害はないけれども、注意しておくべきである。雪峯慧空禪師は頌を作って皮肉っている。「三文の撈波、年代深し、化して老婆と成って黒くして醜し」と。けだし、方言を知らぬことによる誤解で、無理もないことではある。

乾道は南宋孝宗の年號（1165－1173）。巖頭全豁（828－887）と雪峯義存（822－908）は若年に同伴行脚した仲である。泉州の老僧が教えてくれた「撈波」と訛傳の「老婆」を『廣韻』でみると、

撈 魯刀切 來母豪韻平聲 (lau) 波 博禾切 幫母戈韻平聲 (pua)

老 盧皓切 來母皓韻上聲 (lau) 婆 薄波切 並母戈韻平聲 (bua)

であって、つまり主には第二字の聞き間違いが原因であったと知られるが、それは聲母の清濁混同であり、しかも方言語彙にかかわっている。巖頭、雪峯はともに泉州南安の人、『聯燈會要』の撰者晦翁悟明は福州の人で、おなじ福建でも閩東と閩南ではこのように方言が通じないことがあったのだ。始末が悪いのは、意味の通じないところを、禪僧は「禪的解釋」をもって無理なこじつけ

をやることである。巖頭の任運隨縁の「撈波」（竹ざる）が「老婆」（かみさん）に變じては、何かの象徴のように扱う「禪會」を爲す人も出てくるというのであるが、これは禪文獻に文字の誤りが放置される原因でもあろう。

この聲母清濁混同現象は南方に廣く見られるもので、これを原因とする異文が、じつは『祖堂集』にも多く現れる。以下にその例を列挙しよう。

[1] 唇音

(a) 幫並混用

- (1) 師遊南州時，與王太傅一房坐。時有一沙彌揭簾欲入，見師與太傅，便放簾抽身退步。師云：「者沙彌好與二十棒。」太傅云：「與摩則延玘罪過。」（卷10，玄沙章，頁374/456）

[校]：王太傅「延玘」は泉州刺史王延彬（885－930）を指す。王延彬は王審邽の長子、天祐2年（905）泉州刺史に任じ、乾化5年（915）に檢校太傅、天成5年（930）に檢校太尉を加えらる（『泉州府志』卷40封爵志）。玄沙師備（835－908）が泉州を訪れたのは開平元年（907）9月のこと（『玄沙廣録』卷中）であるから、このとき王延彬はまだ太傅ではないのだが、これは記録された時點での稱號なのであろう。延彬を「延玘」と書いた例は本書のみである。「彬」字の音は『廣韻』府巾切、「新添類隔今更音和切」によって、ト巾切。

彬 ト巾切（幫母[p]眞韻平聲）／玘 符眞切（並母[b]眞韻平聲）

- (2) 我也委汝來處，你亦不得錯認定半星。（卷10，長慶章，頁406/494）

[校]：「定半星」は「定盤星」の音誤。『景德傳燈録』卷21福州東禪玄亮禪師章にも、「汝莫錯認定盤星。」（はかりの目盛りを見誤ってはいけない）の例がある。無著道忠『葛藤語箋』卷7に「定盤星」の考證がある。「盤は皿の如し，以って量る所の物を安き，緒を以って衡の右邊

に懸く。衡上に星を鏤^{きざ}み、一分一錢より次第に重數に向う。此れを定盤星と名づく。」(禪學叢書, 中文出版社, 1979)

盤 薄官切 (並母[b]桓韻平聲) / 半 博幔切 (幫母[p]換韻去聲)

「半」は朱翱反切では脯幔反で並母(『説文解字繫傳』卷3半部)。すなわち南方音では同聲であったことがわかる。

(3) 師以手拔眉云:「莫不辜負摩?」(卷12, 龍迴章, 頁476/574)

[校]:「拔」は「撥」の音通。この一則の全體を示すと、

師臨遷化時, 上堂……有僧問:「師百年後, 向什麼處去?」師提起一足云:「足下看!」師問侍者:「昔日靈山會上, 釋迦牟尼佛展開雙足, 放百寶光。」師却展足云:「吾今放多少?」對云:「昔日靈山, 今日和尚。」師以手拔眉云:「莫不辜負摩?」

師は遷化に臨んで上堂した。……僧が問う、「師は遷化ののち、どこへ行かれますか?」師は片足を持ち上げて、「足もとを見よ!」侍者に問うた、「昔靈鷲山で釋尊は棺から兩足を出して、千光を放たれたが、」自ら足を前に出し、「わしは今どれほど光を放っているか?」侍者「昔日の靈山, 今日和尚。」師は兩手で眉を開くしぐさをして言った、「(そなたは自分の眼を) おろそかにしてはおらぬか。」

この則は『景德傳燈錄』では、明招德謙章(卷23)に德謙の遷化時のこととして録されている。龍迴從盛と明招德謙はともに羅山道閑の弟子で、この話は混同されて傳わったのである。

師住明招山四十載, 語句流布諸方。將欲遷化, 上堂告衆囑付。其夜展

足問侍者曰：「昔釋迦如來展開雙足，放百寶光明。汝道，吾今放多少？」

侍者曰：「昔日鶴林，今日和尚。」師以手拂眉曰：「莫辜負麼？」（『景德傳燈錄』卷23，明招德謙章）

釋尊の入滅は拘尸城においてであるから、「靈山」は「鶴林」と訂正されている（そこで釋尊が入滅を歎く迦葉に兩足放光の大悲を示したことは、『祖堂集』卷1に見える）ほか、末尾の「拔」が「拂」に替っている。この「拔」は「眉毛を抜く」意ではなく「拂」（はらう）の義であるとみて改めたのであろう。しかしながら、『祖堂集』では「拔眉」は「撥眉」と同義であって、兩手で眉を開くしぐさによって「今のわたしを見よ」と注意を促すことである。「莫不辜負麼？」（「莫辜負麼？」）は、侍者が師におもねって自身の眼をないがしろにしたのをたしなめた語。『祖堂集』本章に「撥開眉」の例がある。

問：「古人因星悟道，意作摩生？」師以手撥開眉。（頁476/573）

問う「古人は明星を見て悟りを開いた、とはどういうことでしょうか？」師は兩手で眉を開くしぐさを示した。

「撥眉」は兩手で自分の眉を左右に開く動作。わが「本來の面目」を示す（『青州百問』第83則に「本來面目常相見，何用區區手撥眉？」〔續藏，第119冊，177d〕という）。二例ともに「古人のことではなく、今のわたしを見よ」というのであろう。「拔」は卷7巖頭章にも次の例があって参考になる。

師沙汰時，著欄（欄）衫，戴席帽，去師姑院裏，遇師姑喫飯次，便堂入厨下，便自討飯喫。小師來見報師姑。師姑把柱（拄）杖來，纔跨門，師便以手拔席帽帶起。師姑云：「元來是禪上座！」被師喝出。（頁

275/340)

席帽は仕官せぬ士人が日常の外出に被る帽子で、藤席で作り、四周に陽よけのひれ（帯）を垂らす。巖頭は會昌の廢佛の時（842-5）、還俗して布衣の姿であった。盗み食いが見つかって、席帽の帯を両手で開いて立ち上がったので、師姑は盗人が全竊だとわかったのである。

したがって「拔」と「撥」は通ずるのである。

撥 北末切（幫母[p]末韻入聲）／拔 蒲八切（並母[b]黠韻入聲）
これも聲母の清濁混用の結果であろう。

- （4）〈参考例〉「博伽梵」（卷17，岑和尚章，頁652/777）
- （5）〈参考例〉「白牙琴」（卷4，丹霞章，孤寂吟，頁159/214）
- （6）〈参考例〉「温白」（卷13，福先招慶章，頁508/604）
- （7）〈参考例〉「白顔」（卷4，藥山章，頁176/232）
- （8）〈参考例〉「房丈」（卷4，藥山章，頁170/229）
- （9）〈参考例〉「乾府」（卷19，觀和尚章，頁723/861）
- （10）〈参考例〉「莆州」（卷15，麻谷章，頁559/666）
- （11）〈参考例〉「陳莆鞋」（卷19，陳和尚章，頁723/862）

[校]：それぞれ「薄伽梵」（梵語 bhagavān の音譯語）、「伯牙琴」（『列子』湯問）、「温伯」（『莊子』田子方）、「栢巖」（『景德傳燈錄』卷7，定州栢巖明哲禪師章）、「方丈」、「乾符」（唐僖宗の年號）、「蒲州」（麻谷山は河東蒲州にある）、「陳蒲鞋」の形誤かつ音誤。

薄 傍各切（並母[b]鐸韻入聲）／博 補各切（幫母[p]鐸韻入聲）
伯 博陌切（幫母[p]陌韻入聲）／白 傍陌切（並母[b]陌韻入聲）
栢 博陌切（幫母[p]陌韻入聲）／白 傍陌切（並母[b]陌韻入聲）

方 府良切（幫母[p]陽韻平聲）／房 符方切（並母[b]陽韻平聲）

符 防無切（並母[b]虞韻平聲）／府 方矩切（幫母[p]麌韻上聲）

蒲 薄胡切（並母[b]模韻平聲）／莆 方矩切（幫母[p]麌韻上聲）

いずれも字形がきわめて近く、かつ聲母の清濁混用によって発生した異文である。「方丈」は本書に12出、「房丈」と書くものが6例ある。

〔2〕舌音

（b）端定混用

（12）問：「如何是大人相？」師曰：「坐端十方不點頭。」（卷9，落浦章，頁340/415）

〔校〕：「坐端」は「坐斷」の音誤。「坐斷」は要衝を占據して押えこむこと。たとえば、「欲解粘去縛，直須削迹吞聲，人人坐斷要津，箇箇壁立千仞。」（束縛を斷たんとせば、蹤跡を消し言語を去り、一人一人が要衝を押え、高く聳え立つごとくあれ。『碧巖錄』第22則，垂示）、「坐斷天下人舌頭，直得無出氣處。」（世界の人間の舌を押えこんで息の根を止める。同，第84則，垂示）。本書卷19臨濟和尚章にも、「大德，欲得山僧見處，坐斷報化佛頭，十地滿心猶如客作兒。」（諸君、わしの見方を知りたいなら、こうだ。報身佛・化身佛などは尻に敷き、十地菩薩も奴隷扱いだ。頁721/857）したがって「坐端」が「坐斷」の誤りであることは論をまたない。

斷 徒管切（定母[d]緩韻上聲）／端 多官切（端母[t]桓韻平聲）

これは濁音聲母を清音に發音した結果である。ただし、全濁聲母の清化の規則「定母の仄聲は端母に變化する」という濁音清化の規則に合致する。「坐斷」の「斷」の使成複合動詞（「摧斷」「截斷」「勒斷」「厭斷」など）の「斷ちきる」原義が、必ずしも失われているとは言えないまでも、すでに希薄化しており、軽く發音される傾向にあったために起きた現象かもしれない。朱翱反切で

は「斷」は都伴反（『説文解字繫傳』卷27, 「伴」原誤「件」）で端母である。
すなわち南方音では同聲であったために起こった混同である。

- (13) 〈参考例〉白飯王有二太子，一名調達，是佛當兄。（卷1，釋迦牟尼佛章，頁15/10）

[校]: 「當兄」は「堂兄」の音誤。『釋迦氏譜』に「調達，佛從兄弟，二叔子。阿難，佛從弟，兄是調達。」(T50, 87a) 從兄を「堂兄」ということ、趙翼『陔餘叢考』卷37に見える。

- (14) 〈参考例〉第二祖阿難尊者，王舍城人也。姓利帝，白飯王子，是佛之當弟也。（卷1，阿難章，頁34/26）

[校]: 「當弟」は「堂弟」（從弟）の音誤。

- (15) 〈参考例〉時諸比丘則從座起，諮問長老迦葉: 「於三藏中，先集何藏？」迦葉語云: 「堂集修多羅藏。」（卷1，大迦葉尊者章，頁29/21）

[校]: 「堂」は「當」の音誤。「修多羅藏」とは經藏。佛典の結集は經藏から始まったことをいう。

- (16) 〈参考例〉白槌云: 「五百來人在這裏，莫是不爲向上事？當頭和尚道無，不可成持。……」（卷8，青林章，頁326/397）

[校]: 「當頭」は「堂頭」の音誤。「堂頭和尚」は住持をいう。

- (17) 〈参考例〉野老門前不話朝當之事。（卷9，落浦章，頁340/414）

[校]: 「朝當」は「朝堂」の音誤。一句は諺語か。

- (18) 〈参考例〉師在石霜時，因一日作礼而問曰: 「万戸俱開則不問，万戸俱

閉時如何？」霜曰：「當中事作麼生？」師曰：「無位。」（卷9，雲蓋章，頁354/435）

〔校〕：「當中」は「堂中」の音誤。『景德傳燈錄』卷15石霜章は正しく「堂中」に作る。

(19) 〈参考例〉雪峯告衆云：「當當密密底。」師便出對云：「什麼當當密密底！」（卷10，鏡清章，頁382/467）

〔校〕：「當當」は「堂堂」の音誤。『景德傳燈錄』卷18鏡清章は「堂堂」に作る。

以上は「堂」を「當」に誤る6例と「當」を「堂」に誤る1例である。

堂 徒郎切（定母[d]唐韻平聲）／當 都郎切（端母[t]唐韻平聲）

現代閩音（廈門、福州，『漢語方音字匯』に據る。以下同）ではきわめて近い音である（廈門 當 [tɔŋ 陰平 文讀] 堂 [tɔŋ 陽平 文讀]／福州 當 [tɔuŋ 陰平] 堂 [tɔuŋ 陽平]）。

(20) 因措多入古寺，問僧：「此寺名什麼？」（卷11，齊雲章，頁432/521）

〔校〕：「措多」は「措大」の音誤。本書卷8疎山章に「師因騎馬行次，措大問：『既是騎馬，爲什麼不踏鐙？』」（頁330/401）。「措大」は窮措大、その語源の諸説は李匡父『資暇集』卷中に詳しい。

大 唐佐切（定母[d]簡韻去聲）／多 得何切（端母[t]歌韻平聲）

これは「定母の仄聲は端母に變わる」という濁音清化の規則に合致する例である。

(21) 〈参考例〉香巖和尚，嗣潯山，在登州。（卷19，香巖章，頁700/827）

〔校〕：「登州」は「鄧州」の形誤かつ音誤。香巖寺は南陽にあり、鄧州に

屬す。

鄧 徒亘切（定母[d]嶝韻去聲）／登 都滕切（端母[t]登母平聲）

これも「定母の仄聲は端母に變わる」という濁音清化の規則に合致する例。

(c) 知澄混用

- (22) 〈参考例〉後遇雪峯，雪峯攔胸把駐，云：「是什摩！」（卷10，鼓山章，頁394/482）

〔校〕：「把駐」は『景德傳燈錄』卷18、『聯燈會要』卷9鼓山章では「攔住」に作る。本書卷10長慶章、卷19觀和尚章にも「攔胸把住」の句が見える。ただし「駐」、「住」は形似、かつ義において通ずる。

住 持遇切（澄母[d]遇韻去聲）／駐 中句切（知母[t]遇韻去聲）

これは「澄母の仄聲は知母に變わる」という濁音清化の規則に合致する例。

(d) 徹澄混用

- (23) 〈参考例〉先見白馬、超州，次歷徑山、荷玉。（卷10，鼓山章，頁394/482）

〔校〕：「超州」は「趙州」すなわち趙州從諗禪師であろう。本章の記述によると、鼓山神晏は中和2年（882）嵩山瑠璃壇で具足戒を受けたあと、禪宗に轉じ、擁毳遍參した。當時は「南に雪峯、北に趙州」と言われ、禪僧は多く南北を往來した。神晏はのち福州で雪峯禪師の法を嗣ぐことになるが、その前に河北の趙州觀音院に從諗禪師（778－897）を訪うたのであろう。「超」は「趙」の形誤かつ音誤。

趙 治小切（澄母[d]小韻上聲）／超 敕宵切（徹母[tʰ]宵韻平聲）

[3] 齒音

(e) 精從混用

- (24) 師云：「喚他來，隔窓相看。」侍者便喚。他新到一際上來。（卷6，石霜

章，頁257/321)

[校]:「一際」は「一齊」の音誤。高麗覺雲『拈頌説話』卷14石霜章に「古祖堂」を引き、「一齊」に改めている(韓國佛教全書，第5冊)。

齊 徂奚切(從母[dz]齊韻平聲)／際 子例切(精母[ts]祭韻去聲)

(25) 有一僧礼拜，起來立地。師云：「大才藏拙戸。」其僧又向一邊立。云：「喪却棟梁哉。」(卷9，韶山章，頁348/426)

[校]:『景德傳燈録』卷16韶山章は「哉」を「材」に作る。「哉」は「材」の音誤。

材 昨哉切(從母[dz]咍韻平聲)／哉 祖才切(精母[ts]母咍韻平聲)

(26) 〈参考例〉遍尋知識，參彼鹽官濟安大師。(卷17，溟州嶠山章，頁623/756)

[校]:鹽官の僧諱は「齊安」。その塔銘盧簡求撰「杭州鹽官縣海昌院禪門大師塔碑」(『文苑英華』卷868)、本書卷15鹽官章いずれも「齊安」である(本章は高麗増補部分)。

齊 徂奚切(從母[dz]齊韻平聲)／濟 子計切(精母[ts]霽韻去聲)

(27) 〈参考例〉師呵曰：「這野狐情！」(卷3，慧忠國師章，頁115/165)

[校]:「野狐情」は「野狐精」の形誤ならびに音誤。「野狐精魅」(『臨濟録』)、「野狐涎」(『鑑戒録』卷6)ともいう。人を誑かすものの謂い。

精 子盈切(精母[ts]清韻平聲)／情 疾盈切(從母[dz]清韻平聲)

精母は全清、從母は全濁、すなわち聲母の清濁混用である。現代閩音(廈門、福州)では從母精母は合流して同聲[ts]である。

(f) 書禪混用

- (28) 師上堂云：「『眞實離言說，文字別時行』，諸上座在教不在教？」（卷13，福先招慶章，頁506/602）

[校]：引用は四卷本『楞伽經』卷一の偈「言說別施行，眞實離名字，分別應初業，修行示眞實。」（T.36, 484c）。第1句（『祖堂集』引用では第2句）について、高崎直道注に「〈別施行〉は‘vyabhicāra’（逸脫。眞實から逸れること）の譯」という（『楞伽經』，佛典講座17，大藏出版，1980）。智旭の義疏が「言說別施行」に對して、「魏云：言說離眞實。唐云：言說則變異。」（續藏17，504a）とわざわざ異譯を擧げて參考に供するのは、このままでは言語否定の方向に取るのが困難に思われたからであろう。「言說別施行」ではどうしても肯定的に讀める。『祖堂集』の引用「別時に行わる」は記憶ちがいであるが、その際に「時」と「施」の音が、引用者にとって同音だったのではなかろうか。

施 式支（書母[c]支韻平聲）／時 市之切（禪母[dz]之韻平聲）

書母は全清、禪母は全濁、すなわち聲母の清濁混用が原因であつたのである。現代閩音（廈門、福州）では書母禪母は合流して同聲[s]である。

[牙音]

(g) 見群混用

- (29) 僧問：「古人道：『服像雖殊，妙機不二』，如何是不二底妙機？」師云：「你試分看。」（卷13，福先招慶章，頁507/603）

[校]：『祖堂集』の引用は僧肇「答劉遺民書」の2句。そこでは「妙機」は「妙期」である。元康疏にいう、「一道一俗，故云服像殊也。身雖有殊，心期不別也」。質問の僧ないし記録者は誤まって記憶していたらしいのだが、かれにあっては「妙機」と「妙期」が同音だったのであろう。

期 渠之切（群母[g]之韻平聲）／機 居依切（見母[k]微韻平聲）

「期」は群母（濁音）、「機」は見母（清音）、それが混同しているの
ある。

- (30) 〈参考例〉中塔和尚，嗣玄沙，在福州。師諱慧救，泉州莆田縣人也。
（卷12，中塔章，頁477/575）

〔校〕：「慧救」は「慧球」の誤。『景德傳燈錄』卷21は「福州臥龍山安國院
慧球寂照禪師，第二世住，亦曰中塔」。『永樂大典』卷8782に引く『清
源志』に「慧球，得法於玄沙」。

球 巨鳩切（群母[g]尤韻平聲）／ 救 居祐切（見母[k]宥韻去聲）

- (31) 〈参考例〉問：「古人有言：『目前無法，意在目前』，作摩生是在目前
意？」師曰：「不狂妄。」僧曰：「作摩生？」師曰：「他不是目前之法，非耳
目之所到。」（卷6，投子章，頁221/283）

〔校〕：「狂妄」は「誑妄」の誤。「狂妄」は放肆妄爲（やりたい放題むちゃ
なことをする）の義、「誑妄」は欺詐誑妄（人をあざむく）の義（『漢
語大詞典』の釋義に據る）。古人とは夾山善會禪師。本書卷7夾山章
に、この四句を含む説法の輯録がある。「夫有佛、有法、有祖已來，
時人錯會，謂言：『佛邊、祖邊、法邊，通代相承，至于今日。須依佛
祖法句意，與汝爲師言方是。』因此天下出無眼狂人，却成無智。不然，
他只如（知）無法本來是道，無一法當情，沒佛可成，沒道可修，沒法
可捨。故目前無法，意在目前，他不是目前之法，非耳目之所到。」（頁
259/325）つまり「目前無法，意在目前」（いまこの場を取るべき[教
えとしての]法はない。意[すなわち道]こそが現前している）とは「無
法本來是道」（教えるべき法のないのが本來の道のありかただ）とい
うことであって、問いの「目前にある意」たる道は、「不誑妄」（あざ
むくことなく、ありありと現前している）でなければならない。

本書には他にも同類がある。卷12荷玉章に「吾早曾經多劫修，不是等閑相狂惑」（頁450/546）とあるのは『證道歌』の二句、「狂惑」は正しくは「誑惑」である（『景德傳燈錄』卷30）。

誑 居況切（見母[k]漾韻去聲）／狂 渠放切（群母[g]陽韻平聲）

以上清濁混用16例のうち、清音を濁音に誤るもの4（25%）、濁音を清音に誤るもの12（75%）、参考例15を含めると前者9（29%）、後者22（71%）となり、異文別字の分布から見て、濁音清化傾向にあると言えるであろう。現代閩音（廈門、福州）では群母見母は合流して同聲[k]である。

【二】唇音非敷混用

上掲【5】唐代の語音變化によって發生した異文の項を見よ。

【三】齒音精組章組不分

(h) 清昌混用

(32) 師云：「在舍只言爲客易，臨筌方覺取魚難。」（卷9，九峯章，頁358/438）

[校]：諺語「家にいる時、旅に出るのはいとも簡單とのみ思う（旅に出てはじめて旅の辛さがわかる）。淵まで来てはじめて、魚を獲るのが難しいと知る。」「臨筌」は、『聯燈會要』卷23九峯章では「臨淵」に、『五燈會元』卷13九峯章では「臨川」に作る。この三種の書き方から見て、唐代の原文は「臨川」であったはずである。『祖堂集』はこれを近音の「臨筌」（筌は魚の縁語）に誤ったのであり、『聯燈會要』は「川」が「淵」の避諱であると考え、回改して「臨淵」としたのである。

川 昌縁切（昌母[tʃ]仙韻平聲）／筌 此縁切（清母[tɕ]仙韻平聲）

なお、現代閩南音では「川」「筌」二字は同音 [tshuan]（『漢字古今音表』，

中華書局，1993。「現代閩南音」という場合はこれに據る。以下同）。

(i) 心昌混用

(33) 曹山云：「曹山適來問，闍梨與摩祇對曹山，是什麼時節？但觸道觸道！」

師云：「却是相見時節。」（卷12，荷玉章，頁448/543）

〔校〕：「觸道」は「速道」の誤。本書卷7夾山章に「佛日云：『三道寶塔，曲爲今時。向上一路，請師速道速道！』」（頁262/327）。

速 桑谷切（心母[s]屋韻入聲）／觸 尺玉切（昌母[tʃ]燭韻入聲）

(j) 清禪混用

(34) 帝問：「既不是佛光，當此何光？」侍郎當時失對，被貶潮州。……侍郎云：「既不是佛光，當時何光？」師曰：「當是天龍八部釋梵助化之光。」（卷5，大顛章，頁182/241）

〔校〕：「當此何光？」、「當時何光？」、「當是天龍八部釋梵助化之光。」という三句を對比してみると、「當此」、「當時」はいずれも「當是」の誤りであるとわかる。「當時」は上文に牽かれて誤ったものであろうが、「當此」は音韻に関わる誤りであろう。

是 承紙切（禪母[dz]紙韻上聲）／此 雌氏切（清母[tʃ]紙韻上聲）

以上の3例は齒頭音（舌尖前音，平舌）と正齒音（舌面音，卷舌）の混同によるものである。

【四】齒音莊組章組不分

(k) 生書混用

(35) 問：「久戰沙場，爲什麼功名不就？」師云：「君王有道三邊靜，何勞萬里築長城？」進曰：「罷息干戈，縮手歸朝時如何？」師云：「滋（慈）雲普潤無邊際，枯樹無花爭奈何？」（卷19，靈雲章，頁716/851）

[校]:「縮手」は『景德傳燈錄』卷11靈雲章では「束手」に作る。「縮手」ならば拱手旁觀、「束手」は抵抗をやめて歸順する意。「束手」が正しく、「縮手」は近音による誤りであろう。

束 書玉切(書母[c]燭韻入聲)／縮 所六切(生母[j]屋韻入聲)

上例は生母(莊組, 照組二等)と書母(章組, 照母三等)の未分であろう。現代閩音(廈門、福州)ではきわめて近い音ないし同音である(廈門束[sɔk]縮[sɪk]／福州 束[souʔ]縮[souʔ文讀])。

【五】牙音見溪混用

(36) 經句日却問:「和尚, 前日豈不是, 除此之外, 何者是心?」(卷5, 大顛章, 頁184/242)

[校]:「豈」は「既」の音誤である。『宗鏡錄』卷98大顛和尚條では「經日却問:『前日既不是心, 除此之外, 何者是心?』」(T. 48, 944a)、『景德傳燈錄』卷14大顛章も「經句日, 師却問曰:『前者既不是, 除此外, 何者是心?』」。

既 居家切(見母[k]未韻去聲)／豈 祛豨切(溪母[kʰ]尾韻上聲)

(37) 〈1〉師問雲居:「什摩處去來?」對曰:「踏山去來。」師曰:「阿那个山敢住?」對曰:「阿那个山不敢住?」(卷6, 洞山章, 頁242/305)

〈2〉南泉…云:「雖是後生, 敢有彫琢之分。」(卷6, 洞山章, 頁232/296)

〈3〉問:「如何是修行路?」師云:「好个阿師, 莫作客。」僧云:「畢竟如何?」師云:「安置則不敢。」(卷14, 茗溪章, 頁530/629)

[校]:上掲三例の「敢住」、「敢有」、「不敢」はそれぞれ「堪住」、「堪有」、「不堪」の誤りである。〈1〉『景德傳燈錄』卷17、『聯燈會要』卷22の雲居章は「堪住」に作る。〈2〉『景德傳燈錄』卷15洞山章は「此子雖後生, 甚堪彫琢」。〈3〉『景德傳燈錄』卷6茗溪章は「安置則不堪」。

堪 口含切（溪母[kʰ]覃韻平聲）／敢 古覽切（見母[k]敢韻上聲）

- (38) 有人舉似師，師云：「老僧自去勘破。」師自去問：「趙州路，什麼處去？」老婆云：「驀底去！」師歸院，向師僧云：「敢破了也。」（卷18，趙州章，頁665/793）

[校]：さいごの「敢破」は上文の「勘破」に據って改めるべきである。

『景德傳燈錄』卷10趙州章、『趙州錄』卷下も「勘破」に作っている。

勘 苦紺切（溪母[kʰ]勘韻去聲）／敢 古覽切（見母[k]敢韻上聲）

- (39) 因舉體師叔《古曲偈》曰：「古曲發聲雄，今古唱還同。若論第一拍，祖佛盡迷蹤。」師拈問：「只如祖佛盡迷蹤，成得个什麼邊事？」僧曰：「成得个佛未出世時事，黑豆未萌時事。」〔師云：「只如佛未出世時事，黑豆未萌時事，成得个什麼邊事？」〕云：「某甲到這裏去不得。未審師如何？」（卷10，長慶章，頁403/491）

[校]：「去不得」は「舉不得」（言舉げできない、言えない）の誤りである。本條は卷11惟勁禪師章（440頁）にも採録があり、そこでは正しく「舉不得」となっている。

舉 居許切（見母[k]語韻上聲）／去 丘倨切（溪母[kʰ]御韻去聲）

- (40) 師云：「不聞道：『繁興大用，舉必全眞？』」（卷13，報慈章，頁500/597）

[校]：引用は法藏『華嚴金師子章』の「論五教」の二句（中國佛教典籍選刊『華嚴金師子章校釋』30頁）で、「舉」は「起」の誤り。「萬象が生起するとき、かならず眞實の全體が現れる」。本書卷13山谷章、卷20五冠山章にも引用があるが、みな「起」である。

舉 居許切（見母[k]語韻上聲）／起 墟里切（溪母[kʰ]止韻上聲）

- (41) 師云：「秀才唯獨一身，還別有眷屬不？」對曰：「某甲有山妻，兼有兩顆血屬。」（卷15，西堂章，頁553/656）

[校]：「顆」は「个」の音誤。本書卷14馬祖章に類似の句がある。「有西川黃三郎，教兩個兒子投馬祖出家。」（頁519/613）

个 古賀切（見母[k]箇韻去聲）／顆 苦果切（溪母[kʰ]果韻上聲）

- (42) 〈1〉這個老漢行脚時，或遇著草根下有个漢，便從頭顙上啄（卓）一下錘，看他若知痛痒，便將布袋盛米供養。他古人个中總似你與摩容易，何處更有今日事也？」（卷16，黃檗章，頁613/732）

〈2〉師別申一問：「隱密全生（眞）時，人知有道得；大省無辜時，人知有道不得。於此二途，猶是時人昇降處。未審長老親道、自道、云何道？」徑山云：「我家道處無可道。」（卷11，佛日章，頁444/536）

[校]：〈1〉「个中」は「可中」（もし）の誤り。『景德傳燈錄』卷9黃檗章は正しく「可中」に作る。張相『詩詞曲語辭匯釋』卷1に「可中，猶云其或、假使也。」〈2〉「無可道」（言葉で表現できるものはない）は『景德傳燈錄』卷11徑山章では「無箇（个）道」（[言葉で表現できない以上]言うということがない）に作る。

可 枯我切（溪母[kʰ]哿韻上聲）／个 古賀切（見母[k]箇韻去聲）

- (43) 〈參考例〉塔在金陵後湖溪籠山也。（卷3，牛頭章，頁103/138）

[校]：「溪籠山」は「鷄籠山」の誤り。

鷄 古奚切（見母[k]藥韻入聲）／溪 苦奚切（溪母[kʰ]藥韻入聲）

- (44) 〈參考例〉師行却時，到善勸寺，欲得看經。（卷14，百丈章，頁538/638）

[校]：「行却」は「行脚」の誤り。

脚 居勺切（見母[k]藥韻入聲）／却 去約切（溪母[kʰ]藥韻入聲）

以上見母（不送氣）溪母（送氣）混用のうち、見母を溪母に誤るもの4（参考例2）、溪母を見母に誤るもの3。

【六】喉音影以混用

(45) 偶一日買（賣）柴次，有客姓安名道誠，欲賣（買）能柴。其價相當，送將至店。道誠與他柴價錢，惠能得錢，却出門前，忽聞道誠念《金剛經》，惠能亦聞，心開便悟。（卷2，惠能章，頁88/124）

[校]：「亦聞」は「一聞」の誤り。この記述は敦煌本『六祖壇經』にもとづいている。「忽有一客賣（買）柴，遂領惠能至於官店。客將柴去，惠能得錢，却向門前，忽見一客讀《金剛經》，惠能一聞，心明便悟。」（敦煌博物館藏本，『敦煌寫本壇經原本』，文物出版社，1997）

一 於悉切（影母[ʔ]質韻入聲）／亦 羊益切（以母[j]昔韻入聲）

【七】喉音匣云混用

(46) 百丈和尚，嗣馬祖大師，在江西。師諱懷海，福州長樂縣人也，姓黃。（卷14，百丈章，頁536/636）

[校]：百丈懷海の俗姓は、陳詡の撰する「唐洪州百丈山故懷海禪師塔銘」が「大師，太原王氏，福州長樂縣人。遠祖以永嘉喪亂徙于閩隅。」（『敕脩百丈清規』卷6、『全唐文』卷336）というのに従うべきである。上文【2】方言音によって混同された例参照。

王 雨方切（云母[j]陽韻平聲）／黃 胡光切（匣母[ɣ]唐韻平聲）

【韻母】

『祖堂集』の異文別字の検討を通じて知られる韻母混用の記述においては、同攝同調を「同用」、同攝異調を「通用」、異攝同調を「混用」、異攝異調を

「合用」と呼ぶことにする。〔聲母〕の項でとりあげた例は舉例を省略し、語彙のみ掲出する。(*は参考例)

【一】果攝 (a) 哿箇通用 可／个

(b) 果箇通用 个／顆

【二】遇攝 (a) 魚虞同用 居／俱

(b) 語御通用 舉／去

*曙／暑

(c) 魚麻混用 居／家

(d) 麌遇通用 *住／柱

*注／柱

【三】蟹攝 (a) 齊祭通用 齊／際

(b) 蟹駭同用 駭／解

(c) 霽祭同用 濟／際

【四】止攝 (a) 支脂同用 支／祇

(b) 之微同用 期／機

(c) 至志同用 致／置

(d) 至未同用 貴／媿

(e) 脂旨通用 祇／指

(f) 支至通用 離／利

(g) 旨至通用 至／指

(h) 尾未通用 既／豈

(i) 止語混用 舉／起

(j) 至霽混用 祕／閉

【五】效攝 (a) 皓号同用 保／報

(b) 蕭陽混用 遼／量

【六】咸攝 (a) 覃敢通用 堪／敢

(b) 敢勘通用 勘／敢

(c) 盍合同用 踏／榻

【七】山攝 (a) 寒旱通用 懶／

蘭・攔

(b) 桓緩通用 管／觀

斷／端

(c) 桓換通用 盤／半

(d) 末黠同用 撥／拔

(e) 刪銜混用 巖／顏

【八】臻攝 (a) 文問通用 運／雲

(b) 真侵混用 塵／沈

(c) 質昔混用 一／亦

【九】宕攝 (a) 陽唐同用 王／黃

(b) 陽漾通用 *鄉／嚮

(c) 陽江混用 雙／霜

【十】曾攝 (a) 職質混用 翼／逸

(b) 職德同用 即／則

【一】果攝

(a) 哿箇通用（歌韻上去）

(42) 〈1〉「个中」→「可中」（卷16，黃檗章，頁613/732）

〈2〉「無可道」→「無箇（个）道」（卷11，佛日章，頁444/536）

可 枯我切（溪母哿韻上聲）／个 古賀切（見母箇韻去聲）

(b) 果箇通用（戈韻上、歌韻去）

(41) 「兩顆」→「兩個」（卷15，西堂章，頁553/656）

个 古賀切（見母箇韻[a]去聲）／顆 苦果切（溪母果韻[ia]上聲）

【二】遇攝

(a) 魚虞同用

(47) 又頌曰：「進道先須立自身，直交行處不生塵，眞僧不假俱嚴（巖）室，到處無心即在人。」（卷8，龍牙章，頁334/405）

[校]：「俱」は「居」の誤り。『禪門諸祖師偈頌』卷上之上に録する「龍牙和尚偈頌」第4首は正しく「居」に作る。

居 九魚切（見母魚韻[iɔ]平聲）／俱 舉朱切（見母虞韻[iɔ]平聲）

〈押韻例〉

[卷2，達摩，3] 猪魚輪虞

[卷4，石頭，2] 語語矩麤祖苦觀姥處御付注句遇住遇悟互耳[固]醋布步路
度暮母厚

[卷9，落浦，2-2] 虛魚珠無虞

[卷10，鏡清，3] 無虞如魚

[卷15，龐居士，2] 如虛居魚夫虞

[卷15，龐居士，7] 如虛除餘魚珠驅虞

〈變文異文例〉

《孟姜女變文》：「姜女悲啼，向前借問：『如許鬻饅，佳（家）俱（居）何郡？因取夫迴，爲君傳信。君若有神，兒當接引。』」（『敦煌變文校注』60頁，王重民校録に従う）

〈筆記例〉

《大唐新語》卷13：「侯思止出自皂隸，言音不正。以告變授御史。時屬斷屠，思止謂同列曰：『今斷屠宰，鷄云圭猪云誅魚云虞驢云平縷，俱云居不得喫云詰，空喫結米云弭麵泥去，如云儒何得不饑！』」

侯思止は雍州醴泉の人、『舊唐書』酷吏傳上に傳があり、『朝野僉載』卷2には「醴泉に餅食を賣る人」だったと言っている。『太平廣記』卷258「侯思正」條に引く『御史臺記』の記述がもっとも詳しい。この例は魚韻字の「猪」「魚」「驢」「俱」「如」を虞韻字の「誅」「虞」「縷平聲」「居」「儒」に發音した記録で、則天時代7世紀末の關中の口語音では魚虞韻の區別がなかったのである（趙振鐸「唐人筆記裏面的方俗讀音」（一）參照）。

『祖堂集』偈頌押韻例の落浦元安（834－898）は鳳翔の人、關中音區である。その他、石頭希遷は端州の人、鏡清道忞は温州の人、龐居士は衡陽の人。五代南唐朱翱反切も魚虞混切であり、この一條の異文の背景と見ることができる。現代閩音（廈門、福州）では「居」「俱」二字は同音である（廈門 居[ku1]俱[ku1]／福州 居[ky1]俱[ky1]）。

(b) 語御通用（魚韻上去）

(39)「去不得」→「舉不得」（卷10，長慶章，頁403/491）

舉 居許切（見母語韻上聲）／去 丘倨切（溪母御韻去聲）

(48)〈參考例〉問：「瞥然便見時如何？」師曰：「曉星分暑色，爭似太陽輝？」

（卷9，落浦章，頁341/415）

[校]：「暑色」は「曙色」の誤。『景德傳燈録』卷16樂普章は「曙色」に作

る。

曙 常恕切（禪母御韻去聲）／暑 舒呂切（書母語韻上聲）

〈押韻例〉

〔卷19, 香嚴, 6〕語許侶語矩裏處慮御樹遇

〔卷4, 石頭, 2〕語語矩裏祖苦覩姥處御付注句遇住遇悟互耳〔固〕醋布步路
度暮母厚

(c) 魚麻混用

(49) 師問：「汝是白家兒不？」舍人稱白家易。」（卷3, 鳥窠章, 頁105/146）

〔校〕：「稱」（名のる）と言っているから、「白家易」が白居易を指すことは明らかであり、「居」を上文に牽かれて「家」に誤ったのである。二字は當時の南方音では同音（古音の遺存）であつたらしい。小稿「祖堂集鳥窠章音韻考證」（『白居易研究年報』第9號, 2008）參照。

居 九魚切（見母魚韻[iɔ]平聲）／家 古牙切（見母麻韻[a]平聲）

(d) 麌遇通用（虞韻上去）

(50) 〈參考例〉〈1〉問：「古人有言：『知有佛向上事，方有語話分。』如何是語話？」師把柱云：「道什麼？」僧無對，被師踏。（卷7, 雪峯章, 頁282/348）

〈參考例〉〈2〉師夜半時叫喚：「賊也！賊也！」大衆皆走。師於僧堂後遇一僧，攔胸把柱，叫云：「捉得也！捉得也！喚維那來！」（卷18, 紫胡章, 頁667/798）

〔校〕：「把柱」は「把住」の誤。〈1〉は『景德傳燈錄』卷16雪峯章に、〈2〉は『景德傳燈錄』卷10衢州子湖巖利蹤禪師章に、ともに「把住」に作る。

住 持遇切（澄母遇韻去聲）／柱 直主切（澄母麌韻上聲）

- (51) 〈参考例〉僧軌辯出來礼拜，起云：「乞和尚杖責。…」先師又悲聲云：「自少來不曾把手指柱別人，豈況造次杖責？…」(卷8，青林章，頁327/397)
- [校]：この一則は洞山良价の弟子青山師虔が語った「洞山僧堂のストライキ」の話で、柳田聖山『純禪の時代 祖堂集ものがたり』(禪文化研究所，1984)に紹介されたもの。『祖堂集』のみが伝える記事である。「指柱」は「指注」の誤。「指注」は語録常見の語で、いらざる指圖、指示、注釋、評論をすること。

注 之戌切(章母遇韻去聲)／柱 直主切(澄母麌韻上聲)

〈押韻例〉

[卷1，龍樹，2淨修] 樹務住趣遇雨麌

[卷19，香嚴，6] 語許侶語矩麌處慮御樹遇

[卷4，石頭，2] 語語矩麌祖苦覩姥處御付注句遇住遇悟互耳[固]醋布步路
度暮母厚

【三】蟹攝

(a) 齊祭通用(齊韻平、祭韻去)

(24) 「一際」→「一齊」(卷6，石霜章，頁257/321)

齊 徂奚切(從母齊韻[ei]平聲)／際 子例切(精母祭韻[iæi]去聲)

二字は現代閩方音では、廈門 齊[tse文讀]際[tse]／建甌 齊[tsi文讀]際[tsi]／福州 齊[tsɛ]際[tsie] (聲調は異なる)。

(b) 蟹駭同用(佳韻平、皆韻上)

(52) 問：「如何是祖師西來意？」師云：「太似解雞犀！」(卷6，洞山章，頁233/297)

[校]：「解雞犀」は『景德傳燈錄』卷15洞山章が「駭雞犀」に作るのに従っ

て改めるべきである。「駭雞犀」は通天犀のことで、南方人の呼稱であった（『抱朴子』登涉篇）。宋張世南『游宦紀聞』卷2に「通天犀，腦上角千歲者，長而銳，白星微端，能出氣通天，則能通神，可破水駭鷄，故曰通天。」

駭 侯楷切（匣母駭韻[ei]上聲）／解 胡賣切（匣母蟹韻[æi]上聲）
現代閩南話では「駭」[hai5]、「解」[hai5文讀]で同音（『漢字古今音表』）。

(c) 霽祭同用（齊韻去、祭韻去）

(53) 問：「如何是就事學？」師云：「著衣掃地。」「如何是就理學？」師云：「騎牛去穢。」「向上事如何？」云：「溥際不收。」（卷12，後疎山章，頁454/552）
[校]：「溥際不收」（世界に収まりきれない）は『景德傳燈錄』卷20（四部叢刊本、東禪寺版）、『五燈會元』卷13（續藏本）は同じ、『宗門撫英集』、『五燈會元』（寶祐元年[1253]刊本）、『景德傳燈錄』（高麗版）は「溥濟不收」（救済の杵に収まりきれない）に作る。

(54) 林際和尚聞此消息，教侍者探師。（卷17，普化章，頁635/759）

[校]：「林際」は「臨濟」の訛。本書の臨濟の表記は、「臨濟」7、「林濟」2、「林際」16。『祖庭事苑』卷1にいう、「林際，當作臨濟，院名也。」『臨濟錄』に附する「塔銘」に「鎮州城東南隅，臨滹沱河側小院住持。其臨濟因地得名。」

濟 子計切（精母霽韻[ei]去聲）／際 子例切（精母祭韻[æi]去聲）
現代閩南話では二字同音[tse4]（『漢字古今音表』）。

【四】止攝

(a) 支脂同用

(55) 問：「只如維摩，登時或有人問，和尚如何祇遣？」師云：「唯有門前鏡

湖水，清風不改舊時波。」（卷10，化度章，頁393/481）

〔校〕：「祇遣」（あしらう、應對する）の用例はこれのみで、他では「支遣」と書かれる。

支 章移切（章母支韻[ie]平聲）／祇 旨夷切（章母脂韻[ji]平聲）

〈押韻例〉

〔卷1，富那耶奢，2淨修〕師衰夷脂彌差支

〔卷14，高城，1－8〕師錐脂窺支

〔卷19，香嚴，17－3〕離支遲脂知支

〔卷3，鳥窠，1〕師脂時之知支

〔卷4，丹霞，5－4〕尼脂池支之之

〔卷17，正原，3〕時之支支悲脂

〔卷19，香嚴，15〕遲脂機微怡之知支

(b) 之微同用

(29) 「妙機」→「妙期」（卷13，福先招慶章，頁507/603）

期 渠之切（群母之韻[ie]平聲）／機 居依切（見母微韻[iəi]平聲）

〈押韻例〉

〔卷1，阿難，3〕〔卷2，僧伽難提，1〕機微之之

〔卷19，香嚴，15〕遲脂機微怡之知支

〔卷17，岑和尚，6〕奇支疑之非微

〔卷19，香嚴，1〕知儀支持之機微

〔卷19，香嚴，27〕離支稀微疑之

〔卷9，落浦，1－2〕疑之姿脂揮微

〔卷17，岑和尚，15〕議寘依微思時之如魚

(c) 至志同用（脂韻去、之韻去）

- (56) 〈1〉有時上堂云：「汝諸人來者裏覓什麼？莫要相鈍致摩？」便起去。

（卷7，雪峯章，頁280/346）

- 〈2〉進云：「和尚莫通三教也無？」師云：「三教且致，老君什麼時生？」

（卷8，欽山章，頁307/375）

- 〈3〉只如曹山亦置此問於石霜…（卷12，禾山章，頁461/557）

〔校〕：「鈍致」「且致」は「鈍置」（コケにする）「且置」（～はさて置き）と書くべきであり、「置問」は「致問」（質問をもってゆく、問いかける）と書くべきである。

致 陟利切（知母至韻[jɪ]去聲）／置 陟吏切（知母志韻[ie]去聲）

〈押韻例〉

〔卷19，香嚴，17－7〕諱未置志愧至

〔卷14，章敬，1〕子止字志里止位至未

(d) 至未同用（脂韻去、微韻去）

- (57) 〈1〉問：「寶在衣中，爲什麼伶俚辛苦？」師云：「過在阿誰？」僧曰：

「只如認得又作麼生？」師云：「更是伶俚。」僧曰：「認得爲什麼却伶俚？」師云：「不媿已有。」（卷10，鏡清章，頁385/470）

- 〈2〉師云：「…若是聲聞之輩，則有取捨之理；若是全收，一法不取，一法不捨。媿無偏見，皆取來往之次，方知有無。」（卷12，禾山章，頁458/555）

〔校〕：「媿」は「貴」（欲の義）、『祖庭事苑』卷1に「媿圖當作貴圖。」『曹山録』解釋洞山五位顯訣に「今見諸學士詮揀先人意度，似有誤彰音障，不免聊爲敘其差當，媿音貴在不混其功。」（T. 47, 531c）この「彰」「媿」の音注は、「彰」を去聲に讀んで「障」の義に解し、「媿」を未韻に讀んで「貴」の意に解すべきをいう。

貴 居胃切（見母未韻[iuəi]去聲）／媿 俱位切（見母至韻[iu]去聲）

〈押韻例〉

[卷19, 香嚴, 17-7] 諱未置志愧至

[卷14, 章敬, 1] 子止字志里止位至未未

(e) 脂旨通用 (脂韻平上)

(58) 内侍問：「古人有言：一切衆生日用而不知。作摩生是衆生日用而不知？」

師乃指揖内侍曰：「喫橄欖子。」(卷10, 長生章, 頁379/463)

[校]：「指揖」は「祇揖」の誤。本書卷6 洞山章に「師曰：『即今作摩生？』」

其僧進前叉手而立。師乃祇揖云：『喫茶去！』」

祇 旨夷切 (章母脂韻平聲) / 指 職雉切 (章母旨韻上聲)

(f) 支至通用 (支韻平、脂韻去)

(59) 問：「利婁相擊，不側耳者如何？」云：「哲。」(卷10, 鵝湖章, 頁380/456)

[校]：「利婁」は「離婁」の誤。『孟子』離婁篇に見える明目の人。

離 呂支切 (來母支韻[jɛ]平聲) / 利 力至切 (來母至韻[jɪ]去聲)

〈押韻例〉

[卷1, 富那耶奢, 1] 離支二至

[卷15, 鵝湖, 1] 旨旨是紙示至池知支

〈變文例〉

《維摩經講經文》(五)：「魔王隊仗利(離)天宮，欲惱聖人來下界。」

(『敦煌變文校注』885頁)

案ずるに、「離」に去の義があり、去聲に讀む。したがってここでは「利」と同音になる。

止攝諸韻は「唐五代は支脂之三韻と微韻がしだいに合併する時期で、五代末になると完全に同用されるに至る。」(沈祥源, 1985)

(g) 旨至通用（脂韻上去）

(60) 〈1〉問：「如何是道中指寶？」師曰：「莫詔曲！」（卷4，藥山章，頁171/229）

〈2〉到明日，批排茶飯屈喫次，師指教童子指僧。童子便來其僧身邊立，其僧便摩童子頭，云：「和尚喚。」（卷5，道吾章，頁206/265）

[校]：〈1〉「指寶」は「至寶」の誤。『景德傳燈錄』卷14藥山章は「至寶」に作る。〈2〉「指僧」は「至僧」の誤りであろう。

至 脂利切（章母至韻去聲）／指 職雉切（章母旨韻上聲）

〈押韻例〉

[卷4，丹霞，5-6] 水旨遂至偽真

(h) 尾未通用（微韻上去）

(36) 「豈不是」→「既不是」（卷5，大顛章，頁184/242）

既 居家切（見母未韻去聲）／豈 祛豨切（溪母尾韻上聲）

(i) 止語混用（之韻上、魚韻上）

(39) 「舉必全興」→「起必全興」（卷13，報慈章，頁500/597）

舉 居許切（見母語韻[iɔ]上聲）／起 墟里切（溪母止韻[ie]上聲）

〈押韻例〉

[卷11，雲門，1-1] 子止許語氣未

(j) 至霽混用（脂韻去、齊韻去）

(61) 閉魔巖和尚，嗣馬祖。（卷15閉魔巖和尚，頁583/698）

[校]：「閉魔巖」は『古清涼傳』卷上の記述では「祕麼巖」（T. 51, 1195b）で、これが訛って「閉魔巖」となったものらしい。『宋高僧傳』卷21では「祕魔巖」。上文【3】中古音が近いために發生した異文参照。

祕 兵媚切（幫母至韻[jɪ]去聲）／閉 博計切（幫母霽韻[ɛi]去聲）

【五】效攝

（a）皓号同用（豪韻上去）

（62）又云：「靈雲諦當甚諦當，敢報未徹在！」（卷10，玄沙章，頁376/458）

〔校〕：「報」は本書卷19靈雲章、『玄沙廣錄』卷上、大慧『正法眼藏』卷上
はならびに「保」に作る。「敢えて保す」は強い口調で「保證する」
義。

保 博抱切（幫母皓韻上聲）／報 博耗切（幫母号韻去聲）

〈押韻例〉

〔卷2，闇夜多，1〕道皓倒好燥（躁）号教效

（b）蕭陽混用

（63）〈1〉處世道流（孤），興慈量闊。（卷2，道信章，淨修讚，頁82/115）

〈2〉問：「量郭無涯，爲什麼不容自己？」（卷9，落浦章，頁342/417）

〔校〕：「量闊」「量郭」ともに果てしなく廣い義で用いられているから、
「量」は「遼」か「廖」の音誤であろう。本書卷2般若多羅章淨修讚
に「道源遼廓」の句があるので、「遼」字を取る。

遼 落蕭切（來母蕭韻[ɛu]平聲）／量 呂張切（來母陽韻[iaŋ]平聲）

二字は上古、中古、近代、現代方音ともに對應するものがないが、上
古音（「遼」[liau]、「量」[lian]、『漢字古今音表』）が近いために生じた
か。

【六】咸攝

（a）覃敢通用（覃韻平、談韻上）

（37）「敢住」→「堪住」（卷6，洞山章，頁242/305）

堪 口含切（溪母覃韻[ɒm]平聲）／敢 古覽切（見母敢韻[am]上聲）

(b) 敢勘通用（談韻上、覃韻去）

(38) 「敢破」→「勘破」（卷18, 趙州章, 頁665/793）

勘 苦紺切（溪母勘韻[ɒm]去聲）／敢 古覽切（見母敢韻[am]上聲）

(c) 盍合同用（談韻入、覃韻入）

(64) 問：「朗月處空，時人盡委。未審室內事如何？」師云：「自少出家，不作活計。」學曰：「与摩則不爲今時去也。」師云：「老僧自疾不能救，爭能救諸人疾？」學曰：「与摩則來者無依。」師云：「依則榻著地，不依則一任東西。」（卷18, 趙州章, 頁663/791）

[校]：「榻著地」は「踏著地」の誤。『趙州錄』卷上は「踏著地」に作る。

踏 他合切（透母合韻[ɒp]入聲）／榻 吐盍切（透母盍韻[ap]入聲）

咸攝覃談二韻は『廣韻』に同用とされるように、唐代からすでに一組であった（沈祥源，1985）。

【七】山攝

(a) 寒旱通用（寒韻平上）

(64) 〈1〉此時有堅固禪師、蘭、讓三人爲世宗匠，僉曰：「彼石頭上有眞師子吼。」（卷4, 石頭章, 頁149/199）

〈2〉時有人拈問師：「只如長慶行這個拄杖，意作摩生？」師云：「宗師老攔，無自出身。」（卷10, 鏡清章, 頁388/474）

[校]：〈1〉「蘭」は懶瓚を指す。本書卷3 懶瓚章参照。『宋高僧傳』卷9 石頭傳では「初嶽中有固、瓚、讓三禪師」という。〈2〉「老攔」は「老懶」の誤。

懶 落旱切（來母旱韻上聲）／蘭・攔 落干切（來母寒韻平聲）

(b) 桓緩通用 (桓韻平上)

(66) 〈1〉後只觀望師兄來。(卷4, 藥山章, 頁173/230)

〈2〉只觀貪諍論。(卷14, 馬祖章, 頁515/611)

〈3〉講經講論座主只觀誹謗馬祖。(同)

〈4〉只觀貪講經論。(同)

[校]:「只觀」は「只管」の音誤。上文【4】南方音では聲調が同じであつたために發生した異文參照。

管 古滿切 (見母緩韻上聲) / 觀 古丸切 (見母桓韻平聲)

(12) 「坐端」→「坐斷」(卷9, 落浦章, 頁340/415)

斷 徒管切 (定母緩韻上聲) / 端 多官切 (端母桓韻平聲)

(c) 桓換通用 (桓韻平去)

(2) 「定半星」→「定盤星」(卷10, 長慶章, 頁406/494)

盤 薄官切 (並母桓韻平聲) / 半 博幔切 (幫母換韻去聲)

(d) 末點同用 (桓韻入、山韻入)

(3) 「拔眉」→「撥眉」(卷12, 龍迴章, 頁476/574)

撥 北末切 (幫母末韻[uat]入聲) / 拔 蒲八切 (並母點韻[æt]入聲)

(e) 刪銜混用 (山攝刪、咸攝銜)

(67) 〈1〉師一日看經次, 白顏問:「和尚休得看經, 不用攤人得也。」(卷4, 藥山章, 頁176/232)

〈2〉師到百顏。顏問:「近離什麼處?」(卷6, 洞山章, 232頁)

[校]:〈1〉「白顏」〈2〉「百顏」は、『景德傳燈録』に收めるところでは

「栢巖」(卷7)「百巖」(卷14)に作る。

巖 五銜切(疑母銜韻[am]平聲)／顔 五姦切(疑母刪韻[en]平聲)

二字は現代閩音(福州)では同音である(巖[ŋaŋ平]顔[ŋaŋ平])。

【八】臻攝

(a) 文問通用(文韻平去)

(68) 心法無形，通貫十方，在眼曰見，在耳曰聞，在手執捉，在脚雲奔，本是一精明，分成六和合。(卷19，臨濟章，頁720/857)

[校]:「雲奔」は「運奔」の誤。『臨濟録』示衆は「運奔」に作る。

運 王問切(云母問韻去聲)／雲 王分切(云母文韻平聲)

(b) 眞侵混用(臻攝眞、深攝侵)

(69) 一切事來，總須向這裏盪羅取。頭頭上須及，物物上須通。若有毫髮事乃(及)不盡，則被沈累，豈況於多？」(卷8，雲居章，頁298/366)

[校]:「沈累」は「塵累」の誤。『禪林僧寶傳』卷6雲居弘覺禪師傳、『聯燈會要』卷22洪州雲居道膺禪師章は「塵累」に作る。

塵 直珍切(澄母眞韻[jen]平聲)／沈 直深切(澄母侵韻[jem]平聲)

雲居道膺禪師(?-902)は幽州薊門玉田(河北省唐山市)の人、25歳で幽州范陽の延壽寺で受戒し、のち長安終南山の翠微寺をへて洪州洞山(江西省宜豐縣)へ行き、良价禪師に嗣法、中和三年(833)以後終生洪州雲居寺(永修縣)に住した。この人の説法の語に、「塵」[-n]を「沈」[-m]に誤る現象が見られるのであるが、これは鼻音韻尾の消失合併にかかわる問題である。ではどの地域の方音であろうか。宋元江西詞人の用韻研究によれば、混用は前期に少なく、後期になって顯著になるといい(魯國堯1992)、宋代福建詩詞においてもごくまれであるという(劉曉南1999、魯國堯1989)。『祖堂集』異文別字には上掲(67)にその例が見える。「沈」

「塵」二字は現代閩音（福州）では同韻であり（沈[t'in]塵[tin]）、現代官話（北京）・贛語（南昌）は二字同音である（北京[tʂ'an]・南昌[tsən]）。

(c) 質昔混用（眞韻入、清韻入）

(45) 「亦聞」→「一聞」（卷2，惠能章，頁89/124）

一 於悉切（影母質韻[jet]入聲）／亦 羊益切（以母昔韻[iæk]入聲）

〈變文例〉

《舜子變》：「後阿嬢亦（一）見舜子，五毒嗔心便起。」（『敦煌變文校注』201頁）

《廬山遠公話》：「却至香爐峯北邊，見一僧人，造一禪庵，結跏敷坐，念經之次。樹神亦（一）見，當時隱却鬼神之神形。」（同253頁）

「一」「亦」の通用は敦煌文獻にしばしば見られるところであるが、ここは敦煌本『六祖壇經』（敦煌寫本に保存された最古のテキスト）に基づきながら、敦煌寫本は2本（S. 5475、敦煌市博物館077）とも誤らず、『祖堂集』が誤っている。入聲韻尾[-t][-k]の混用は『祖堂集』偈頌の押韻にも1例みえる（下文「曾攝職質混用例」）。

【九】宕攝

(a) 陽唐同用

(46) 「黃」→「王」（卷14，百丈章，頁536/636）

〔校〕上記【2】方言音によって混同された例参照。

王 雨方切（云母陽韻[ian]平聲）／黃 胡光切（匣母唐韻[an]平聲）

〈押韻例〉

〔卷4，丹霞，2-8〕 良霜陽堂唐

〔卷7，雪峯，8〕 章陽光唐

〔卷10，玄沙，3〕 常王陽光唐

- [卷17, 岑和尚, 10] 香常陽光唐
[卷19, 香嚴, 3-2] 當唐量傷妨陽
[卷19, 香嚴, 13] 堂唐詳常陽
[卷19, 靈雲, 2] 常唐光王陽

(b) 陽漾通用 (陽韻平去)

(70) 〈参考例〉若也馳求知解義句, 則万里望嚮關。

(卷5, 三平章, 頁210/269)

[校]: 「嚮關」は「鄉關」の誤。『景德傳燈錄』卷14は「鄉關」に作る。

鄉 許良切 (曉母陽韻平聲) / 嚮 許亮切 (曉母漾韻去聲)

(71) 〈参考例〉問: 「箭路投鋒時如何?」師云: 「好手不中的。」「盡眼勿標時如何?」師曰: 「不放隨分好手。」(卷7, 雪峯章, 頁281/347)

[校]: 「不放」は「不妨」の誤。「標的なき箭を射るとき、本分に應じた好手たるを妨げない。」「景德傳燈錄」卷16雪峯章は「不妨」に作る。

妨 敷方切 (敷母陽韻平聲) / 放 甫妄切 (非母漾韻去聲)

〈押韻例〉

[卷4, 丹霞, 1-6] 長陽茫唐愴漾

上掲【5】唐代の語音變化によって發生した異文参照。

(c) 陽江混用 (宕攝陽、江攝江)

(72) 問: 「初登雪嶺, 正覺道成。爲什麼霜林方傳玉葉?」師云: 「示有明星現, 枝條異翠今。」(卷12, 禾山章, 頁466/561)

[校]: 「霜林」は「雙林」の誤であろう。問いは「佛陀は雪山で成道されたのに、なぜ沙羅雙樹の下で入滅される時になって、初めて傳法なされたのか」の意。

雙 所江切（生母江韻[ɔŋ]平聲）／霜 色莊切（生母陽韻[iɑŋ]平聲）
〈押韻例〉

〔卷2，達摩章般若多羅識，1〕 羊昌陽江江

【十】曾攝

（a）職質混用（曾攝蒸韻入、臻攝眞韻入）

（73）師有時良久，云：「自作自受。」或時見僧入門來，云「患顛那？作摩？」僧便問：「未審過在什麼處？」師云：「不是蕭逸，爭取蘭亭？」（卷12，禾山章，頁455/554）

〔校〕：「蕭逸」は「蕭翼」の訛。蕭翼が太宗の命を受けて僧辯才から《蘭亭序》搨本を詐取したことは、『法書要録』卷3、『隋唐嘉話』卷下（蕭翊に作る。同音）、『獨異志』卷中、『唐詩紀事』卷5、『能改齋漫録』卷5、『雲麓漫鈔』卷6等に見える。しかし「蕭逸」に作る資料は『祖堂集』のほかになかった。

翼 與職切（以母職韻[iɛk]入聲）／逸 夷質切（以母質韻[ət]入聲）
すなわち入聲韻尾が異なるわけであるが、これは何が原因であろうか。禾山無殷（884－960）は福州連江縣の人である。現代閩東福州方音では、翼[iʔ文讀]、逸[iʔ]で同音（『漢語方音字匯』）、宋代福建人の詩詞においては[-t]、[-k]通押例が224を数える。「こうした現象から、宋代閩地の通語の入聲韻尾[-t]、[-k]はかなりの程度混同される傾向にあったか、あるいはすでに弱化して喉塞尾になっていたことがわかる」（劉曉南1999，142頁）という。『祖堂集』偈頌には1例見出せる。

〔卷4，丹霞章，孤寂吟第7韻段〕益昔室質寂錫（昔錫[-k]、質[-t]混用）

無殷は雪峯山で出家後、江西の九峯道虔（？－921）に参じた。道虔も福州侯官縣の人である。のち吉州禾山寺、洪州翠巖寺に住し、南唐保大9

年(951)の敕によって洪州護國寺に住し、澄源禪師號を賜わった。徐鉉の撰した碑銘が存する。これは禪師が江西でもお國訛りで喋っていた痕跡であろうか。この問答のはじめにも「患顛那?作摩?」などというひどく僻俗な言いかたをしている(曹廣順「試論近代漢語中〈那?作摩?〉」『語言學論叢』第20輯, 1998参照)。

(b) 職徳同用(蒸韻入、登韻入)

- (74) 寂然滅度。時當此土王莽則位十八年壬午歲矣。(卷2, 第十九祖鳩摩羅多章, 頁53/67)

[校]:「則位」は「即位」の誤。王莽の新は西暦9年12月に建國、在位15年で西暦23年9月に亡んだのであるから、「十八年壬午」は杜撰であるが、これは『寶林傳』卷4に基づいている(『景德傳燈錄』卷2は「當新室十四年壬午歲」(西暦22年)と訂す)。ただし『寶林傳』に「則位」の二字はなく、『祖堂集』の編者が加えたものらしい。

即 子力切(精母職韻[iek]入聲)／則 子徳切(精母徳韻[ək]入聲)
もともと近音であるが、編者にあつては同音であつたにちがいない。というのも、『祖堂集』には「即」「則」の混亂が多く、それも「即」を「則」に機械的に置き換えたケースがほとんどなのである。その原因について、わたしは「『祖堂集』異文別字校證(即/則)」(『禪學研究』第87號, 2009)を書いたのであるが、高麗壽昌元年(1095)刊刻の『金剛經』は義天の祖諱「稷」を避けるために、經中の同音字「即」を「則」に替えたという説(趙彦衛『雲麓漫鈔』卷3)があり、このことが高麗刊本『祖堂集』の「即」「則」混亂と関係があるのではないかと思ったのである。しかし、二字同音の方音現象から來た混同と考えたほうがよいかもしれない。現代方言で二字同音の地域は閩南厦門話で、文讀[tsɿk]白讀[tsiaʔ]とも一致することが知られる(『漢語方音字匯』)。これは『祖堂集』編者の方言音を

反映したものであるかもしれない。すなわち靜・筠二禪德は閩南人であった可能性があるということである。

Ⅲ. 『祖堂集』偈頌韻譜

【凡例】 同用：同攝同調 通用：同攝異調 混用：異攝同調 合用：異攝異調

[] 内は卷數、禪師名、當該禪師章所收偈頌の通し番号、「淨修」は淨修禪師讚。

一. 果攝

- | | | |
|--------------|-----------------|-----------------|
| (1) 過獨用 1 | [2. 婆修盤頭 3 淨修] | 臥惰和過過 |
| (2) 歌戈同用 4 | [1. 優婆毬多 2 淨修] | 多河那婆歌魔戈 |
| | [4. 丹霞 5-8] | 摩戈河跢歌 |
| | [14. 石鞏 1-5] | 陀歌波摩戈 |
| | [15. 龐居士 6] | 老皓他多歌過戈 |
| (3) 哿果同用 1 | [2. 達摩 21] | 我哿鑠果 |
| (4) 哿過通用 1 | [14. 高城 1-9] | 我哿和幡 [播] 過 |
| (5) 歌麻混用 3 | [7. 雪峯 11] | 蛇麻何陀歌 |
| | [7. 雪峯 12] | 蛇麻何陀歌 |
| | [19. 香巖 26-2] | 何歌差麻 |
| (6) 哿果馬混用 1 | [2. 婆修盤頭 1] | 我哿火果者馬 |
| (7) 歌哿豪合用 1 | [11. 越山 1] | 歌歌荷哿高豪 |
| (8) 歌皓笑嘯合用 1 | [17. 關南 1-2] | 歌呵歌笑笑叫嘯要笑調嘯道好老皓 |

獨用：過 1

同用：歌戈 4， 𪛗果 1

通用：𪛗過上去 1

混用：歌、假攝麻 3， 𪛗果、假攝馬 1

合用：歌𪛗、效攝豪 1， 歌、效攝皓笑嘯 1

平		上		去		入	
				過	1		
歌戈	4	𪛗果	1				
		𪛗過	1				
歌、麻	3	𪛗果、馬	1				
歌𪛗、豪	1						
歌、皓笑嘯	1						

1. 歌戈同用は初唐より廣く見られる現象（鮑明煒1990）。とりわけ寒山詩（唐作藩1963）、王梵志詩（張鴻魁1990）、敦煌變文（周祖謨1988）、唐五代曲子詞（沈祥源1985）など俗文學系作品に顯著であって、『祖堂集』偈頌と共通するものである。
2. 歌[-a]豪[-au]合用は閩音の特徴として宋代筆記にしばしば言及される有名な現象である。劉攽『貢父詩話』、陸游『老學庵筆記』卷6（周祖謨1966）をはじめ、周密『齊東野語』卷13、楊惲『古今詞話』（魯國堯1989）、『西塘集耆舊續聞』卷7（張光宇1989）、周必大『二老堂詩話』、葉紹翁『四朝聞見錄』丙集、孫奕『履齋示兒編』卷23、『歐公詩話』（劉曉南1999）の記述が紹介されたが（以上は〔何、高〕〔鎖、掃〕〔歌、高〕の例）、さらに張耒（1054－1114）の『明道雜誌』の1條（〔賀、顥〕の例）を補うことができる。實例では雪峯義存（822－908）の偈（「勸人」、「牧牛」）が最も早い（周長楫1994）。『祖堂集』の合用2例の越山鑒眞は年里未詳（越州に住す）、雪峯の弟子。關南道常も年里未詳（襄陽に住す）だが、杭州鹽官齊安（？－842）の弟子であるから、その「樂道歌」（『景德傳燈錄』卷30は「獲珠吟」と題す）は雪峯よりやや早いかもしれ

ない。なおこの現象は宋代の閩人以外に四川、江浙人にも例のあることが紹介されている。

3. 假攝麻韻[-a]との混用は4例あり、敦煌變文（周祖謨1988）、唐五代曲子詞（沈祥源1985）にも少數の例がある。

二. 假攝

- (1) 麻獨用 5 [1. 提多迦 4 淨修] 家花牙瓜麻
 [6. 石霜 1] 沙家遮邪花麻
 [7. 雪峯 2] 霞家麻
 [10. 鼓山 1] 除涯麻
 [12. 寶峯 1] 花家麻
- (2) 馬獨用 4 [1. 佛陀難提 1] 者者馬
 [1. 脇尊者 2 淨修] 者捨灑寫馬馬
 [7. 巖頭 4] 捨者馬
 [8. 疎山 1] 中〔野〕者馬
- (3) 馬禡通用 1 [10. 長慶 1] 差禡下打馬

獨用：麻 5，馬 4

通用：馬禡 1

平		上		去		入	
麻	5	馬	4				
		馬禡	1				

1. 長慶慧稜は杭州海鹽の人、雪峯の弟子、福州に住す（854－932）。その「衷情偈」に「打」字を麻韻に用いる。歐陽修（1007－1072）『歸田錄』卷2に「今世俗語言之訛，而舉世君子小人皆同其繆者」の例として取りあ

げ、音が「滴耿反」（梗韻）から「丁雅反」（麻韻）に轉じたと言ひ、沈括（1031-1095）は「丁梗反」（梗韻）のほうは呉音だと言う（『夢溪筆談』補筆談卷1 辯證）。長慶の偈は麻韻に用いた早い例である。變文には「燕子賦」に押韻例がある（周祖謨1988）。

2. 鼓山神晏は開封の人、雪峯の弟子、福州に住す（天福中[936-944]卒）。その頌の「涯」字は、『廣韻』に魚羈（支韻）、五加（佳韻）の二切があるが、『集韻』にはさらに牛加切（麻韻）を収め、これが新興音（佳韻韻尾[i]の脱落）なることを示している。「〈涯〉」字が大量に麻韻と押韻するのは中唐から始まるが、晩唐・五代から宋代に至るまで、〈涯〉の用韻は麻韻字との通押を主としている。」（趙蓉、尉遲治平1999）

三. 遇攝

- | | | |
|-----------|-------------------------|--------|
| (1) 魚獨用 5 | [4. 丹霞 6] | 如餘虛如魚 |
| | [5. 雲岳 2] [7. 巖頭 2] | 踈渠渠如魚 |
| | [15. 龐居士 8] | 書除魚 |
| | [19. 香巖24-1] | 餘居書魚 |
| (2) 虞獨用 5 | [4. 丹霞4-1] | 珠殊珠虞 |
| | [9. 肥田 1] | 夫愚軀虞 |
| | [12. 禾山 1] | 殊殊株虞 |
| | [14. 高城1-12] | 軀珠殊虞 |
| | [17. 岑和尚 4] | 無殊虞 |
| (3) 模獨用 1 | [5. 道吾 1 淨修] | 吾徒枯烏乎模 |
| (4) 語獨用 1 | [3. 懶瓚1-10] | 語與所杼語 |
| (5) 御獨用 1 | [2. 師子 2 淨修] | 譽翥馭去御 |
| (6) 遇獨用 1 | [14. 石鞏1-3] | 喻句住遇 |

- | | | |
|------------------|---------------|------------------|
| (7) 暮獨用 1 | [7. 雪峯 9] | 路悟暮 |
| (8) 魚虞同用 6 | [2. 達摩 3] | 猪魚輸虞 |
| | [9. 落浦 2-2] | 虛魚珠無虞 |
| | [10. 鏡清 3] | 無虞如魚 |
| | [15. 龐居士 2] | 如虛居魚夫虞 |
| | [15. 龐居士 7] | 如虛除魚珠驅虞虛如餘魚 |
| | [19. 香巖 33] | 虛魚無珠虞 |
| (9) 虞模同用 8 | [2. 達摩 7] | 敷虞徒模 |
| | [4. 丹霞 4-3] | 夫無虞途模 |
| | [10. 玄沙 6 淨修] | 孤模湖模衢無虞 |
| | [10. 翠巖 1] | 蘆模無虞 |
| | [10. 翠巖 2] | 珠虞蘆模 |
| | [10. 翠巖 3] | 無虞蘆模 |
| | [18. 紫胡 2] | 胡龜模無虞 |
| | [19. 香巖 11] | 途模無虞 |
| (10) 麌姥同用 2 | [9. 玄泰 1] | 五祖姥主麌 |
| | [11. 雲門 1-7] | 儼麌午鼓姥 |
| (11) 遇暮同用 1 | [3. 懶瓚 1-4] | 住遇袴悞度暮 |
| (12) 模姥通用 1 | [7. 雪峯 10] | 哺模肚姥 |
| (13) 姥暮通用 2 | [2. 婆修盤頭 2] | 悟暮古姥 |
| | [2. 達摩 20] | 措悟度暮祖姥 |
| (14) 語麌御遇通用 1 | [19. 香巖 6] | 語許侶語矩麌處慮御樹遇 |
| (15) 麌遇通用 1 | [1. 龍樹 2 淨修] | 樹無住趣遇雨麌 |
| (16) 虞尤混用 1 | [11. 佛日 1] | 留尤無虞 |
| (17) 語麌姥御遇暮厚合用 1 | | |
| | [4. 石頭 2] | 語語矩麌祖苦觀姥處御付注句遇住遇 |

悟互固醋布步路耳〔固〕度暮母厚

(18) 姥厚混用 1 〔2. 闇夜多 3 淨修〕 祖古普土姥畝厚

(19) 姥暮宥合用 1 〔15. 歸宗 2〕 午怙土瞽祖姥路度措暮覆宥

(20) 麌宥合用 1 〔7. 雪峯 8〕 取麌畱〔富〕宥

獨用：魚 5，虞 5，模 1，語 1，御 1，遇 1，暮 1

同用：魚虞 6，虞模 8，麌姥 2，遇暮 1

通用：模姥平上 1，姥暮上去 2，語麌御遇上去 1，麌遇上去 1

混用：虞、流攝尤 1，語麌姥御遇暮上去、流攝厚 1，姥、流攝厚 1，姥暮上去、
流攝宥 1

合用：麌、流攝宥 1

平		上		去		入	
魚	5	語	1	御	1		
虞	5						
模	1			暮	1		
魚虞	6	麌姥	2	遇暮	1		
虞模	8						
		姥暮	2				
		語麌御遇	1				
		麌遇	1				
模姥	1						
		姥、厚	1				
虞、尤	1	麌、宥	1				
		語麌姥御遇暮、厚	1				
		姥暮、宥	1				

1. 魚[iə]虞[iə]模[o]三韻間の通押からみて、『祖堂集』偈頌でも三韻はすでに合併して一部となっている。

2. 流攝尤侯韻の唇音字「母」（卷4石頭章，「參同契」）、「畝」（卷2闇夜多章，淨修讚）、「覆」（卷15歸宗章，偈）、「富」（卷7雪峯章，頌）が遇韻と

通押している。流攝尤侯韻の唇音字が遇攝に轉入するのは初唐からと言われている（趙蓉、尉遲治平1999）。『祖堂集』にはさらに尤韻非唇音字「留」が虞韻と通押する虞尤混用例（卷11佛日章）がある。

四. 蟹攝

- | | | |
|-------------|------------------|---------|
| (1) 齊獨用 2 | [1. 佛陀難提 4 淨修] | 提迷低梯西齊 |
| | [4. 丹霞1-11] | 西低迷齊 |
| (2) 哈獨用 5 | [2. 弘忍 1] | 臺埃哈 |
| | [2. 弘忍 2] | 臺埃哈 |
| | [18. 仰山 3] | 臺埃哈 |
| | [18. 仰山 4] | 臺埃哈 |
| | [19. 香巖23] | 來咳哈 |
| (3) 海獨用 1 | [4. 丹霞4-6] | 在改怠海 |
| (4) 灰哈同用 5 | [2. 惠能 2 淨修] | 梅雷迴灰來開哈 |
| | [10. 翠巖 4] | 灰灰哉徠哈 |
| | [13. 福先招慶 2・3・4] | 迴灰開來哈 |
| (5) 泰隊同用 1 | [19. 香巖14] | 帶賴泰對隊 |
| (6) 海隊代通用 1 | [3. 司空山 2] | 在海昧隊礙愛代 |
| (7) 海隊通用 1 | [11. 雲門1-2] | 亥海配昧隊 |
| (8) 霽至混用 1 | [1. 提多迦 2] | 慧霽地至 |
| (9) 祭寔混用 1 | [1. 毘羅 1] | 際祭智寔 |

獨用：齊 2，哈 5，海 1

同用：灰哈 5，泰隊 1

通用：海隊上去 1，海隊代上去 1

混用：霽、止攝至 1，祭、止攝眞 1

平		上		去		入	
齊	2						
哈	5	海	1				
灰哈	5	海隊代	1	泰隊	1		
		海隊	1				
				霽、至	1		
				祭、眞	1		

- 1 蟹攝諸韻の分合は諸家によって異なる（沈祥源1985, 「陰聲韻分部一覽表」）が、『祖堂集』偈頌の数少ない押韻例からでも、齊韻[ei]と灰哈韻[oi]が區別されることは見てとれる。
- 2 止攝との通押はこの2例とつぎの止攝の項に挙げる7例、計9例を数える。

五. 止攝

- | | | |
|------------|---------------|--------|
| (1) 支獨用 5 | [5. 華亭 1] | 知兒支 |
| | [5. 三平 2] | 吹枝支 |
| | [10. 鏡清 8-2] | 奇知馳支 |
| | [11. 齊雲 1] | 知碑支 |
| | [20. 隱山 1] | 兒知離支 |
| (2) 支之同用 6 | [7. 雪峯 13] | 移知支時之 |
| | [10. 玄沙 2] | 枝支疑之 |
| | [12. 荷玉 1] | 期之知支 |
| | [19. 香巖 17-2] | 池支疑之危支 |
| | [19. 靈雲 1] | 枝支疑之 |

- [20. 隱山 4] 期之兒支
- (3) 支脂同用 3 [1. 富那耶奢 2 淨修] 師衰夷脂彌差支
- [14. 高城 1-8] 師錐脂窺支
- [19. 香巖 17-3] 離支遲脂知支
- (4) 脂之同用 1 [10. 鏡清 2] 持時之伊脂
- (5) 支脂之同用 3 [3. 鳥窠 1] 師脂時之知支
- [4. 丹霞 5-4] 尼脂池支之之
- [17. 正原 3] 時之支支悲脂
- (6) 微獨用 3 [10. 鏡清 5] 機飛微
- [15. 伏牛 3-2] 威微歸微
- [15. 伏牛 3-3] 希依歸微
- (7) 支脂之微同用 1 [19. 香巖 15] 遲脂機微怡之知支
- (8) 支脂微同用 2 [2. 迦耶舍多 2 淨修] 機微師誰脂虧支
- [2. 達摩 22 淨修] 爲支師脂歸衣微
- (9) 支之微同用 3 [17. 岑和尚 6] 奇支疑之非微
- [19. 香巖 1] 知儀支持之機微
- [19. 香巖 27] 離支稀微疑之
- (10) 支微同用 3 [4. 丹霞 1-17] 知兒支微微
- [9. 落浦 1-1] 奇支稀輝微
- [15. 龐居士 13] 爲支歸微
- (11) 之微同用 2 [1. 阿難 3] [2. 僧伽難提 1] 機微之之
- (12) 脂之微同用 1 [9. 落浦 1-2] 疑之姿脂揮微
- (13) 脂微同用 1 [17. 岑和尚 17] 誰脂歸微
- (14) 止獨用 6 [1. 脇尊者 1] 理止止
- [1. 龍樹 1] 理喜止
- [1. 迦那提婆 1] 理始止

- [2. 僧加難提 3 淨修] 子里始已止
- [2. 摩拏羅 2 淨修] 止齒里耳止
- [2. 般若多羅 1] 理起止
- (15) 紙止同用 3 [1. 佛陀難提 3] 是紙理止
- [2. 婆舍斯多 1] 是紙理止
- [2. 僧榮 2] 子市止此旒紙
- (16) 紙止尾同用 1 [14. 高城 1-5] 尾尾起止你 [尔] 紙
- (17) 止寘志通用 1 [19. 香嚴 17-4] 僞寘異志起止
- (18) 至獨用 1 [1. 馬鳴 1] 貳棄至
- (19) 志獨用 1 [3. 懶瓚 1-6] 事字意志
- (20) 寘至同用 2 [15. 龐居士 4] 易智寘二地至
- [13. 福先招慶 1] 地至義寘地至
- (21) 寘志同用 3 [1. 阿難 2] 意志睡寘
- [19. 香嚴 17-1] 異置志義寘
- (22) 至志未同用 1 [19. 香嚴 17-7] 諱未置志愧至
- (23) 未獨用 1 [11. 雲門 1-8] 未味貴未
- (24) 支之旨通用 1 [4. 丹霞 1-15] 知支詞之死旨
- (25) 支之寘通用 1 [19. 香嚴 18] 儀知支持之議寘
- (26) 支寘通用 2 [2. 鶴勒 1] 議寘知支
- [5. 雲岳 1] 奇知支議寘
- (27) 支至通用 1 [富那耶舍 1] 離支二至
- (28) 支紙旨止通用 1 [1. 佛陀難提 2] 比旨是紙似止離支
- (29) 支紙旨至通用 1 [15. 鵝湖 1] 旨旨是紙示至池知支
- (30) 脂微志通用 1 [11. 佛日 2] 屍脂治志飛微
- (31) 支微寘通用 1 [14. 高城 1-10] 奇支議寘衣微
- (32) 之微寘通用 1 [10. 玄沙 1] 議寘之之機微

- (33) 微眞通用 1 [10. 玄沙 4] 機希微議眞
- (34) 紙未通用 1 [1. 釋迦 7] 是紙畏未
- (35) 紙旨志通用 1 [3. 司空山 1] 水旨此紙事志
- (36) 紙眞志通用 1 [19. 香巖 17-6] 衣 [被] 紙僞眞意志
- (37) 旨至眞通用 1 [4. 丹霞 5-6] 水旨遂至僞眞
- (38) 旨止眞通用 1 [9. 落浦 1-6] 紀裏起止死旨易眞
- (39) 旨止志通用 1 [9. 落浦 2-1] 水旨起已止異志
- (40) 止眞通用 2 [1. 伏駄密多 1] 理止僞眞
[1. 羅睺羅 1] 離眞起止 [案：離，去也。讀眞韻。]
- (41) 尾眞通用 1 [2. 不如密多 1] 尾尾智眞
- (42) 止至志未通用 1 [14. 章敬 1] 子止字志里止位至未未
- (43) 微齊混用 1 [15. 伏牛 3-1] 迷齊飛歸微
- (44) 志未隊混用 1 [14. 高城 1-16] 畏未對隊意志
- (45) 未霽混用 1 [19. 香巖 17-8] 諦霽氣貴未
- (46) 之薺合用 1 [17. 正原 4] 洗薺醫時之
- (47) 之微眞魚合用 1 [17. 岑和尚 15] 議眞依微思時之如魚
- (48) 止仙合用 1 [2. 僧伽難提 2] 起止然仙
- (49) 止御合用 1 [11. 雲門 1-6] 已似止慮御
- (50) 止未語合用 1 [11. 雲門 1-1] 子止許語氣未
- (51) 紙至祭合用 1 [10. 鏡清 1] 是紙置至綴祭
- (52) 旨薺霽合用 1 [19. 香巖 17-5] 累旨底薺細霽
- (53) 志海合用 1 [7. 巖頭 3] 事志彩海

獨用：支 5，微 3，止 6，志 1，至 1，未 1

同用：支之 6，支脂 3，脂之 1，支脂之 3，支脂之微 1，支脂微 2，脂之微 1，支之微 3，支微 3，之微 2，脂微 1，紙止 3，紙止尾 1，眞至 2，

寘志 3，至志未 1

通用：支之旨平上 1，支之寘平上 1，支寘平去 2，支至平去 1，支紙旨止平上 1，
支紙旨至平上去 1，脂微志平去 1，支微寘平去 1，之微寘平去 1，微寘平
去 1，紙未上去 1，紙旨志上去 1，紙寘志上去 1，旨寘至上去 1，旨止寘
上去 1，旨止志上去 1，止寘上去 2，止至志未上去 1，尾寘上去 1

混用：微、蟹攝齊 1，志未、蟹攝隊 1，未、蟹攝霽 1

合用：之、蟹攝齊 1，之微寘、遇攝魚 1，止、山攝仙 1，止、遇攝御 1，止
未、遇攝語 1，紙至、蟹攝祭 1，旨、蟹攝齊霽 1，志、蟹攝海 1

平		上		去		入	
支	5						
				至	1		
		止	6	志	1		
		紙止	3	寘至	2		
支之	6			寘志	3		
支脂	3			至志未	1		
脂之	1						
支脂之	3						
微	3			未	1		
支脂之微	1	紙止尾	1				
支脂微	2						
支之微	3						
支微	3						
之微	2						
脂之微	1						
脂微	1						
支之旨	1	紙未	1				
支之寘	1	紙旨志	1				
支寘	2	紙寘志	1				
支至	1	旨寘至	1				
支紙旨止	1	旨止寘	1				

平		上		去		入	
支紙旨至	1	旨止志	1				
脂微志	1	止眞	2				
支微眞	1	尾眞	1				
之微眞	1	止至志未	1				
微眞	1						
微、齊	1			未、霽	1		
之、霽	1	紙至、祭	1	志未、隊	1		
之微眞、魚	1	止、御	1	旨、霽霽	1		
		止未、語	1	志、海	1		
		止、仙	1				

1. 上掲韻譜に明らかなように、止攝支脂之韻と微韻の同用例が多いことから、晩唐五代では實際上すでに四韻の區別を失っていたことがわかる。これは敦煌變文（周祖謨1988）、唐五代曲子詞（沈祥源1985）、晩唐詩（趙蓉、尉遲治平1999）の詩詞韻では合併して止微部とされるのと揆を一にしている。また平上去聲通用の例も多く見られる。
2. 止攝開口三等韻字（議、依、思、時、已、似、子、氣）と遇攝魚韻合口三等字（如、慮、許）との合用が3例。1例は岑和尚（長沙景岑，？－868）で、貫籍は未詳、湖南長沙に住した。2例は雲門文偃（864－949）。嘉興（浙江省）の人、雪峯の弟子、韶州に住した。止攝（支微部）遇攝（魚模部）通用は晩唐詩（趙蓉、尉遲治平1999）、五代詩（陳海波、尉遲治平1998）に合計13例があり、敦煌變文（周祖謨1988）、敦煌俗文學中の別字異文（邵榮芬1963）にも見られる。『祖堂集』中の異文別字には止語混用の1例があり、その報慈和尚は泉州莆田の人、福州に住した。魚韻は「i、u兩攝之間遊移不定」（羅常培1933）、「[i]、[u]の中間の[y]」、「中國語の押韻意識の上で[y]は[i]に近い」（高田時雄1988）とされる。

六. 效攝

- (1) 豪獨用 2 [1. 迦那提婆 2] 高毛濤刀豪
[10. 鏡清 8] 高毫勞豪
- (2) 篠小同用 1 [4. 丹霞 1-5] 了篠少小鳥篠
- (3) 皓獨用 3 [3. 司空山 4] 道浩皓
[8. 青林 1] 草老皓
[20. 隱山 2] 道老皓
- (4) 笑獨用 1 [14. 高城 1-3] 曜照妙笑
- (5) 嘯笑同用 1 [10. 鏡清 8-3] 笑笑調嘯要笑
- (6) 皓号效通用 1 [2. 闇夜多 1] 道皓倒好燥 [躁] 号教效
- (7) 巧效通用 1 [11. 雲門 1-4] 卯巧巧教效
- (8) 篠小笑通用 1 [4. 丹霞 5-2] 小小照笑了篠
- (9) 宵豪尤混用 1 [10. 鏡清 8-5] 毛豪遊尤遙宵
- (10) 豪侯混用 1 [2. 達摩 18] 鈎頭侯刀逃豪
- (11) 皓效暮合用 1 [3. 司空山 7] 鬧覺鬧效悟暮道皓

獨用：豪 2，皓 3，笑 1

同用：篠小 1，嘯笑 1

通用：皓号效上去 1，巧效上去 1，篠小笑上去 1

混用：宵豪、流攝尤 1，豪、流攝侯 1

合用：皓效、遇攝暮 1

平		上		去		入	
				笑	1		
		篠小	1	嘯笑	1		
豪	2	皓	3				

平		上		去		入	
		巧效	1				
		皓号效	1				
宵豪、尤	1	篠小笑	1				
豪、侯	1	皓效、暮	1				

1. 效攝（蕭豪部）と流攝（尤侯部）の混用は閩方言の特徴と言われるが（劉曉南1999）、『祖堂集』偈頌には2例、卷2達摩章の「志公識」[鈎頭侯刀逃豪]と卷10鏡清章の「嘆景禪吟」[毛豪遊尤遙宵]（第5韻段）である。後者はきわめて口語的な一種の打油詩中の混用である。「志公識」は換韻の可能性もあるが、達摩章所収の他の17首の識はいずれも一韻到底である。18首の識は言うまでもなく偽作で、この押韻の特徴は『祖堂集』達摩章を主に構成する識の作者の出身地が閩地であることを示唆している。

七. 流攝

- | | | |
|------------|-----------------|-----------|
| (1) 尤獨用 5 | [2. 達摩13] | 流修尤 |
| | [3. 慧忠 1 淨修] | 猷舟籌羞尤 |
| | [4. 丹霞 1 - 10] | 柔流裘尤 |
| | [9. 落浦 1 - 4] | 求悠流尤 |
| | [17. 岑和尚 1] | 休遊秋尤 |
| (2) 尤侯同用 5 | [3. 懶瓚 1 - 11] | 悠丘流憂尤頭鈎侯侯 |
| | [3. 司空山 3] | 修休尤漚侯 |
| | [5. 德山 1 淨修] | 州儔修舟尤頭侯 |
| | [7. 夾山 2] | 流舟尤頭侯 |
| | [11. 惟勁 4] | 休尤頭侯 |
| (3) 尤幽同用 1 | [2. 摩拏羅 1] | 幽幽憂尤 |
| (4) 有厚同用 4 | [3. 司空山 6] | 有守咎有走厚 |

- [4. 丹霞 5 - 3] 有有走厚
 [11. 雲門 1 - 2] 丑有吼斗厚
 [11. 雲門 1 - 10] 酉手有走厚
 (5) 有厚候通用 1 [4. 丹霞 3] 久守有有透候垢走口藪厚

獨用：尤 5

同用：尤侯 5，尤幽 1，有厚 4

通用：有厚候上去 1

平		上		去		入	
尤	5						
尤侯	5	有厚	4				
尤幽	1						
		有厚候	1				

八. 咸攝

- (1) 覃談同用 1 [2. 達摩 10] 男覃談三談
 (2) 鹽獨用 1 [2. 鳩摩羅多 2 淨修] 簪獸鉗瞻鹽
 (3) 談咸同用 2 [11. 齊雲 1] 藍談談岳咸
 [11. 齊雲 2] 藍談談岳咸
 (4) 乏獨用 8 [1. 釋迦 6] 法法乏
 [1. 迦葉 3] 法法乏
 [1. 阿難 4] 法法乏
 [1. 商那和修 1] 法法乏
 [1. 優婆塞多 1] 法法乏
 [1. 提多迦 3] 法法乏
 [1. 彌遮迦 1] 法法乏

[1. 婆須蜜 1] 法法乏

獨用：鹽 1，乏 8

同用：覃談 1，談咸 2

平		上		去		入	
覃談	1						
鹽	1						
談咸	2						
						乏	8

九. 深攝

- (1) 侵獨用14 [1. 迦葉 4 淨修] 心尋深岑侵
 [2. 師子 1] 心今侵
 [4. 丹霞1-9] 心音林侵
 [4. 丹霞1-12] 心深金侵
 [4. 丹霞1-18] 深琴吟侵
 [4. 丹霞4-2] 沈尋心侵
 [4. 丹霞5-9] 心今吟侵
 [8. 曹山 1] 林心尋侵
 [9. 肥田 2] 侵欽侵
 [14. 高城1-1] 金音尋心林侵
 [14. 高城1-2] 深侵沈侵
 [14. 高城1-6] 林針心侵
 [17. 岑和尚 9] 深心心音侵
 [19. 靈雲 3] 今深心侵
- (2) 緝獨用 2 [3. 懶瓚1-2] 粒饗及緝 [案：饗字音當從執。]

- [10. 鏡清 6] 急及緝
 (3) 侵沁通用 1 [10. 鏡清 9] 尋吟深侵任沁
 (4) 侵志合用 1 [17. 岑和尚12] 意意志心心侵

獨用：侵14, 緝 2,

通用：侵沁平去 1

合用：侵、止攝志 1

平		上		去		入	
侵	14					緝	2
侵沁	1						
侵、志	1						

十. 山攝

- (1) 寒獨用 2 [15. 鄧隱峯 8] 彈寒看寒
 [19. 香巖25] 安難寒
 (2) 寒桓同用 1 [20. 隱山 3] 安看寒般桓
 (3) 寒山同用 2 [8. 龍牙 1] 閑間山難寒
 [10. 長生 1] 看寒山山
 (4) 刪山同用 1 [8. 疎山 1] 閑山還刪
 (5) 先獨用 1 [2. 弘忍 4 淨修] 前煙玄年先
 (6) 仙獨用 7 [1. 提多迦 1] 泉緣仙
 [2. 婆舍斯多 2 淨修] 緣拳船宣 [詮] 仙
 [11. 惟勁1-3] 仙詮仙
 [11. 惟勁1-4] 然全仙
 [11. 惟勁1-5] 宣圓仙

- | | | |
|---------------|---------------|---------------------|
| | [16. 南泉 1 淨修] | 泉緣傳詮焉仙 |
| | [17. 公畿 1] | 禪錢仙 |
| (7) 山仙同用 1 | [19. 香巖26-1] | 間山然仙 |
| (8) 仙先同用 8 | [1. 彌遮迦 2] | 仙偏然仙玄先 |
| | [3. 懶瓚1-3] | 天田暝賢然仙 |
| | [4. 丹霞1-4] | 愆仙邊玄先 |
| | [5. 華亭 3] | 緣禪然筌仙年先 |
| | [15. 五洩 1] | 禪仙邊先 |
| | [15. 龐居士 5] | 禪緣船仙眠煙天邊先 |
| | [17. 正原 1] | 田先然船仙 |
| | [19. 香巖 5] | 玄年然緣仙 |
| (9) 寒先仙山元混用 1 | | |
| | [11. 雲門 2] | 間閑山山年邊天前先源元傳連錢然禪仙安寒 |
| (10) 先仙元混用 3 | [4. 丹霞1-3] | 邊先喧元傳仙 |
| | [4. 丹霞5-7] | 緣仙玄先源元 |
| | [11. 惟勁10] | 源元圓拳然仙邊前 |
| (11) 先元混用 1 | [14. 石鞏1-1] | 千懸先源元 |
| (12) 仙元混用 3 | [3. 懶瓚1-9] | 言元緣傳仙 |
| | [10. 玄沙 5] | 源元全圓仙 |
| | [17. 正原 4] | 源言元全仙 |
| (13) 緩翰換同用 1 | [3. 懶瓚1-1] | 換段亂算喚換漢翰斷緩 |
| (14) 翰禰霰線同用 1 | [17. 關南2-1] | 幻禰電見霰變羨線散翰 |
| (15) 霰線同用 3 | [3. 懶瓚1-5] | 見練霰面變線 |
| | [14. 石鞏1-2] | 羨變線見霰 |
| | [19. 香巖31] | 見霰戀面變線 |
| (16) 末獨用 1 | [2. 道信 2] | 脫闊末鉢末 |

- (17) 屑薛同用 1 [2. 鳩摩羅多 1] 說薛決屑
 (18) 薛月混用 1 [14. 高城 1-15] 別滅薛歇月
 (19) 屑薛月混用 1 [9. 落浦 1-3] 孽薛決屑月月
 (20) 先仙魂混用 1 [10. 長生 2] 懸先昏魂全仙
 (21) 先仙庚混用 1 [17. 岑和尚 11] 生庚先先遷仙
 (22) 先真混用 1 [11. 惟勁 1-2] 因真淵先
 (23) 仙魂齊混用 1 [11. 惟勁 2] 尊門魂傳全仙嘶齊
 (24) 山魚混用 1 [15. 歸宗 1] 山山如魚
 (25) 先燭合用 1 [15. 香巖 28] 足燭前先
 (26) 寒桓燭合用 1 [7. 雪峯 7] 般桓彈寒曲燭
 (27) 先号合用 2 [7. 夾山 1] [9. 落浦 3] 前先到号
 (28) 線阮合用 1 [4. 丹霞 5-5] 遠阮轉便線
 (29) 屑薛月之合用 1 [19. 香巖 4] 說徹絕薛決嚙切屑揭月持之

獨用：寒 2，先 1，仙 7，末 1

同用：寒桓 1，寒山 2，刪山 1，山仙 1，仙先 8，緩翰換 1，翰欄霰線 1，霰線 3，屑薛 1

混用：先、臻攝真 1，先仙、臻攝魂 1，寒先仙山、臻攝元 1，先仙、臻攝元 3，先、臻攝元 1，仙、臻攝元 3，先仙、梗攝庚 1，仙、臻攝魂、蟹攝齊 1，山、遇攝魚 1，屑薛、臻攝月 1，薛、臻攝月 1

合用：先、通攝燭 1，寒桓、通攝燭 1，先、效攝号 2，線、臻攝阮 1，屑薛、臻攝月、止攝之 1

平		上		去		入	
寒	2					末	1

平		上		去		入	
寒桓	1						
寒山	2						
刪山	1						
先	1						
仙	7						
山仙	1						
先仙	8			霰線	3	屑薛	1
寒先仙山、元	1			翰禰霰線	1	薛、月	1
先仙、元	3			翰換緩	1	屑薛、月	1
先、元	1						
仙、元	3						
先仙、魂	1						
先仙、庚	1						
先、眞	1						
仙、魂、齊	1						
山、魚	1						
先、燭	1			線、阮	1	屑薛、月、之	1
寒桓、燭	1						
先、号	2						

1. 臻攝元韻字（上掲では元魂阮月）が山攝（上掲では寒山先仙屑薛）と通押する例は廣く見られ、すでに臻攝眞文部とは通押しないと言われるが、『祖堂集』偈頌ではなお〔先眞〕、〔眞諄魂〕、〔諄文魂〕、〔文魂〕、〔質物薛〕（臻攝の項）通押が見られる。
2. 〔先、燭〕、〔寒桓、燭〕という通攝入聲字との通押（香嚴、雪峯）、〔屑薛、月、之〕という陰入通押（香嚴）は方言現象であろうか。

十一. 臻攝

(1) 眞獨用24 [2. 達摩10] 濱人眞

	[2. 達摩16]	隣身塵眞
	[4. 丹霞2-13]	眞人塵眞
	[4. 丹霞4-5]	神塵人眞
	[4. 丹霞4-8]	珍人貧身眞
	[4. 藥山 2]	人眞新眞
	[5. 三平 2]	塵身賓眞
	[5. 三平 3]	因眞珍眞
	[7. 巖頭 1]	眞親新眞
	[8. 龍牙 3]	身塵人眞
	[9. 落浦2-4]	身人眞眞
	[9. 九峯 1]	人身眞
	[11. 雲門1-3]	寅身親眞
	[11. 雲門1-5]	辰人隣眞
	[11. 雲門1-9]	申賓因眞
	[11. 惟勁1-1]	津身眞
	[12. 中塔 1]	塵因新眞
	[14. 馬祖 2]	身人眞
	[15. 伏牛 1]	津隣身眞
	[16. 黃檗 1]	身濱因人眞
	[17. 岑和尚 3]	眞人身眞
	[17. 岑和尚 4]	人眞身眞
	[17. 岑和尚 8]	眞人身眞
	[19. 香巖22]	嗔身神眞
(2) 文獨用 2	[5. 三平 1]	聞君分文
	[10. 長慶 4]	分聞文
(3) 魂獨用 1	[1. 羅睺羅 2 淨修]	論門坤孫魂

- | | | |
|--------------|---------------|-----------------|
| (4) 眞諄同用 1 | [7. 雪峯11] | 春諄新身眞 |
| (5) 眞文同用 3 | [2. 達摩13] | 人眞勲文 |
| | [8. 龍牙 5] | 貧眞聞文 |
| | [10. 長慶27] | 聞文珍眞 |
| (6) 眞殷同用 1 | [2. 達摩 9] | 勲殷人眞 |
| (7) 眞諄魂同用 1 | [2. 達摩15] | 倫諄姻眞尊魂 |
| (8) 諄文魂同用 1 | [8. 龍牙 4] | 循諄分文聞 [門] 魂 |
| (9) 文魂同用 4 | [2. 達摩12] | 尊魂分文 |
| | [4. 丹霞1-4] | 聞文盆昏魂 |
| | [6. 石霜 2] | 昏魂分文 |
| | [19. 香巖16] | 分文門崙魂 |
| (10) 魂痕同用 1 | [15. 伏牛 2] | 存渾門坤魂吞痕 |
| (11) 稗問恩同用 1 | [3. 騰騰 1] | 問郡糞運問順儁閏稗寸盆論頓鈍恩 |
| (12) 質獨用 1 | [1. 婆須蜜 2 淨修] | 蜜室一日失質 |
| (13) 質物同用 1 | [14. 高城1-13] | 日質質屈物 |
| (14) 物獨用 1 | [18. 紫胡 1] | 物佛屈物 |
| (15) 術物同用 1 | [11. 雲門1-11] | 戌術物屈物 |
| (16) 沒獨用 2 | [3. 懶瓚1-7] | 骨兀餒沒 [案：餒當讀奴骨切] |
| | [19. 香巖3-1] | 骨沒沒 |
| (17) 眞虞混用 1 | [19. 香巖 2] | 貧眞無虞 |
| (18) 眞蒸混用 1 | [10. 長慶 2] | 身親眞氷蒸 |
| (19) 眞痕清混用 1 | [17. 岑和尚11] | 聲清根痕眞人眞 |
| (20) 文蒸混用 1 | [2. 達摩 7] | 繩蒸分文 |
| (21) 質物薛混用 1 | [18. 仰山 1] | 屈物說薛日質 |

獨用：眞24，文 2，魂 1，質 1，物 1，沒 2

同用：眞諄 1，眞文 3，眞殷 1，眞諄魂 1，諄文魂 1，文魂 4，魂痕 1，稗問
 恩 1，質物 1，術物 1

混用：眞、遇攝虞 1，眞、曾攝蒸 1，眞痕、梗攝清 1，文、曾攝蒸 1，質物、
 山攝薛 1

平		上		去		入	
眞	24					質	1
文	2			稗問恩	1	質物	1
魂	1					術物	1
眞諄	1					物	1
眞文	3					没	2
眞殷	1						
眞諄魂	1						
諄文魂	1						
文魂	4						
魂痕	1						
眞、虞	1					質物、薛	1
眞、蒸	1						
眞痕、清	1						
文、蒸	1						

1 臻攝[-n]と曾、梗攝[-ŋ]の混押は『祖堂集』偈頌に 4 例（上掲のほか、梗攝の項に 1 例）がある。[-n][-m][-ŋ]間の混押現象は敦煌變文、唐五代詞にも若干見えている。宋代の福建地方では漳、泉、汀三州を除いて、陽聲韻尾が合併していたという（劉曉南1998）。『祖堂集』偈頌 4 例のうち長慶慧稜（854－932）は杭州海鹽の人であるが、13歳に出家してから晩年まで福州に在り、雪峯義存（822－908）は泉州南安の人だが、12歳に莆田で出家、32歳まで福州芙蓉山にあり、のち45歳までは江西、湖南で過ごし、ついで閩に歸って87歳で歿するまで福州に住した。混押はこうした経歴と関係があるであろう。

十二. 宕、江攝

- | | | |
|--------------|----------------|----------|
| (1) 陽獨用 4 | [1. 毘羅 2 淨修] | 王常長霜陽 |
| | [8. 龍牙 2] | 常長涼陽 |
| | [15. 龐居士 9] | 常鄉陽 |
| | [19. 香嚴 29] | 量光藏陽 |
| (2) 唐獨用 2 | [10. 長慶 4 淨修] | 當堂唐 |
| | [17. 岑和尚 5] | 堂光藏唐 |
| (3) 陽唐同用 7 | [4. 丹霞 2-8] | 良霜陽堂唐 |
| | [7. 雪峯 1] | 章陽光唐 |
| | [10. 玄沙 3] | 常王陽光唐 |
| | [17. 岑和尚 10] | 香常陽光唐 |
| | [19. 香嚴 3-2] | 當唐量傷妨陽 |
| | [19. 香嚴 13] | 堂唐詳常陽 |
| | [19. 靈雲 2] | 常唐暉王陽 |
| (4) 江獨用 1 | [1. 阿難 5 淨修] | 幢釭雙江江 |
| (5) 鐸獨用 1 | [2. 般若多羅 2 淨修] | 珞泊涸廓鐸 |
| (6) 藥鐸同用 2 | [18. 仰山 2] | 作鶴鐸藥藥 |
| | [19. 香嚴 9] | 縛藥廓鐸 |
| (7) 覺獨用 1 | [2. 慧可 2 淨修] | 學礪岳驚濁覺 |
| (8) 陽唐漾通用 1 | [4. 丹霞 1-4] | 長陽茫唐愴漾 |
| (9) 漾宕同用 1 | [19. 香嚴 24-2] | 喪宕樣暢亮嶂上漾 |
| (10) 養漾宕通用 1 | [5. 三平 1] | 杖養放漾當喪宕 |
| (11) 陽江混用 1 | [2. 達摩 1] | 羊昌陽江江 |

獨用：陽 4，唐 2，江 1，鐸 1，覺 1

同用：陽唐 7，藥鐸 2，漾宕 1

通用：陽唐漾平去 1， 養漾宕上去 1

混用：陽、江攝江 1

平		上		去		入	
陽	4						
唐	2					鐸	1
陽唐	7			漾宕	1	藥鐸	2
陽唐漾	1	養漾宕	1				
陽、江	1						
江	1					覺	1

1. 宕、江兩攝は詩詞韻で合して一部（江陽部）とする。これは江韻[ɔŋ]が窄韻で所屬字が少なく、陽唐韻[aŋ]とは混讀されやすいことによる。『祖堂集』偈頌でも例は少ないが、混用1例がある（達摩章，般若多羅讖）。

十三. 曾攝

- | | | |
|------------|----------------|--------|
| (1) 登獨用 2 | [1. 商那和修 2 淨修] | 燈肱增鵬登 |
| | [2. 達摩 8] | 燈憎登 |
| (2) 證獨用 2 | [19. 香嚴 20] | 稱勝證 |
| | [20. 五冠山 2] | 乘證證 |
| (3) 職獨用 1 | [4. 丹霞 1-2] | 力識棘職 |
| (4) 德獨用 2 | [2. 鶴勒 2 淨修] | 勒德特國蔔德 |
| | [18. 趙州 1] | 北勒得德 |
| (5) 職德同用 2 | [4. 丹霞 5-1] | 測力職得德 |
| | [3. 慧忠 1] | 北國德識職 |
| (6) 蒸證通用 1 | [3. 靖居 1 淨修] | 陵氷蒸乘應證 |

獨用：登 2，證 2，職 1，德 2

同用：職德 2

通用：蒸證平去 1

平		上		去		入	
				證	2	職	1
登	2					德	2
						職德	2
蒸證	1						

十四. 梗攝

- (1) 庚獨用 8 [2. 慧可 1] 生生庚
 [2. 僧榮 1] 生生庚
 [2. 道信 1] 生生庚
 [2. 弘忍 1] 生生庚
 [4. 丹霞 1-16] 行明生庚
 [7. 雪峯 3] 行平明庚
 [7. 雪峯 5] 行生庚
 [7. 雪峯 6] 行生庚
- (2) 庚耕同用 1 [2. 伽耶舍多 1] 萌耕生庚
- (3) 清獨用 1 [2. 達摩 19] 情成清
- (4) 庚耕清同用 1 [15. 龐居士 3] 行盲生庚城清耕
- (5) 庚清同用 11 [1. 伏駄密多 2 淨修] 成程清行生庚
 [1. 馬鳴 2 淨修] 鳴明生庚城清清
 [2. 達摩 6] 名聲清平庚
 [2. 慧能 1] 生庚成清

	[3. 鳥窠 2]	行庚情名清
	[4. 石頭 1]	名清行明庚
	[4. 丹霞 2-2]	清盈傾輕聲名程成清明平行庚
	[4. 藥山 1]	情聲清迎庚
	[7. 雪峯 12]	成征清明庚
	[10. 鏡清 7]	明庚精城清
	[14. 高城 1-11]	生平庚成清
(6) 耕清同用 1	[3. 懷讓 1]	萌耕成清
(7) 青獨用 3	[3. 鳥窠 3]	經醒青
	[4. 丹霞 2-1]	惺靈形經聽冥停星青
	[4. 藥山 1]	形經瓶青
(8) 庚清青同用 2	[8. 龍牙 6]	情清明庚寧青
	[15. 龐居士 10]	經聽青名成清生庚
(9) 庚青同用 5	[3. 懶瓚 1-12]	形寧青青生庚
	[4. 丹霞 4-4]	明瑩庚靈青
	[9. 落浦 1-5]	腥靈青鳴生平庚
	[9. 落浦 2-2]	明生庚經青
	[14. 馬祖 1]	寧青生庚
(10) 清青同用 4	[1. 釋迦 4]	星青情清
	[3. 司空山 5]	形寧青名清
	[5. 華亭 2]	名程清聽聆形嚶亭青
	[19. 香巖 32]	經青聲清
(11) 梗靜同用 1	[14. 高城 1-7]	境影梗靜靜
(12) 映獨用 1	[2. 不如密多 2 淨修]	慶行 [下更切] 敬鏡映
(13) 映勁同用 2	[2. 闍夜多 2]	性勁竟映
	[14. 石鞏 1-4]	鏡映性淨勁

- (14) 昔獨用 1 [14. 馬祖 3 淨修] 石役擲尺昔
 (15) 陌昔錫同用 1 [4. 丹霞 5-7] 擲昔客陌覓錫
 (16) 昔錫同用 2 [4. 丹霞 1-1] 寂錫益擲昔
 [14. 高城 1-5] 覓的錫跡昔
 (17) 清青靜映通用 [19. 香嚴 8] 傾 [頃] 靜清清鏡映寧青
 (18) 昔錫質混用 1 [4. 丹霞 1-7] 益昔室質寂錫
 (19) 昔錫職混用 1 [19. 香嚴 7] 息棘力職析錫擲跡昔
 (20) 庚清刪混用 1 [7. 雪峯 4] 關刪橫明庚聲清
 (21) 清登混用 1 [2. 達摩 5] 肱登名清
 (22) 庚登混用 1 [2. 達摩 4] 行庚僧登
 (23) 青皓夬合用 1 [19. 香嚴 21] 話夬道皓形靈青

獨用：庚 8，清 1，青 3，映 1，昔 1

同用：庚耕 1，庚耕清 1，庚清 11，耕清 1，庚清青 2，庚青 5，清青 4，梗靜
 1，映勁 2，陌昔錫 1，昔錫 2

通用：清青靜映平上去 1

混用：庚清、山攝刪 1，清、曾攝登 1，庚、曾攝登 1，昔錫、臻攝質 1，昔
 錫、曾攝職 1

合用：青、蟹攝夬、效攝皓 1

平		上		去		入	
庚	8			映	1		
庚耕	1						
清	1					昔	1
庚耕清	1						
庚清	11	梗靜	1	映勁	2		
耕清	1						
青	3						

平		上		去		入	
庚清青	2					陌昔錫	1
庚青	5					昔錫	2
清青	4						
清青靜映	1						
庚清、刪	1					昔錫、質	1
清、登	1					昔錫、職	1
庚、登	1						
青、夬、皓	1						

1. 梗攝、曾攝の舒聲の通押は、「初唐より庚、耕、清、青、蒸、登六韻叶韻の現象が現れ、敦煌曲子詞、宋詞の用韻では六韻は通叶不分となる。晩唐は兩部合併の緩慢な進行過程にあり、7例の通押がある」（趙蓉、尉遲治平1999）。宋代詩詞では合して一部（庚青部）となるが、唐五代では例は少ない。『祖堂集』偈頌兩攝通押3例のうち舒聲2例は達摩章の般若多羅識である。現代諸方言において青蒸兩韻の韻尾を同じくするものに閩南話（精英韻[ing]、周長楫1996）があり、また『漢語方音字匯』によると福州話（閩東）が「行」[xeing文讀]、「僧」[tseing]、「肱（弘）」[xeing]、「名」[ming文讀]として叶韻の条件にかなっている。しからは般若多羅識の作者は閩人だった可能性がある。
2. 梗攝昔[k]、臻攝質[t]の混用は南北ともに広く見られる。『祖堂集』異文別字にも「一」「亦」通用例がある。上掲の丹霞天然（738－823）の出身は未詳であるが、龐居士とともに科擧に應じたというから、同じく湖南衡陽の人であったかも知れない。
3. 梗攝、曾攝の入聲の通押は香巖の偈であるが、香巖にはほかにも青皓夬合用、山攝の先燭合用、屑薛月之合用、臻攝の眞虞混用など特異な叶韻例をもつ。『祖堂集』所收の偈は金澤文庫本『香巖頌』とは風格がかなり異なり、またその形態のみならず押韻も特殊で、こういう特徴がなににもと

づくのか、稿を改めてかんがえたい。

十五. 通攝

- | | | |
|-------------|-----------------------|-------------|
| (1) 東獨用 5 | [3. 懶瓚1-8] | 功朦通東 |
| | [10. 鏡清 4] | 功通東 |
| | [15. 龜洋 1] | 公同空東 |
| | [17. 岑和尚11] | 空童東 |
| | [17. 岑和尚24] | 空同東 |
| (2) 鍾獨用 1 | [19. 香嚴12] | 容龍鍾 |
| (3) 東冬同用 4 | [11. 睡龍 1] | 聾通東宗冬 |
| | [11. 睡龍 2] | 通功同東濃 [儂] 冬 |
| | [15. 盤山 1] [15. 盤山 2] | 宗冬功通東 |
| (4) 東鍾同用 6 | [5. 大顛 1] | 宮東封鍾 |
| | [10. 長慶 3] [11. 惟勁 3] | 雄同東蹤鍾 |
| | [17. 岑和尚 2] | 松鍾同翁東 |
| | [17. 岑和尚 7] | 空東容鍾 |
| | [19. 香嚴30] | 中通東蹤鍾 |
| (5) 東冬鍾同用 1 | [19. 香嚴10] | 容龍鍾同東宗冬 |
| (6) 東鍾送通用 1 | [2. 達摩 2] | 凶鍾中送窮東 |
| (7) 宋獨用 1 | [6. 洞山 1 淨修] | 衆夢鳳痛宋 |
| (8) 燭獨用 2 | [9. 玄泰 2] | 浴足燭 |
| | [19. 香嚴19] | 足觸燭 |
| (9) 屋燭同用 1 | [14. 高城1-14] | 谷屋足續燭 |
| (10) 屋德混用 1 | [10. 鏡清8-1] | 速目屋國德 |

獨用：東 5，鍾 1，宋 1，燭 2

同用：東冬 4，東鍾 6，東冬鍾 1，屋燭 1

通用：東鍾送平去 1

混用：屋、曾攝德 1

平		上		去		入	
東	5						
				宋	1	燭	2
鍾	1						
東冬	4					屋燭	1
東鍾	6						
東冬鍾	1						
東鍾送	1						
						屋、德	1

1. 通攝は朱韜反切、晚唐五代詩詞韻、敦煌變文用韻ともに舒聲東冬鍾韻一部、入聲屋沃燭一部。『祖堂集』偈頌もほぼ一致するが、鏡清「嘆景禪吟」第1韻段の屋德混用はやや特異で、二韻混押は晚唐、五代、宋の詩詞、敦煌變文に少數の例があるのみである。現代閩南話では二韻が合併している（目録部[ok]，周長楫1996）。

小結

本稿は『祖堂集』本文の音誤を校訂し、その説明を試みることを通じて、『祖堂集』というテキストの性質を知ろうとしたものである。本文が正しく讀解できれば、もう異文に用はないのであるが、しかしなぜ訛誤が生じたのかに説明を與えることも、校勘學の不可缺の仕事である。音韻にかかわる訛誤であるから、『祖堂集』所收偈頌の用韻を援用して旁證としたが、いわば他人の作品を旁證に引くようなことをしたのは、じつは訛誤の主體が不明確なためで、主體を『祖堂集』各章の禪師に限定せず、編集上の問題でもあると見たからで

ある。こうして『祖堂集』テキストの誤りかたに系統性ないし一定の傾向があること（たとえば南方方音に顕著な聲母清濁混用、現代閩方音との一致）が知られ、テキストの性質がうかびあがった。それは期待したとおり、唐末五代音韻の時代と地域（おおまかに言って南方、または時に限定して閩地）にかかわる性質、すなわち10世紀閩地で収集され編纂された資料という特徴が見出された。『祖堂集』の場合、異文別字も偈頌作品も敦煌資料に比べれば絶対数がはるかに少なく、またこれが編纂物であるという性格から、『祖堂集』の音系といったものは抽出できないが、本文校訂の副産物として、『祖堂集』テキストの性質に方言音的特徴の存することを提示したわけである。しかし音韻學の手法に不慣れなために、詰めが甘かったり、あるいは不適切ないし誤りを犯してはいないかと懼れている。10世紀の作品の音韻現象に、いきなり現代方音を對應させるようなやりかたには、つねづね違和感を覺えていたが、自分も音韻史的説明に窮して、つい『漢語方音詞匯』や『古今漢字音表』に頼ることがあった。しかし兩書はすぐれて実用的であり、歴史的な現象が現代方言に直結するということも確かにあり、『祖堂集』の場合、異文別字と所收偈頌の押韻には現代閩方音の特徴と合致する例が少なくないことも確かめられた。

『祖堂集』に閩語の痕跡を尋ねる試みは、梅祖麟「《祖堂集》の方言基礎和它的形成過程」(《Journal of Chinese Linguistics》monograph series number 10, 1977)、張雙慶「《祖堂集》所見的泉州方言詞匯」(《第四屆國際閩方言研討會論文集》汕頭大學出版社, 1996)においてなされたことがあったが、前者が擧げる語彙語法は閩語というより吳語一般に見られるものであり、後者が擧げる語彙は果たして泉州話にのみ見られるものか説明がない。おそらく『祖堂集』の語彙語法に閩語獨自の特徴を求めることは難しいのではなからうか。

『祖堂集』を音韻の面から眺めて、これまで気づかなかったことがいくつかあり、今後の課題にしたいとおもう。それは所收偈頌の押韻からみて、卷2達摩章に引く讖の偽作者の方言音は閩音訛りではないか（すなわち原一卷本の間

題)、また福建出身禪師の用韻はたしかに注意すべきだが、むしろ収録の比較的多い岑和尚(長沙景岑)、香嚴智閑の用韻が非常に特異で、後者は金澤文庫本『香嚴頌』との関係(つまり『香嚴頌』の作者問題)も考える必要があるということなどである。

(附記)

本稿は2007年度の花園大學教員サバティカルを得て書きはじめた。『祖堂集』所収偈頌の用韻を調べたあと、蔡榮婷教授から『祖堂集禪宗詩偈研究』(文津出版社, 2004)が届き、その附録に作品表が収めてあったので彼此対照したところ、雙方に少なからざるミスを発見し、補訂することができた。あわせ記して謝意を表する。

(2009. 10. 31 記)

本稿校正中に、秋谷裕幸氏より方言研究の方法からミスの指摘に至るまで、懇切なご示教を忝くした。いまはとりあえず若干の補訂を施し、次の論文で『祖堂集』言語の基礎方言についてまとめたいとおもう。秋谷氏に謝意を表する。

(2010. 2. 12 記)

〈主要参考引用文献〉

- 趙振鐸《辭書學論文集》商務印書館, 2006.
- 邵榮芬《切韻研究 校訂本》中華書局, 2008.
- 邵榮芬《邵榮芬音韻學論集》首都師範大學出版社, 1997.
- 李新魁《中古音》漢語知識叢書, 商務印書館, 2000.
- 魯國堯《語言文學集: 考證、義理、辭章》江山語言學叢書, 上海人民出版社, 2008.
- 劉曉南《宋代閩音考》古文獻研究叢書, 岳麓書社, 1999.
- 劉曉南《漢語歷史方言研究》江山語言學叢書, 上海人民出版社, 2008.
- 王力《漢語語音史》中國社會科學出版社, 1985.
- 周祖謨《周祖謨語言文史論集》江蘇古籍出版社, 1988.

- 唐作藩《漢語史學習與研究》商務印書館，2001.
- 高田時雄『敦煌資料による中國語史の研究』東洋學叢書，創文社，1988.
- 羅常培《唐五代西北方音研究》中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之十二，1933.（1991影印）
- 大島正二『唐代字音の研究』汲古書院，1981.
- 蔡榮婷《祖堂集禪宗詩偈研究》文津出版社，2004.
- 洪藝芳《唐五代西北方音研究——以敦煌通俗韻文爲主》中國文化大學中國文學研究所碩士論文，1995.
- 郭錫良《漢字古音手冊》北京大學出版社，1986.
- 北京大學中國語言文學系語言學教研室《漢語方音字匯》第二版，文字改革出版社，1989.
- 周長楫、李珍華《漢字古今音表》中華書局，1993.
- 周長楫《中古韻部在閩南話讀書音裏的分合》，《語言研究》1996年增刊.
- 鮑明煒《唐代詩文韻部研究》江蘇古籍出版社，1990.
- 松尾良樹「王梵志詩韻譜」，『均社論叢』第10號，1981.
- 趙鴻魁《王梵志詩用韻研究》，《隋唐五代漢語研究》，山東教育出版社，1990.
- 沈祥源《唐五代詞用韻考》，《研究生論文選集・語言文字分冊》江蘇古籍出版社，1985.
- 趙蓉、尉遲治平《晚唐詩韻系略說》，《語言研究》1999年第2期.
- 陳海波、尉遲治平《五代詩韻系略說》，《語言研究》1998年第2期.
- 韓維善《〈祖堂集〉詩韻考》，《甘肅高師學報》第9卷第3期，2004.
- 韓維善《〈祖堂集〉詩韻止、蟹二攝考》，《甘肅廣播電視大學學報》第14卷第2期，2004.

附録（一）『祖堂集』偈頌詩韻

【凡例】〔第1欄〕卷數。〔第2欄〕禪師名の前に通し番號を附す（卷3以降，中華書局中國佛教典籍選刊『祖堂集』，2007参照）。〔第3欄〕偈頌には當該禪師の章中に出現する順に通し番號を附す。偈頌に換韻のある場合は、そのあとに韻段の番號を附す。〔第4欄〕校訂した韻字を〔 〕内に補う。詩韻のあとには通押の種別を（ ）に示す。同用：同攝同調，通用：同攝異調，混用：異攝同調，合用：異攝異調。*印は無韻偈。

卷1 過去七佛偈	(1) 毘婆尸佛偈	像住*
	(2) 尸棄佛偈	幻性*
	(3) 毘舍浮佛偈	有滅*
	(4) 拘留孫佛偈	佛別*
	(5) 拘那含牟尼佛偈	佛死*
	(6) 迦葉佛偈	滅福*
釋迦	(1) 釋迦牟尼佛偈	是紙畏未（通用）
	(2) 偈	身生*〈見大智度論卷1〉
	(3) 淨居天子偈	性欲實身*〈見佛本行集經卷16〉
	(4) 太子偈	離脫*〈見佛本行集經卷18〉
	(5) 大悟偈	星青情清（同用）
	(6) 傳法偈	法法乏
	(7) 迦葉偈	心我見驚動見槃依心胸腰足處苦處* 〈見涅槃經後分卷下〉
第一大迦葉	(1) 偈	槃集*
	(2) 阿難偈	嚴月*
	(3) 傳法偈	法法乏
	(4) 淨修讚	心尋深岑侵
第二阿難	(1) 比丘偈（佛偈）	涸之*
	(2) 阿難歎	意志睡寘（同用）
	(3) 阿難演佛偈	機微之之（同用）
	(4) 傳法偈	法法乏
	(5) 淨修讚	幢釭雙江江
第三商那和修	(1) 傳法偈	法法乏

	(2) 淨修讚	燈肱增鵬登
第四優婆塞多	(1) 傳法偈	法法乏
	(2) 淨修讚	多河娑歌魔戈那歌 (同用)
第五提多迦	(1) 偈	泉緣仙
	(2) 毬多偈	慧霽地至 (止攝至、蟹攝霽混用)
	(3) 傳法偈	法法乏
	(4) 淨修讚	家花牙瓜麻
第六弥遮迦	(1) 傳法偈	法法乏
	(2) 淨修讚	仙偏仙玄先然仙 (同用)
第七婆須密	(1) 傳法偈	法法乏
	(1) 淨修讚	密室一日失質
第八佛陀難提	(1) 伏駄密多問偈	者者馬
	(2) 師偈	比旨是紙似止離支 (通用)
	(3) 傳法偈	是紙理止 (同用)
	(4) 淨修讚	提迷低梯西齊
第九伏駄密多	(1) 傳法偈	理止僞寔 (通用)
	(2) 淨修讚	成清行生庚程清 (同用)
第十脇	(1) 傳法偈	理止止
	(2) 淨修讚	者捨灑寫馬馬
第十一富那耶奢	(1) 傳法偈	離支二至 (通用)
	(2) 淨修讚	師脂弥支衰夷脂差支 (同用)
第十二馬鳴	(1) 傳法偈	貳棄至
	(2) 淨修讚	鳴庚城清清明生庚 (同用)
第十三毘羅	(1) 傳法偈	際祭智寔 (止攝寔、蟹攝祭混用)
	(2) 淨修讚	王常長霜陽
第十四龍樹	(1) 傳法偈	理喜止
	(2) 淨修讚	樹務住遇雨麁趣遇 (通用)
第十五迦那提婆	(1) 傳法偈	理始止
	(2) 淨修讚	高毛濤刀豪
第十六羅睺羅	(1) 傳法偈	離寔起止 (通用)
	(2) 淨修讚	論門坤孫魂
卷2 第十七僧伽難提	(1) 佛偈	機微之之 (同用) 〈卷1. 阿難20と同〉
	(2) 傳法偈	起止然仙 (止攝止上、山攝仙平合用)

	(3) 淨修讚	子里始已止
第十八伽耶舍多	(1) 傳法偈	萌耕生庚 (同用)
	(2) 淨修讚	機微師脂虧支誰脂 (同用)
第十九鳩摩羅多	(1) 傳法偈	說薛決屑 (同用)
	(2) 淨修讚	簪鈞鉗瞻鹽
第二十闇夜多	(1) 讚	道皓倒号好皓燥[躁]号教效 (通用)
	(2) 傳法偈	性勁竟映 (同用)
	(3) 淨修讚	祖古姥畝厚普土姥 (遇攝姥、流攝厚混用)
第二十一婆修盤頭	(1) 太子偈讚	通東者馬我弩火果 (假攝馬、果攝弩果混用、通字失韻)
	(2) 傳法偈	悟暮古姥 (通用)
	(3) 淨修讚	臥情和過過
第二十二摩拏羅	(1) 傳法偈	幽幽憂尤 (同用)
	(2) 淨修讚	止齒止耳止
第二十三鶴勒	(1) 傳法偈	議寅知支 (通用)
	(2) 淨修讚	勤德特國葡德
第二十四師子	(1) 傳法偈	心今侵
	(2) 淨修讚	譽翥馭去御
第二十五婆舍斯多	(1) 傳法偈	是紙理止 (同用)
	(2) 淨修讚	緣拳缸宣[諠]仙
第二十六不如密多	(1) 傳法偈	尾尾智寘 (通用)
	(2) 淨修讚	慶行敬鏡映
第二十七般若多羅	(1) 傳法偈	理起止
	(2) 淨修讚	珞泊涸廓鐸
第二十八菩提達摩	(1) 般若多羅識 1	羊陽江江昌陽 (江攝江、宕攝陽混用)
	(2) 般若多羅識 2	凶鍾中東窮東 (同用)
	(3) 般若多羅識 3	猪魚輪虞 (同用)
	(4) 般若多羅識 4	行庚僧登 (梗攝庚、曾攝登混用)
	(5) 那連耶舍識 1	肱登名清 (曾攝登、梗攝清混用)
	(6) 那連耶舍識 2	名聲清平庚 (同用)
	(7) 那連耶舍識 3	繩蒸分文 (曾攝蒸、臻攝文混用)
	(8) 那連耶舍識 4	燈憎登
	(9) 那連耶舍識 5	懃殷人眞 (同用)

	(10) 那連耶舍識 6	濱人眞
	(11) 那連耶舍識 7	敷虞徒模 (同用)
	(12) 那連耶舍識 8	尊魂分文 (同用)
	(13) 那連耶舍識 9	人眞勲文 (同用)
	(14) 那連耶舍識 10	男覃談三談 (同用)
	(15) 那連耶舍識 11	姻眞尊魂 (同用)
	(16) 那連耶舍識 12	身塵眞
	(17) 那連耶舍識 13	流修尤
	(18) 志公識	鉤頭侯刀逃豪 (效攝豪、流攝侯混用)
	(19) 傳法偈	情成清
	(20) 答偈	措悟度暮祖姥 (通用)
	(21) 達摩識	鏤果我智 (同用)
	(22) 淨修讚	為支師脂歸衣微 (同用)
第二十九慧可	(1) 傳法偈	生生庚
	(2) 淨修讚	學礪岳驚濁覺
第三十 僧璨	(1) 傳法偈	生生庚
	(2) 淨修讚	子止此紙市止旄紙 (同用)
第三十一道信	(1) 傳法偈	生生庚
	(2) 淨修讚	脫闕末鉢末
第三十二弘忍	(1) 神秀偈	臺埃哈
	(2) 盧行者偈	臺埃哈
	(3) 傳法偈	生生庚
	(4) 淨修讚	前煙玄年先
第三十三惠能	(1) 偈	生庚成清 (同用)
	(2) 淨修讚	梅灰來哈雷迴灰開哈 (同用)
卷 3 44 鳥窠 (在杭州)	(1) 第三弟詩	師脂時之知支 (同用)
	(2) 白舍人讚	行庚情名清 (同用)
	(3) 白舍人詩	經醒青
45 懶瓚 (在南岳)	(1) 樂道歌 (1-1)	換段乱斷筭喚換漢翰 (同用)
	(1-2)	粒饗及緝
	(1-3)	天田暝賢先然仙 (同用)
	(1-4)	住袴悞度遇
	(1-5)	見練霰面變線 (同用)

		(1-6)	事字意志
		(1-7)	骨兀餒[當音奴骨切]沒
		(1-8)	功朦通東
		(1-9)	言元緣傳仙（臻攝元、山攝仙虞混用）
		(1-10)	語与所杼語
		(1-11)	悠丘流尤頭鉤侯侯憂尤（同用）
		(1-12)	形寧青生庚青青（同用）
47 騰騰	(1) 樂道歌		問問順稭寸恩儻稭郡問仝恩糞問論恩 聞稭頓恩運問鈍恩（同用）
49 靖居 (廬陵人、在吉州)	(1) 淨修讚		陵蒸乘證水蒸應證（通用）
51 慧忠（越州人）	(1) 耽源偈		北國德識職（同用）
	(2) 淨修讚		猷舟籌著[差]尤
54 司空山本淨 (絳州人)	(1) 四大無主偈		水旨此紙意事志（通用）
	(2) 見聞覺知偈		碍代昧隊愛代在海（通用）
	(3) 無修偈		修修尤漚侯休尤（同用）
	(4) 背道逐教偈		道道造道皓
	(5) 真妄偈		形青名清寧青（同用）
	(6) 善惡二根不實偈		有有守有走厚咎有（同用）
	(7) 來往如夢偈		鬧覺鬧效悟暮道皓（效攝皓上效去、 遇攝暮去合用）
56 懷讓 (金州人、在南岳)	(1) 傳法偈		萌耕成清（同用）
卷 4 57 石頭 (端州人、在南嶽)	(1) 偈		名清行明庚（同用）
	(2) 參同契		付遇祖姥注遇悟互暮住遇苦姥句遇母 厚固醋布暮語語遇遇觀姥步暮處御住 遇矩裏路暮耳[固]度暮（遇攝語裏姥 上御遇暮去流攝厚上合用）
61 丹霞	(1) 孤寂吟	(1-1)	寂錫益擲昔（同用）
		(1-2)	力識棘職
		(1-3)	邊先喧元傳仙（先仙元混用）
		(1-4)	聞文盆昏魂（同用）
		(1-5)	了篠少小鳥篠（同用）
		(1-6)	長陽茫唐愴漾（通用）
		(1-7)	益昔室質寂錫（臻攝質、山攝昔錫混用）

- (1-8) 良陽堂唐霜陽 (同用)
- (1-9) 心音林侵
- (1-10) 柔流裝尤
- (1-11) 西低迷齊
- (1-12) 心深金侵
- (1-13) 真人塵真
- (1-14) 愆邊玄先
- (1-15) 知支詞之死旨 (通用)
- (1-16) 行明生庚
- (1-17) 知支微微兒支 (同用)
- (1-18) 深琴吟侵
- (2) 玩珠吟(一) (2-1) 惺靈形經聽冥停星青
- (2-2) 清清明庚盈傾輕聲清平庚名清行庚程
成清 (同用)
- (3) 玩珠吟(二) 久守有透候垢厚走口藪有有 (通用)
- (4) 驪龍珠吟 (4-1) 珠殊珠虞
- (4-2) 沉尋心侵
- (4-3) 夫無虞途模 (同用)
- (4-4) 明庚瑩庚靈青 (同用)
- (4-5) 神塵人真
- (4-6) 在改怠海
- (4-7) 擲昔客陌覓錫 (同用)
- (4-8) 玠人貧身真
- (5) 弄珠吟 (5-1) 測職得德力職 (同用)
- (5-2) 小小照笑了篠 (通用)
- (5-3) 有有走厚 (同用)
- (5-4) 尼脂池支之之 (同用)
- (5-5) 遠阮轉便線 (臻攝阮上、山攝線去合用)
- (5-6) 水旨遂至僞真 (通用)
- (5-7) 緣仙玄先源元 (臻攝元、山攝先仙混用)
- (5-8) 魔戈河跼歌 (同用)
- (5-9) 心今吟侵
- (6) 如意頌 如餘虛如魚

	63 藥山	(1) 李翱偈	形經瓶青
	(絳州人、在朗州)	(2) 李翱讚	情清迎庚聲清 (同用)
		(3) 曜日頌	人眞新眞
卷 5	64 大顛 (在湖州)	(1) 偈	宮東封鍾 (同用)
	68 雲岳	(1) 偈	奇支議眞知支 (通用)
	(鍾陵人、在潭州)	(2) 洞山偈	疎渠渠如魚
	69 華亭 (在蘇州)	(1) 花嚴頌	知兒支
		(2) 擇禪師頌 (一)	名程清聽聆形嚶亭青 (同用)
		(3) 擇禪師頌 (二)	年先緣禪然筌仙 (同用)
	71 道吾	(1) 淨修讚	吾徒枯烏乎模
	(鍾陵人、在瀏陽)		
	72 三平	(1) 荷玉頌	杖養放漾當喪宕 (通用)
	(福州人、在漳州)	(2) 頌	吹枝支
		(3) 偈 (一)	聞君分文
		(4) 偈 (二)	塵身賓眞
		(5) 偈 (三)	因眞琺眞
	74 德山	(1) 淨修讚	州儔修舟尤頭侯 (同用)
	(劔南人、在朗州)		
卷 6	78 洞山	(1) 淨修讚	衆夢鳳痛送
	80 石霜 (吉州人)	(1) 張拙秀才偈	沙家遮邪花麻
		(2) 雪峯偈	昏魂分文 (同用)
卷 7	81 夾山 (漢廣峴亭人、在澧州)	(1) 偈	前先到号 (山攝先平、效攝号去合用)
		(2) 老僧道	潭參覃
		(3) 偈	流尤頭侯舟尤 (同用)
	82 巖頭	(1) 曜日頌	眞親新眞
	(泉州人、在鄂州)	(2) 洞山偈	疎渠渠如魚 (卷 5 雲岳 (2) と同)
		(3) 頌	事志彩海 (止攝志去、蟹攝海上合用)
		(4) 銘	捨者馬
	83 雪峯	(1) 偈	章陽光唐 (同用)
	(泉州人、在福州)	(2) 偈	霞家麻
		(3) 雙峰偈	行平明庚
		(4) 和偈	關刪橫明庚聲清 (山攝刪、梗攝庚清混用)
		(5) 雙峰偈	行生庚
		(6) 和偈	行生庚

		(7) 頌	般桓彈寒曲燭 (山攝桓寒、通攝燭合用)
		(8) 頌	取夔[富]有 (遇攝夔上、流攝宥去合用)
		(9) 頌 (一)	路悟暮
		(10) 頌 (二)	晡模肚姥 (通用)
		(11) 儒假大德送詩 (一) 新身真	
		(12) 儒假大德送詩 (二) 成征清明庚 (同用)	
		(13) 儒假大德送詩 (三) 移知支時之 (同用)	
		(14) 暉和尚頌	蛇麻何陁歌 (果攝歌、假攝麻混用)
		(15) 報慈和	蛇麻何陁歌 (果攝歌、假攝麻混用)
卷 8	87 曹山 (泉州人、在撫州)	(1) 古人偈	林心尋侵
	90 青林 (在江西)	(1) 頌	草老皓
	91 疎山 (在撫州)	(1) 偈	中[野]者馬
		(2) 偈	閑山還刪 (同用)
	92 龍牙 (撫州人、在漳州)	(1) 偈	閑閑山難寒 (同用)
		(2) 頌常長涼陽	常長涼陽
		(3) 頌	身塵人真
		(4) 頌	循諄分文聞[門]魂 (同用)
		(5) 頌	貧真聞文 (同用)
		(6) 頌	情清明庚寧青 (同用)
卷 9	95 落浦 (鳳翔人、在澧州)	(1) 神劍歌 (1-1)	奇支稀輝微 (同用)
		(1) 神劍歌 (1-2)	疑之姿脂揮微 (同用)
		(1-3)	孽薛決屑月月 (臻攝月、山攝屑薛混用)
		(1-4)	求悠流尤
		(1-5)	腥青鳴庚靈青生平庚 (同用)
		(1-6)	紀止死旨易真裏起止 (通用)
		(2) 浮漚歌 (2-1)	水旨起已止水旨異志 (通用)
		(2-2)	虛魚珠無虞 (同用)
		(2-3)	明庚形青生庚 (同用)
		(2-4)	身人真真
		(3) 頌	前先到号 (卷 7 夾山(1)と 同)
	103 肥田 (在潭州)	(1) 頌	夫愚軀虞
		(2) 頌	侵欽侵

107 九峯 (福州人、在江西)	(1) 頌	人身真
108 玄泰 (在南嶽)	(1) 偈 (一)	五姥主真祖姥 (同用)
111 烏巖	(2) 偈 (二)	浴足燭
	(1) 師云	春諄身真 (同用)
卷10 114 玄沙 (福州人、在福州)	(1) 偈	議真之之機微 (通用)
	(2) 靈雲偈	枝支疑之 (同用)
	(3) 頌	常陽光唐王陽 (同用)
	(4) 偈	機微議真希微 (通用)
	(5) 偈	源元全圓仙 (臻攝元、山攝仙混用)
	(6) 淨修讚	孤模湖模衢無虞 (同用)
115 長生 (福州人、在福州)	(1) 偈	看寒山山 (同用)
	(2) 偈	懸先昏魂全仙 (山攝先仙、臻攝魂混用)
118 鏡清 (温州人、在越州)	(1) 頌	是紙置至綴祭 (止攝紙上至去、蟹攝祭去合用)
	(2) 頌	持之時之伊脂 (同用)
	(3) 象骨山頌	無虞如魚 (同用)
	(4) 頌	功通東
	(5) 頌	機飛微
	(6) 頌	急及緝
	(7) 談體頌	明庚精城清 (同用)
	(8) 嘆景禪吟 (8-1)	速日屋國德 (通攝屋、曾攝德混用)
	(8-2)	奇知馳支
	(8-3)	笑笑調嘯要笑 (同用)
	(8-4)	高毫勞豪
	(8-5)	毛豪遊尤遙宵 (效攝豪宵、流攝尤混用)
	(9) 悟玄頌	尋吟深侵任沁 (通用)
119 翠巖 (湖州人、在明州)	(1) 示後學偈	蘆模無虞 (同用)
	(2) 明照和尚和	珠虞蘆模 (同用)
	(3) 和	無虞蘆模 (同用)
	(4) 勸學偈	哉哈灰灰徠哈 (同用)
122 鼓山 (生梁國、在福州)	(1) 頌	除涯麻
125 長慶	(1) 衷情偈	差禡下打馬 (通用)

卷11	127 雲門 (蘇州人、在韶州)	(杭州人、在福州)	(2) 偈	身親真水蒸 (臻攝眞、曾攝蒸混用)
			(3) 體師叔古曲偈	雄東同東蹤鍾 (同用) 〈卷11惟勁(7)と同〉
			(4) 王太傅偈	分聞文
			(5) 奉和	聞文玠眞 (同用)
			(6) 淨修讚	當堂唐
		(1)	十二時偈 (1-1)	子止許語氣未 (止攝止上未去、遇攝語上合用)
			(1-2)	丑有吼斗厚 (同用)
			(1-3)	寅身親眞
			(1-4)	卯巧教效巧巧 (通用)
			(1-5)	辰人隣眞
			(1-6)	巳似止慮御 (止攝止上、遇攝御去合用)
			(1-7)	午姥儻麤鼓姥 (同用)
	128 齊雲 (東國人)		(1-8)	未味貴未
			(1-9)	申賓因眞
			(1-10)	酉有走厚手有 (同用)
			(1-11)	戌術物屈物 (同用)
			(1-12)	亥海配味隊 (通用)
			(2) 宗脉頌	問山年先言元邊先傳連仙言元天先傳 仙源元前先錢仙天然仙閑山山安寒 禪仙 (臻攝元、山攝寒山先仙混用)
		(1)	措多詩	知碑支
			(2) 麗天和尚頌	藍談談岳咸 (同用)
			(3) 師和頌	藍談談岳咸 (同用)
		(1)	讚鏡燈頌 (1-1)	津身眞
			(1-2)	因眞測先 (臻攝眞、山攝先混用)
132 惟勁 (福州人、在南嶽)			(1-3)	仙詮仙
			(1-4)	然全仙
			(1-5)	宣圓仙
		(2)	述象骨偈	尊門魂傳全仙嘶齊 (臻攝魂、山攝仙、蟹攝齊混用)
		(3)	如鉢禪師雄頌	雄同東蹤鍾 (同用) 〈卷10長慶(25)と同〉
		(4)	又頌	休尤頭侯 (同用)

	(5) 偈	源元圓仙邊前先拳然仙（臻攝元、山攝先仙混用）
133 越山鑒真 （嗣雪峯、在越州）	(1) 頌三種病人	高豪荷智歌歌（效攝豪平、果攝歌平 幫上合用）
134 睡龍 （福唐人、在泉州）	(1) 頌三種病人 (2) 示學偈	聲東宗冬通東（同用） 通功同東濃〔儂〕冬宗冬（同用）
135 佛日（在越州）	(1) 徑山偈 (2) 頌	留尤無虞（流攝尤、遇攝虞混用） 屍脂治志飛微（通用）
卷12 140 荷玉	(1) 頌	期之知支（同用）
146 禾山 （福州人、在洪州）	(2) 九峯偈	殊珠株虞
147 寶峯 （泉州人、在洪州）	(3) 師云	花家麻
156 中塔 （泉州人、在福州）	(4) 曜日頌	塵因新眞
卷13 161 福先招慶 （泉州人、在泉州）	(1) 舉古云 (2) 頌 (3) 頌 (4) 頌	地至義眞地至（同用） 開哈迴灰來哈（同用） 開哈迴灰來哈（同用） 開哈迴灰來哈（同用）
卷14 163 江西馬祖 （漢州人、在江西）	(1) 偈 (2) 亮座主偈 (3) 淨修讚	寧青生庚（同用） 身人眞 石役擲尺昔
168 石鞏（在撫州）	(1) 弄珠吟 (1-1) (1-2) (1-3) (1-4) (1-5)	千懸千先源元（山攝先、臻攝元混用） 羨線見霰變線（同用） 喻虞句住遇（通用） 鏡映性淨勁（同用） 陀歌波摩戈（同用）
173 高城	(1) 歌行 (1-1) (1-2) (1-3) (1-4) (1-5) (1-6) (1-7)	金音尋心林音金侵 深侵沉侵 曜照妙笑 尾尾起止你〔尔〕紙（同用） 覓跡昔的錫（同用） 林針心侵 境梗靜靜影梗（同用）

		(1-8)	師脂窺支錐脂 (同用)
		(1-9)	我智和幡[播]過 (通用)
		(1-10)	奇支議真衣微 (通用)
		(1-11)	生庚成平清 (同用)
		(1-12)	軀珠殊虞
		(1-13)	日質質屈物 (同用)
		(1-14)	谷屋足續燭 (通用)
		(1-15)	別薛歇月滅薛 (臻攝月、山攝薛混用)
		(1-16)	畏未對隊意志 (止攝未志、蟹攝隊混用)
174	章敬	(1) 賈島碑銘	子止字志里止位至未未 (通用)
卷15	176 鵝湖 (衢州人、在信州)	(1) 頌	旨旨是紙示至池知支 (通用)
	177 伏牛 (在北京[洛陽])	(1) 頌	津鱗身真
		(2) 小師答	存渾門魂吞痕坤魂 (同用)
		(3) 三个不歸頌(3-1)	迷齊飛歸微 (止攝微、蟹攝齊混用)
		(3-2)	威微歸微
		(3-3)	希依歸微
178	盤山	(1) 強大師拈問福先	宗冬功通東 (同用)
		(2) 福先答	宗冬功通東 (同用)
181	五洩	(1) 答偈	禪仙邊先 (同用)
185	鄧隱峯(建州人)	(1) 偈	彈寒看寒
186	歸宗(在江州)	(1) 李万卷讚	山山如魚(山攝山、遇攝魚混用)
		(2) 偈	午怙姥路怖暮覆宥度暮土姥措暮瞽姥路 暮祖姥(遇攝姥上暮去、流攝宥去合用)
		(3) 師云	所議願*〈見法華經觀世音菩薩普門 品偈〉
190	龜洋(莆田縣人)	(1) 偈	公同空東
194	龐居士(生衡陽)	(1) 偈	爲支歸微(同用)
		(2) 偈	如虛居魚夫虞(同用)
		(3) 又偈	行庚城清盲庚耕耕生庚(同用)
		(4) 又偈	易智寅二地至(同用)
		(5) 又偈	禪緣仙眠煙天先船仙邊先(同用)
		(6) 又偈	他歌過戈多歌(同用)
		(7) 又偈	如虛除魚珠駢虞虛如餘魚(同用)

		(8) 又偈	書除魚
		(9) 又	常鄉陽
		(10) 又偈	名清聽青生庚成清 (同用)
卷16	195 南泉	(1) 淨修讚	泉緣傳詮焉仙
	197 黃蘗	(1) 裴休讚	身濱因人真
	(福州人、在高安縣)		
卷17	208 公畿	(1) 師云	禪錢仙
	209 關南	(1) 樂道歌 (1-1)	幻欄電霰變羨線見霰散翰見霰 (同用)
		(1-2)	歌呵歌笑笑叫嘯要笑調嘯道好老皓 (果攝歌平、效攝皓上笑嘯去合用)
	214 正原	(1) 偈	田先然船仙 (同用)
	(宣州人、住龜山)	(2) 偈	源元全仙言元 (臻攝元、山攝仙混用)
		(3) 偈	時之支支悲脂 (同用)
		(4) 偈	洗齊醫之時之 (止攝之平、蟹攝齊上合用)
	216 岑和尚 (在湖南)	(1) 勸學偈	休遊秋尤
		(2) 誠斫松竹人偈	松鍾同翁東 (同用)
		(3) 投機偈	真人真真
		(4) 偈	人真身真
		(5) 因事頌	堂光藏唐
		(6) 頌	奇支疑之非微 (同用)
		(7) 須弥納芥子偈	空東容鍾 (同用)
		(8) 偈	真人真真
		(9) 偈	深心心音侵
		(10) 偈	香常陽光唐 (同用)
		(11) 偈	空童東
		(12) 偈	意志心心侵 (止攝志去、深攝侵平合用)
		(13) 偈	生生庚先先遷仙 (山攝先仙、梗攝庚混用)
		(14) 偈	無殊虞
		(15) 偈	議真依微思之如魚時之 (止攝之微平真去、遇攝魚平合用)
		(16) 偈	聲清根痕真人真 (臻攝真痕、梗攝清混用)

		(17) 偈	誰脂歸微 (同用)
		(18) 偈	空同東
卷18	220 趙州 (青州人、在北地)	(1) 偈	北勒得德
	221 紫胡 (在衢州)	(1) 師有時云	物佛屈物
		(2) 又云	胡龜模無虞 (同用)
	223 仰山 (韶州人)	(1) 順德頌	屈物說薛日質 (臻攝質物、山攝薛混用)
		(2) 偈	作鐸藥藥鶴鐸 (同用)
		(3) 五祖偈	臺埃哈 〈卷2 弘忍(2)と同〉
		(4) 六祖偈	臺埃哈 〈卷2 弘忍(2)と同〉
卷19	224 香巖 (青州人、在鄧州)	(1) 偈1	知支持之儀支機微 (同用)
		(2) 偈2	貧貧眞無虞 (臻攝眞、遇攝虞混用)
		(3) 指古人跡頌(3-1)	骨沒沒
		(3-2)	當唐量傷妨陽 (同用)
		(4) 勵學吟	說薛決囓屑徹薛切屑揭月持之說絕薛 (臻攝月、山攝屑薛、止攝之合用)
		(5) 誠宗教接物頌	玄先然緣仙年先 (同用)
		(6) 最後頌	語語矩麌許語處慮御侶語樹遇 (通用)
		(7) 常在頌	息棘職析錫擲跡昔力職 (曾攝職、梗 攝昔錫混用)
		(8) 修行頌	傾 [頃] 靜清清鏡映寧青 (通用)
		(9) 鄭郎中問頌	縛藥廓鐸 (同用)
		(10) 師答頌	容鍾同東宗冬龍鍾 (同用)
		(11) 鄭郎中又問	途模無虞 (同用)
		(12) 發機頌	容龍鍾
		(13) 清思頌	堂唐詳常陽 (同用)
		(14) 談玄頌	帶賴泰對隊 (同用)
		(15) 与學人玄機頌	遲脂機微怡之知支 (同用)
		(16) 渾崙語頌	分文門崙魂 (同用)
		(17) 明古頌 (17-1)	異置志義眞 (同用)
		(17-2)	池支疑之危支 (同用)
		(17-3)	離支遲脂知支 (同用)
		(17-4)	僞眞異志起止 (通用)

- (17-5) 累旨底齊細霽 (止攝旨上、蟹攝齊上
霽去合用)
- (17-6) 衣[被]祗偽真意志 (通用)
- (17-7) 諱未置志愧至 (同用)
- (17-8) 諦霽氣貴未 (止攝未、蟹攝霽混用)
- (18) 暢玄頌 儀支持之知支議真 (通用)
- (19) 寶明頌 足觸燭
- (20) 出家頌 稱勝證
- (21) 寄法堂頌 話央道皓形靈青 (蟹攝央去、效攝皓上、
梗攝青平合用)
- (22) 答頌 噴身神真
- (23) 玄旨頌 來咳哈
- (24) 贈同住歸寂頌 (24-1) 餘居書魚
(24-2) 喪宕樣漾嶂上養暢亮漾 (通用)
- (25) 勸學頌 安難安寒
- (26) 志守得破頌 (26-1) 問間山然仙 (同用)
(26-2) 何歌差麻 (果攝歌、假攝麻混用)
- (27) 辭見聞頌 稀微疑之 (同用)
- (28) 分明頌 足燭前光 (山攝先平、通攝燭入合用)
- (29) 遵古路頌 量詳香陽
- (30) 与董兵馬使說示頌 中東蹤鍾通東 (同用)
- (31) 專志頌 見霰變面變線 (同用)
- (32) 与學人宗教宗如 經青聲清 (同用)
- (33) 三句後意頌 無珠虞
- 226 靈雲 (1) 偈 枝支疑之 (同用)
(福州人、在福州) (2) 玄沙送師頌 常陽光唐王陽 (同用)
(3) 中塔頌 今深心侵
- 卷20 238 五冠山 (1) 龍樹偈 鉢色[聲]* 〈見寶林傳卷3〉
(高麗涇江人) (2) 古人云 乘證證
- 244 隱山 (1) 偈 兒知離支
(2) 洞山頌 道老皓
(3) 龍牙頌 安寒般桓看寒 (同用)
(4) 曹山頌 期之兒支 (同用)

(附錄二)《祖堂集》同音通用字

- (1) 符／扶 卷1 迦葉章：「載誕金光之子，結成金色之妻，果合前緣，深扶宿願。」(頁27/20)

案：此一段引自《寶林傳》卷1《迦葉章》所載張文成《摩訶大迦葉尊容碑》，而「扶」字《寶林傳》原作「俯」。二字並誤，當作「符」，與前句「合」爲對。「符」、「扶」音同，《廣韻》防無切，並母虞韻平聲；俯，方矩切，幫母麌韻上聲。「符」寫作「扶」爲同音假借，「符」寫作「俯」則爲聲母清濁之混用也。

- (2) 奕／液 卷3 荷澤章：「天寶中御史盧液，是北宗普寂門徒，奏會聚徒洛陽。」(頁110/159)

案：「盧液」即「盧奕」，見《舊唐書·忠義傳下·盧奕傳》：「(天寶)十一載，爲御史中丞。」奕、液音同，《廣韻》羊益切，入聲昔韻。

- (3) 振／震 卷3 慧忠章：「師在薰子谷時，麻谷來，邊師三巾，震錫三下。」(頁115/165)

案：「震」當作「振」。《景德傳燈錄》卷5《慧忠國師章》正作振。震、振音同，《廣韻》章刃切，去聲震韻。

- (4) 漏／陋 卷3 慧忠章：「無常來時，拋却殼陋子一邊著，靈臺覺性迴然而去，名爲解脫。」(頁124/171)

案：「殼陋子」，《景德傳燈錄》卷28《諸方廣語·慧忠國師語》作「殼漏子」。無著道忠《虛堂錄犁耕》卷20釋：「殼漏者，卵殼也，以比人身骸也。」漏、陋音同，《廣韻》盧候切，去聲候韻。

- (5) 顚／迪 卷4 藥山章：「因于迪相公問紫玉：『佛法至理如何？』」(頁170/228)

案：「于迪」即「于顚」，見《舊唐書》卷156、《新唐書》卷172。顚、迪音同，《廣韻》徒歷切，入聲錫韻。

- (6) 愈／庾 卷5 大顚章：「百寮拜賀聖感，唯有侍郎韓庾一人獨言：不是佛光。」(頁182/240)

案：「韓庾」即「韓愈」，事見《舊唐書·憲宗紀下》元和十四年條。愈、庾音同，《廣韻》以主切，上聲麌韻。

- (7) 惠／慧 卷5 龍潭章：「唯有餅師，每至食時，躬持餠餅十枚，以餉齋儉。如是不替數年，天皇(道吾和尚)每食已，常留一餅与之，云：『吾慧汝以蔭子孫。』」(頁187/246)

案：「慧」當作「惠」。兩字雖可通用，然此處義爲恩惠利人，慧則無此義。

- (8) 觀／官 卷6 洞山章：「師到百顏。顏問：『近離什麼處？』師曰：『近離湖南。』顏云：『官察使姓什麼？』師曰：『不得他姓。』」（頁232/297）

案：「官察使」，《景德傳燈錄》卷14《百顏明哲章》作「觀察使」，是。觀、官音同，《廣韻》古丸切，平聲桓韻。

- (9) 旅／侶 卷6 洞山章：「師曰：『四隣五舍，誰人無之？暫寄侶店，足什麼可怪？』」（頁243/306）

案：「侶店」即「旅店」，旅、侶音同，《廣韻》力舉切，上聲語韻。

- (10) 迢／調 卷6 洞山章：「問：『一切處不乖時如何？』師曰：『此猶是功勳邊事。有無功之功，子何不問？』僧曰：『無功之功，莫是那邊人也無？』師曰：『已後有眼人笑閤梨與摩道。』僧曰：『與摩則調然也。』師曰：『調然，非調然，非不調然。』僧曰：『如何是調然？』師曰：『喚作那邊人則不得。』僧曰：『如何是非調然？』師曰：『無弁處。』」（頁251/312）

案：「調然」即「迢然」。《五燈會元》卷13《疏山章》錄此話，並作「迢然」。此例亦見卷8幽棲章。迢、調音同，《廣韻》徒聊切，平聲蕭韻。

- (11) 豫／預 卷8 上藍章：「鍾陵大王統霸預章，迎師出府，構護國院，礼重爲師。」（頁335/408）

案：「預章」即「豫章」。鍾陵大王鍾傳，中和2年（883）爲江西觀察使，治洪州。江西，漢豫章郡。豫、預音同，《廣韻》羊洵切，去聲御韻。

- (12) 陽／揚 卷9 落浦章：「若不當揚曉示，迷子何以知歸？」（頁337/411）

案：「當揚」，《禪林僧寶傳》卷6《洛浦章》作「當陽」，是。陽、揚音同，《廣韻》與章切，平聲陽韻。

- (13) 懸／玄 卷9 落浦章：「玄河泛起雪花浪，無餓孤燈明暗宵。」（頁343/417）

案：「玄河」即「懸河」。卷1優婆塞多章淨修禪師讚：「辯瀉懸河」。本書「懸」多作「玄」，卷18《仰山章》「懸記」作「玄記」（頁686/815），卷20《五冠山章》「天地懸隔」作「天地玄隔」（頁739/880），「懸殊」作「玄殊」（頁752/888）等即其例。懸、玄音同，《廣韻》胡涓切，平聲先韻。

- (14) 卓／啄 卷9 韶山章：「汝有充天之氣，我這裏有啄地之錐。」（頁348/426）

案：「啄地之錐」當作「卓地之錐」。本書卷16《黃檗章》有「啄一下錐」句（頁613/732），卷19《香嚴章》有「卓錐之地」語（頁702/829）。卓、啄音同，《廣韻》竹角切，入聲覺韻。

- (15) 薰／勳 卷9 南際章：「問：『如何是納僧氣息？』師云：『還曾勳著你也無？』」（頁354/434）

案：「勳著」當作「薰著」。《景德傳燈錄》卷16正作「勳著」。「薰」、「勳」音同，《廣韻》許云切，平聲文韻。

- (16) 絳／瑤 卷9九峯章：問：「一筆丹青，爲什麼邈志公眞不得？」師云：「僧瑤却許志公。」（頁357/438）

案：《祖庭事苑》卷6：「僧瑤，瑤當作絳，音遙。張僧絳，吳人也。」本書五出「僧絳」，皆作「僧瑤」。龍牙頌第35首亦作「僧瑤」（《禪門諸祖師偈頌》卷上之上，續藏116）。

- (17) 盤／槃 卷9九峯章：「問：『大闡提人作何行李？』師云：『露刀擎劍。』僧曰：『擬殺何人？』師云：『凡聖祖佛，總須盡却。』僧曰：『盡後此人向什麼處合殺？』師云：『合槃裏合殺。』（頁362/441）

案：「合槃」當作「合盤」。本書卷5《石室章》有「開心垞子裏盛將來，合盤裏合取」句（211頁）。盤、槃音同，《廣韻》薄官切，平聲桓韻。

- (18) 采／彩 卷9烏巖章：「師垂問：『盡十方世界唯屬一人，或有急疾事，如何相告報？』廣利和尚對云：『任汝世界爛壞，那人亦不彩汝。』（頁365/448）

案：「彩」當作「采」，理睬義。采、睬古今字。彩即采之同音假借字。

- (19) 尉／慰 卷10玄沙章：僧曰：「與摩則太慰亦合先陀去也。」（頁374/456）

案：「太慰」指王延彬。延彬，天成4年（929）加檢校太尉（《泉州府志》卷40封爵志）。「慰」，「尉」之同音增旁誤字。

- (20) 中／忠 卷10長慶章：僧問忠塔：「如何是諸佛師？」（頁403/491）

案：「忠塔」即中塔和尚慧球，見本書卷12中塔章。此條又見《景德傳燈錄》卷21安國慧球章，云：「慧球，安國院第二世住，亦曰中塔。」「忠」，「中」之同音增旁誤字。

- (21) 凋／彫 卷11保福章：上座對云：「不逐四時彫。」（頁425/509）

案：此句引自傳大士頌。《善慧大士語錄》卷3頌：「有物先天地，無形本寂寥，能爲萬物主，不逐四時凋。」「彫」，「凋」之同音換旁誤字。

- (22) 灼／酌 卷11齊雲章：師云：「酌然瞻敬則有分。」（頁439/523）

案：「酌然」當作「灼然」。本書「灼然」十二例中二作「酌然」。「酌」，「灼」之同音換旁誤字。

- (23) 聞／文 卷11惟勁章：奏賜紫衣，號寶文大師矣。（頁439/528）

案：寶文大師號，《宋高僧傳》卷17、《景德傳燈錄》卷19並作「寶聞大師」。「聞」、「文」同音。

- (24) 儂／濃 卷11睡龍章：又述示學偈曰：「瞎眼善解通，聾耳却獲功。一體歸無性，六處本來同。我今齊舉唱，方便示汝濃。相傳佛祖印，繼續老胡宗。」（頁

443/535)

案：「汝濃」當作「汝儂」，蓋涉「汝」致誤。「汝儂」，即王觀國《學林》所云「江左人稱我汝，皆加儂字」也（卷4「方俗聲語」）。

- (25) 琢／啄 卷11中曹山章：僧曰：「如何是自家珍？」師云：「不啄不成器。」（頁445/539）

案：此條見『景德傳燈錄』卷20荷玉山慧霞玄悟大師章，「啄」作「琢」，是，當據改。

- (26) 朶／埤 卷12荷玉章：師云：「風吹耳埤。」（頁449/544）

案：此條見『景德傳燈錄』卷20荷玉山慧霞玄悟大師章，「耳埤」作「耳朵」，是也。

- (27) 還／環 卷13招慶章：問：「環丹一顆，點鐵成金；妙理一言，點凡成聖。請師點。」（頁484/583）

案：「環」當作「還」。語本宗密『圓覺經略疏』卷上之一：「還丹一粒，點鐵成金；真理一言，點凡成聖。」

- (28) 測／惻 卷13招慶章：問「菩薩如恒沙，爲什麼不能知佛智？」師云：「不見道『唯佛與佛，乃能知之』？」又云：「汝還當得摩？」學云：「爭奈不能惻得何？」（頁485/584）

案：「惻」當作「測」。「惻」，「測」之同音換旁誤字。

- (29) 掠／略 卷13招慶章：師云：「莫略虛！」（頁485/584）

案：「略虛」當作「掠虛」。本書卷7雪峯章有云：「莫只是傍家相徼賺說，掠虛悞人！」

- (30) 嶺／領 卷13福先招慶章：問：「昔日覺城東際，象王迴旋；今日閩領南方，如何提接？」（頁504/600）

案：「閩領」當作「閩嶺」。

- (31) 丞／承 德／得 卷14馬祖章：左丞相護得興（權德輿）撰碑文。（頁524/618）

案：本書三出「丞相」，皆作「承相」。「丞」通「承」，丞相謂承君治國之人也。權德輿撰「洪州開元寺石門道一禪師塔銘並序」（『權載之文集』卷21）。

- (32) 嘗／償 卷14杉山章：問：師提起蕨菜，問南泉：「這個太好供養。」南泉云：「非但這個，百味珍羞，他亦不顧。」師云：「雖然如此，个个總須償他始得。」（頁530/627）

案：「償」，『景德傳燈錄』卷6作「嘗」，是，當據改。

- (33) 腦／惱 卷15五洩章：石頭云：「受業在什麼處？」師不祇對，便拂袖而出，纔過門時，石頭便咄。師一脚在外，一脚在內，轉頭看。石頭便側掌，云：「從生

至死，只這個漢。更轉頭惱作什麼！」師豁然大悟。（頁563/670）

案：『景德傳燈錄』卷7作「又回頭轉腦作什麼！」「惱」，「腦」之同音換旁誤字。

- (34) 澧／禮 卷17岑和尚章：三聖和尚問：「承師有言：『百尺竿頭須進步』，百尺竿頭則不問，百尺竿頭如何進步？」師云：「朗州山，禮州水。」（頁644/770）

案：『景德傳燈錄』卷10長沙景岑章作「朗州山，澧州水」，是，當據改。

- (35) 縱／蹤 卷20五冠山章：逆順蹤橫。（頁750/887）

案：「蹤橫」當作「縱橫」。『祖庭事苑』卷1蹤橫條：「當从糸作縱。東西曰橫，南北曰縱。蹤，迹也，非義。」

《祖堂集》異文別字校證

——《祖堂集》中的音韻資料——

衣 川 賢 次

筆者撰寫此文的目的有二：第一，校訂《祖堂集》，還原正確的文本。《祖堂集》的版本只有一種，即高麗高宗 32 年（1245）刊刻的高麗本（高麗大藏經補版）。然此本含有較多的訛誤。訛誤的原因一般不外乎形誤跟音誤。禪宗語錄、禪宗燈史的文本，則以音誤爲多。本文對校訂《祖堂集》過程中檢出的異文別字材料（即有關資料中的記載裏的和《祖堂集》不同文字）從音韻學角度進行處理並給予說明發生異文別字的原因。第二，通過對異文別字的分析，推測唐末五代南方的一些實際音韻情況。唐末五代西北方音，已有研究利用敦煌發現的材料，解明了較爲實際的音韻情況；而同時代的南方，其材料目前只有徐鍇《說文解字繫傳》所附的南唐朱翱反切，缺乏能够反映出實際情況的材料。筆者利用禪宗燈史《祖堂集》的異文別字、所收偈頌押韻等新材料推測了南方或閩地的一些音韻特點（唐末五代的時代音韻和上古音的遺存）。